

# 敵討札所の靈驗

三遊亭圓朝

鈴木行三校訂・編纂

青空文庫



一席申し上げます、是は寛政十一年に、深川元町猿子橋際で、巡礼が仇を討ちま  
 したお話で、年十八になります繊弱い巡礼の娘が、立派な侍を打留めます。その助太刀  
 は左官の才取でございますが、年配のお方にお話の筋を承りましたのを、そのまゝ綴  
 りました長物語でございます。元榊原様の御家来に水司又市と申す者がござい  
 まして、越後高田のお国では鬼組と申しまして、お役は下等であります但し手者の多いお  
 組でございます。この水司又市は十三歳の折而親に別れ、お国詰になり、越後の高田で  
 文武の道に心掛けまして、二十五の時江戸詰を仰付けられましたので、とんと江戸表の様  
 子を心得ませんで、江戸珍らしいから諸方を見物致して居りましたが、ちようど紅葉時分  
 で、王子の滝の川へ往つて瓢箪の酒を飲干して、紅葉を見に行く者は、紅葉の枝へ瓢箪を  
 附けて是を担ぎ、形は黒木綿の紋付に小倉の襦高袴を穿いて、小長い大小に下駄穿き  
 でがらくやつて来まして、ちようど根津権現へ参詣して、惣門内を抜けて参りました  
 が、只今でも全盛でございますが、昔から彼の廓は度々潰れましては又再願をして又

立つたと申しますが、其の頃贅沢な女郎じやうろうがございまして、吉原の真似をして惣門内で八文字ちもんじで道中したなどと、天明の頃はだいふ大分盛んだつたと云うお話を聞きました。彼方あちら此方こちらを見ながら水司又市がぶらり〜と通掛りますると、茶屋から出ましたのは娼妓しょうぎでございましょう、大島田おおしまだはがったり横に曲りまして、露の垂れるような薄色の笄こうがいの小長いのを挿さし、鬢びんのほつれ毛が顔へ懸りまして、少し微醉ほろえいで白粉おしろい気のある処ところへぼつと桜色になりましたのは、別べつして美しいものでございまして。緋やまの山繭まゆの胴拔どうぬきの上に藤色の紋附すその裾模様すその部屋著むろさきじゆす、紫むらさき襦子じゆすの半襟はんえりを重ねまして、燃えるような長襦袢ながじゆばんを現あらわに出て、若い衆しゆに手を引かれて向うへ行きまます姿を、又市は一ひと目見ますと、二十五で血氣でございましてから、余念せんもなく暫しばらく見送つて居りましたが、又「どうも実に嬋せん娟けん窈よう窕たうたる美人びじんだな、どうも盛んなる所美人ありと云うが、実にないな、彼あのくらしいな婦人は二人とは有るまい、どうもその躡よろけながら赤い顔をして行く有様はたまどうも耐たらぬな、どうも実にはア美うくしい」

と思つて佇たずずんで居りますと、後うしろから女郎屋じやうやの若衆わかいしゆが、

若「えへ……」

又「何なんだい後うしろからげらく笑つて」

若「如何様いかさまでございます、お馴染なじみもございませうが、えへ……外様ほかさまからお尻の出な  
 いようにお話を致しましょう、えへ……お馴染もございませうがお手輕うか様に一晩お浮うかれ  
 は如何で、へいくくく」

又「何だい貴公は」

若「えへ……御冗談ばかり、遊女屋の若わかいもの者で、どうも誠にはやへいくく」

又「遊女屋の若者、成程これは何だね大分左右に遊女屋が見えるが、全盛の所は承知して  
 居いるが、貴公に聞けば分ろうが、今向うへ少し微酔で、顔へほつれ毛がかゝつて、赤い顔  
 をして男に手を引かれて行つた美人があるが、彼あれは何かえ遊女かえ、但たゞしは堅氣の娘の  
 ような者かえ」

若「へえ、只今へえ……御縁の深いことで、あれは手前方しよくのお職しよくから二枚目をして居ります  
 小増こましと申します」

又「はア貴公の楼名ろうめいは何と云う」

若「へえ……楼名、え、増田屋ましたやと申します」

又「成程根津で増田屋と申すは大分名高いと聞くが、左様かえ増田屋で今の婦人は」

若「小増と申します」

又「成程増田屋で増ましを付けるのは榊原の家来で榊原を名乗るようなもので」

若「いえ左様な大した訳でもござりませんか」

又「国から出たてゝ何も知らぬが、何かえ揚代あげだい金は何どのくらい致す、今の美人を一晩買  
う揚代は」

若「へい〜大概五拾疋びきでござりますが、あのお妓こさんは只今売出しで、拾もんめ疋で、お高い  
ようでございますが、彼のあくらいな子供衆しゅは沢山たんとはござりませんな、へい」

又「拾もんめ疋、随分値は高いが、拾もんめ疋出して彼のあくらいな美人を寝かそうと起そうと自由じゆにす  
るのだから、実に金銀は大切な物だのう」

若「えへ、まず兎も角もお上り遊あがばしては如何」

又「だが登あがりもしようが、婦人を傍そばへ置いて唯寝たぐる訳にも往いかんが、何か食しょくもつ物を取ら  
んではならんが、酒と肴はどのくらいな値段であるか承うわつて置おこう」

若「えへ……御存じ様でござりませう、おとぼけなすつて、お小さい台は五拾疋でござ  
ります、大きい方は百疋で、中には六百文やすぐらいのお廉やすいのもござります」

又「ふう百疋、成程よい遊女を揚げれば佳よいのを取らなければならんう、成程それでは  
酒は別べつだろうな」

若「へい召上りませんでも先一本は付けます」

又「百疋で着は何のくらいなのが付くな」

若「へ……おとぼけでは困りますな、大概遊女屋の台の物は極きまつて居りますが、小さい鯛が片へらなどで、付つけ合せの方が沢山あわでございませす」

又「それは高いじやアないか、越後の今町いままちでは眼の下三尺ぐらいの鯛が六十八文で買える」

若「御冗談ばかり仰しやいます」

又「厄介になろう」

若「有難う存じます、お揚あがんなさるよ」

「あいー」

とんくくと二階へ上ると引付座敷へ通しましたが、又市は黒木綿の紋付に袴を穿いた形なりで、張肘はりひじをして坐つて居ると、二階廻しが参りまして、

婆「おやお出いでなはい」

又「初めて、手前てまい水司又市と申す者、勝手てまいを心得ぬから何分頼む」

婆「何でございますねお前さん、瓢箪ひょうたんを紅葉の枝へ付けてお通んなはいましたねえ、滝の

川へ入いつしやつたの、御様子の好いいこと、云いつてお噂うわさをして居たのですよ」

又「左様か、お前は当家の家内かな」

婆「おや厭いやですよ、私は二階を廻まわす者です」

又「なに二階を廻まわす、この二階を」

婆「あれさ力持ちからもちじやアございませぬ、本当に小増さんをお名指なざしは苛ひどいじやアございませぬか」

又「何が苛いらい、買かいたいと思おもつたから登あがつたわ」

婆「本当に外とちで見染しめて揚あるのは一いばん縁えんが深こいと申まします、本当にお堅か過ぎますよ、お袴はかまをお取とりなさいよ」

と云いううちに小増こぞうがい出て参まりまして、引ひ付きも済すんで台たいの物ものが這は入いりますから、一い猪ちよ口くち遣やつて座敷ざしきも引ひけ、床とこになりなりましたが、素もとより田舎いんげ侍ざむらいでありますから、小増こぞうは宵よに顔かほを見みせたばかりで振ふられました。

翌朝門切よくあさもんぎれにならんうちにと支度を致しまして、

又「これく婆アく」

婆「厭だよ婆アなんてさ」

と云いながら屏風を開けて、

婆「お呼びなはいましたか」

又「いや昨夜ゆうべな些ちつとも小増は来ぬて」

婆「誠にねどうも、流行はやりつ妓こですから生憎あいにくお馴染なじみが落合おちあつてさ、斯こう折せの悪い時は仕様

がないもので、立込んでね」

又「左様かね、予かねて聞くが、初会はつかいは座敷切りと聞くが全く左様か」

婆「まあね然そう云いつた様なもので有りますから」

吉原の上等の娼妓しょうぎならお座敷切りという事も有りましたが、岡場所では左様なことは有りませんが、そこが国育ちで知りませんから、成程そうかと又四五日置いて来ましたが、また振られ、又二三日置いて来たが振つてく振ほ抜れかれるが、惚ほるといいうものは妙なものせなかで、小増が煙草を一ぷく吸付けてお呑みなはいと云つたり、また帰りがけに脊中せなかをぼんと叩いて、

小増「誠に濟まねえのだよ、今度屹度来ておくんなはい」

と云われるのが嬉しく思ひまして、しげく通いましたが、又市も馬鹿でない男でございますから、終には癩癩を発して、藤助という若者を呼んで居ります。

婆「藤助どん行つておくれ、小増さんも時々顔でも見せて遣れば好いのに、酷く厭がるから困るよ」

又「これく袴を出せ」

婆「おや誠にどうもお前はんにお氣の毒でね」

又「婆ア此処へ来い、どうも貴公の家は余りと云えば不実ではないか、一度も小増は快く私が側に居つたことはないぞ」

婆「何時でも然う云つて居るので、生憎と流行つ妓だからね、お前はん腹を立てては困りますよ、まことに間が悪いじやアねえか、お前はんの来る時にやアお客が落合つてさ、濟まねえとお歸し申した後でお噂して、一層氣を揉んで居りますのさ」

又「そんな事は度々聞いたが、最早二度と再び来ないが、田舎者には彼アいう肌合な氣象だから、肌は許さぬとかいう見識が有るから、お前が来ても逆も買通せぬから止せと親切に云つてくれても宜さそうなものだ、つべこべく馬鹿世辭を云つて、此の後二

度来ぬから宜いか、其の方達は余程不実な者だね、どうも」

婆「不実と云つたつて私達<sup>わつちたち</sup>のどうこうと云う訳には行きませんからさ、まことに自由にならないので」

藤助「へい、あのお妓<sup>こ</sup>さんは流行妓<sup>はやりっこ</sup>でございますから、お金で身体を縛つてしまいますから」

又「小増の身体を誰<sup>たれ</sup>か鎖で縛ると申すか」

婆「あれさ、小増さんに此方<sup>こつち</sup>で三十両出そうと云うと、彼方<sup>あつち</sup>で五十両出そうと云つて張合つてするのだから、まことに仕様がございませぬよ、流行妓<sup>はやりっこ</sup>でえなア辛いものでそれだから苦界<sup>くがい</sup>と云うので、察して気を長くお出でなさいよ」

又「成程是まで度々参つても振られる故、屋敷へ帰つても同役の者が：それ見やれ、迎も無駄<sup>とて</sup>じゃ、詰らぬから止せと云つて大きに笑われ、迎も貴公などには買遂げられぬ駄目だと云われたが、金づくで自由になる事なら誠に残念だから、幾ら遣<sup>や</sup>れば必らず私<sup>わし</sup>に靡<sup>なび</sup>くか」

婆「ねえ藤助どん、金づくで自由になればと云うが……まアねえ其<sup>そこ</sup>処は義理<sup>よこ</sup>づくだからね、お金をまアねえ二拾両も遣つて長襦袢でも買えと云えば、気の毒など云つて嬉しいと思つて、又お前<sup>ま</sup>はんに前<sup>まへ</sup>より情<sup>じやう</sup>の増す事が有るかも知れませぬよ」

又「婆アの云う事は採りあげられんが、藤助確と請合うか」

藤「それは義理人情で、慥にそれは是非小増さんがねえ」

又「然らば宜しい、今日は機嫌好く帰つて二十兩持つて来よう」

と笑つて、其の日は屋敷へ歸つたが、勤番者で他から金子を送る者もないから、大事の大小を質入して二十五金を拵らえ、正直に奉書の紙へ包み、長い水引をかけ、折熨斗を附けて金二十兩小増殿水司又市と書いて持つて参りまして、直に小増に遣わし、これから酒肴を取つて機嫌好く飲んで居たが、その晩も又小増が来ないから顔色を変えて怒りました。毎もの通り手を叩くこと夥しいが、怖がつて誰も参りません。

婆「一寸藤助どん往つておくれよ」

藤「困りますね」

婆「今日は中根はんが来て居るので、いゝえさ、どうも中根はんと深くなつて居て、中根はんが上役だから下役の足軽みたいな人の所へは行かないのだよ」

藤「困りますな、怒るとあの太い腕で撲れますが、今度は取捕まると何んな目に逢うか知れまいから驚きますねえ」

婆「私は怖いからお前一寸行つてお呉れよ」

藤「困りますね何うも……御免」

又「此方へ這入れ」

藤「どうも誠に」

又「何も最早聴かんで宜しい、再度欺かれたぞ、小増が来られなければ来ぬで宜しい、飲の食は手前したのでから払うが、今晚の揚代金殊に小増に遣わした二十金は只今持つて来て返せ、不埒至極な奴、斯様な席だから兎や角云わぬが、余りと申せば怪しからん奴、金を持つて来て返せ」

藤「何ともどうも私共には」

又「いや私どもと云つても手前何と云つた……弁まえぬか」

婆「一寸水司はん、生憎今日も差合があつて」

又「黙れ、婆アの云う事は採上げんが、これ藤助、其の方は何と申した、二十両遣わせば小増は相違なく参りますと申したではないか、男が請合つて、それを反故にする奴があるか、男子たるべき者が」

藤「中々男子だつて然ういう訳には参りませんので、この廓では女の子に男が遣われるので、私どもの云う事は聴きませんからね、どうも」

又「これ」

藤「あいた、痛うございます、何をなさる」

又「これ宜くも己を欺いたな、此奴め」

藤「あいた……いけません、遊女屋で柔術の手を出してはいけません、私どもの云う事を

聴くのではございませんから」

と詫びても聞き入れず、若者の胸ぐらを取つて捻上げました。

三

大騒ぎになりますと、此の事を小増が聞き、生意氣盛の小増、止せば宜いのに胴抜の形で自憎落な姿をして、二十両の目録包を持って廊下をばたく遣つて来て、障子を開けて這入つて来ました。又市は腹を立て居たが、顔を見ると人情で、間の悪い顔をしている。

小増「一寸又市さん何をするの、藤助どんの胸倉をとつてき、此の人を締殺す気かえ、遊女屋の二階へ来て力づくじゃア仕様がなないじゃアないか、今聞けばお金を返せとお云い

だね」

又「これさ返せという訳ではないが、お前が一度も来てくれんからの事さ、来てさえ呉れ、ば宜しい、今まで度々参つても、お前がついに一度も私に口を利いたこともないから、私はどうも田舎侍で気に入らぬは知っているが、同役の者にも外聞であるから、せめて側に居て、快く話でもしてくれ、ば大きに宜しいが、大勢打寄つて欺くから：斯様なことを腹立紛れにしたのは私が悪かつた」

小「悪かつたじゃアないよ、私はお前はんのような人は嫌いなもの、お前大層な事を云つてゐるね、金づくで自由になるような私やア身体じゃアないよ、二十両ばかりの端金を千両金でも出したような顔をして、手を叩いたり何かしてき、騒々しくつて二階中寝られやアしないよ、お前はんに戻すから持つて帰んなまし、お前はんのような田舎侍は嫌いだよ」

と云いながら又市の膝へ投付けて、  
小「いけ好かないよう、賢助だよう」

と部屋着の裾をぼんとあおつて、廊下をばたく駈出して行つた時は、又市は後姿を見送つて、真青に顔色を変えて、ぶる／＼慄えて、うーんと藤助の腕を逆に捻り

上げました。

藤「あいたくくく、あなた、あいた……そんな乱暴なことをしては困りますねえ、私わたくしな  
どの云う事を聞く妓こではありませんから」

又「田舎侍は厭いやだと云うは、素もとより其の方達も心得居おるうに」

藤「あいた……腕が折れます、一寸ちよつとおかやどん、小増さんを呼んで来てというに、あゝ  
いたくくくく」

大騒ぎになりましたが、丁度此の時遊びにまいって居たのが榊原藩の重役なかね中根善右衛門  
の嫡子ちやくし善之進ぜんのしんと云う者でございしますが、御留守居役《おるすいやく》の御子息で、ま  
だ二十四歳でございしますから、隠れ忍んで来るが、取巻とりまきは大勢居まして、

取巻「もし困るではございせんか、遊女屋の二階で柔術やわらの手を出して、若者わかいものに拳げんこ  
骨つをきめるといふ変り物でございしますが、大夫たいふが是にいらっしゃるのを知らないからの  
事さ、大夫のお馴染を知らないで通うぐらいの馬鹿さ加減はありません、あなた一寸ちよつと  
顔を見せると驚きますよ、ちよいと鶴の一と声で向うで驚きますよ、ね小増さん」  
小増「左様そうさ、一寸顔を見せてお遣やりなさいよう」

と大勢に云われますと、そこが年の往いかんから直すぐに立上りましたが、黒出くろでの黄八丈の

小袖にお納戸<sup>なんどげんじょう</sup>献上<sup>じょうけん</sup>の帯の解け掛りましたのを前へ挟みながら、十三間平骨<sup>ひらぼね</sup>の扇を持つて善之進は水司のいる部屋へ通ります。又市は顔を一寸<sup>ちよつと</sup>見ると重役の中根でございませすから、其の頃は下役の者は、重役に対しては一言半句<sup>いちごんはんく</sup>も答えのならぬ見識だから驚きました。後へ下つて、

又「是は怪しからん所で御面会、斯る場所にて何とも面目次第もござらん」

善「これこれ水司、何うしたもののじや、遊女屋の二階でそんな事をしてはいかん、此処は色里であるよ、左様じやアないか、猛き心を和ぐる廊へ来て、取るに足らん遊女屋の若い者を貴公が相手にして何うする積りじや、馬鹿な事じやアないか、殊に新役では有るし、度々屋敷を明けては宜しくあるまい、私などは役柄で余儀なく招かれたり、或は見聞かた／＼毎度足を運ぶことも有るが、貴公などは今の身の上で彼様な席へ来て遊女狂いをする事が武田へでも知れると直にしくじる、内聞に致すから帰らっしゃい」

又「まことに面目次第もございませせん、つい一夜参りましたが、とんと不待遇でござつて、残念に心得、朋友にも迎も田舎侍が参つても齒は立たぬなどと云われますから、残念に心得再度参りました処が、如何に勝手を心得ません拙者でも、余りと云えば二階中の者が拙者を欺きまして、あまり心外に心得まして……それ其処に立つて居ります、貴方のお

側に立つて居るその小増と申す婦人に迷いまして、金を持って来れば必らず靡くと申しますから、昨夜二十金才覺致して持つて参りますと、それを不礼にも遊女の身として拙者へ対して悪口を申すのみか、金を膝の上へ叩付けましたから残念に心得、彼様な事に相成りまして、誠に何うもお目に留り恐れ入りますが、どうか御尊父様へも武田様にも内々に願います」

## 四

善「左様か、この小増は私が久しい馴染で、斯ういう廓には意気地と云つて、一つ屋敷の者で私に出ている者が、下役の貴公には出ないものじや、そこが意気地で、少しは傾城にも義理人情があるから、私が買って居る馴染の遊女だから貴様に出ないのだから、小増の事は諦めてくれ、是は私が馴染の婦人だから」

又「へえー左様で、貴方のお馴染で、ふうー」

小「一寸水司はん、私の大事のね、深い中になつて居るお客というのは此の中根はんで、中根はんに出ている私がお前はんの様な下役に出られますかねえ、宜く考えて御覽なはい

よ、出たくも出られませんかからさ、又お前はんの様な人に誰が好いて出るものかねえ、お前顔を宜く御覧、あの己惚鏡うぬぼれかがみで顔をお見よ、お前鏡を見た事がないのかえ、火吹達磨ひふきだるまみたいな顔をしてさア、お前はんの顔を見ると馬鹿まくしくなるのだよう」

と云われるから胸に込上げて、又市逆せ上のぼつて、此度は猶強なほく藤助の胸ぐらを取つてうーんと締上げる。

藤「あなたいたい……私わたくしを、どう……」

又「黙れ、今中根様の仰せらるゝ事を手前存じて居おるか、一つ屋敷の者には出ない、上役がお愛しなさる遊女をなぜ己に出した」

藤「あいた……これはあなた気が遠くなりませす、お助け下さい、死にませす」

善「これく水司、あれほど云うに分らぬか、若い者を打ちやうちやく擲して殺す気か、痴たわけた奴

だ、左様な事をする武田へ云つてしくじらせるが何どうか、これ此の手を放さぬかく」

と云いながら十三間の平骨の扇で続け打うちにしても又市は手を放しませんから、月代際さかやきぎわの所を扇かの要なめの毀れる程強く突くと、額は破れて流れる血潮。又市は夢中で居ましたが、

額かからぼたりく血が流れるを見て、

又「はアお打擲あに遇あひまして、手前面部てまへへ疵きずが出来ました」

善「左様なまねをするから打擲したが如何致した、汝はな此の後斯様な所へ立廻ると許さぬから左様心得ろ、痴呆め、早く帰れ〜」

又「何も心得ません処の田舎侍でござつて、一つ屋敷の侍が斯様な所へ来て恥辱を受けますれば、その恥辱を上役のお方が雪いで下さることと心得ましたを、却つて御打擲に遇いまして残念でござりまする、只今帰るでござる、これ女ども袴と腰の物を是へ持て」

と急に支度をしてどん〜と毀れるばかりに階子を駈下りると、止せば宜い小増を始め芸者や太鼓持まで又市の跡を付けて来まして、

小「あれさ、お上役に逢つては一言もないからさ泣面してさ、泣面は見よい物じゃアないねえ、あの火吹達磨や、泣達磨や、へご助や」

とわい〜言われるから猶更逆上せて履物も眼に入らず、紺足袋のまゝ外へ出ましたが、丁度霜月三日の最早明近くなりましたが、霜が降りました故か霏深く立ちまして、一尺先も見分りませんが、又市は顔に流るゝ血を撫でると、手のひらへ真赤に付きましたから、

又「残念な、武士の面部へ疵を付けられ、此の儘には帰られん、たとえ上役にもせよ憎い奴は中根善之進、もう毒喰わば皿まで、彼奴帰れば武田に告げ、私をしくじらせるに違

ない、殊ことには衆人満座の中にて」

と恋の遺恨と面部の疵、捨置きがたいは中根めと、七軒町しちけんちやうの大正寺たいしやうじという法華ほつけで寺むらの向う、石置場いしおきばのある其の石の蔭かげに忍んで待っていることは知りません、中根は早歸りきんすけで、銀助ぎんすけという家来てまるに手丸てまるの提灯ちやうちんを提げさして、黄八丈の着物に黒羽二重の羽織うた、黒縮緬くろぢゆうろの宗十郎頭そうじゆうらう巾うずきんを冠かぶつて、要かなめの抜けた扇あふぎを顔へ当て、小聲うたいで謡うたいを唄うたいつて帰ります所へ、物も言わず突だしぬけ然けに、水司又市みづし一刀を抜いて、下男しもやうの持っている提灯あんどを切落すと、腕うでが冴さえて居りますから下男は向うの溝みぞへ切倒きりたされ、善之進ぜんしんは驚おどき後あとへ下さがつて、細身こまがの一刀を引抜いて、

善「な、何者」

と振り冠かぶる。

又「お、最前の遺恨思い知ったか」

と云う若氣わかしの至り、色に迷まよひまして身を果すと云う。これが発端はつたんでございませう。

## 五

水司又市が悪念の発しまする是れが始めでございます。若い中は色気から兎角了簡の狂いますもので、血氣未だ定まらず、これを戒むる色に在りと申しますが、頗る別嬪が膝に凭れて

「一杯お飲んなさいよ」

なぞと云われると、下戸でも茶碗でぐうと我慢して飲みまして煩うようなことが有りませんが、惚抜いている者には振られ、殊に面部を打破られ、其の頃武家が頭に疵が出来る、屋敷の門を跨いで帰れないものでございました。又市は無分別にも中根善之進を一刀両断に切つて捨て、毒食わば皿まで舐れと懐中物をも盗み取り、小増に遣りました処の二十両の金は有るし、これを持つて又市は越中へ逐電いたしました。此方は翌朝になりましてもお帰りがないと云うので、下男が迎いに参りますと、七軒町で斯様／＼と云う始末、まず死骸を引取り検視沙汰、殊に上役の事でございますから内聞の計にしても、重役の耳へ此の事が聞え、部屋住の身の上でも、中根善之進何者とも知れず殺害され、不束の至と云うので、父善右衛門は百日の間蟄居致して罷り在れという御沙汰でございますから、翌年に相成り漸く蟄居が免りましたなれども、最う五十の坂を越して居ります善右衛門、大きに氣力も衰え、娘お照と云うがございまして年十九に成りま

すから、これに養子を致さんではならんと心配致して居りましたが、丁度三月末の事、善右衛門が遅く帰りまして、

善右衛門「一寸お前ちよつと

妻「お帰り遊ばせ」

善「いや帰りにね武田へ寄つて来た」

妻「おや、大分だいぶんお帰りがお遅うございますから、何処どこかへお立寄と存じまして」

善「少し悦ばしい話があるが」

妻「はい」

善「斯こう云う訳だが、予てお前も知つての通り、昨年悴が彼あアいう訳になつて私も最もう勤とめは辛いし、大きに氣力も衰えたから、照とんに何な者でも養子をして、隠居して樂がしたい訳でもないが、養子を致さんではと思つて居た処が、幸いと武田の次男重じゅうじろう一郎が養子になるように相談きまが極まつたよ」

妻「おやまあそれは何どうも此の上もない事でございます、お屋敷中うちでも親孝行で、武芸と云い学問と云い、あんな方はございませぬ、評判の宜よい方でござりますねえ」

善「それに彼あれは武田流の軍学を能よくし、劍術は真影流の名人、文学も出来、役に立ちます

が、継母に育てられ気が練れて居て、如何にも武芸と云い学問と云い老年の者も及ばぬ、  
実に彼のくらしいの養子は沢山あるまい、此の上もない有難い事でのう、早く照をお呼びな  
さい」

妻「はい、お照や一寸此処へお出で、お父様がお帰りになったよ、さア此処へお出で」

御重役でも榊原様では平生は余り好い形はしない御家風で、下役の者は内職ばかりし  
て居るが、なれども銘仙の粗い縞の小袖に華美やかな帯をメ《し》めまして、文金の高  
鬚で、お白粉は屋敷だから常は薄うございますが、十九や二十は色盛り、器量好の娘お  
照、親の前へ両手を突いて、

照「お帰り遊ばせ」

善「はい……此処へお出で、今お母様にお話をしたが、お兄様は去年あの始末、お  
前にも早く養子をしたかと思つたが、親の慾目で、何うかまア心掛のよい智をと心得て居  
つたが、武田の重二郎が当家へ養子に来てくれる様に疾うから話はして置いたが、漸く今  
日話が調つたからお母様と相談して、善は急いで結納の取交せをしたいが、媒人は高  
橋を以てする積りで、嫁入の衣裳や何かお前の好みもあるう、斯ういう物が欲しい、櫛  
簪は斯う云うのとか、立派なことは入らぬが、宜くお母様と相談して、其の上で先方へも

申込むから宜いかえ」

照「はいお父様わたくし私わたくしに養子を遊ばす事はもう少しお見合せなすつて」

善「見合せる、其様そんな事はありません、何なんで見合せるのだえ」

照「はい私わたくしはまだあなた養子は早うございます、それに他人が這入りますと、お父様お母様に孝行も出来ません様になりますから、私も心配でございますから、何卒どうぞもう四五年お待ち遊ばして」

善「そんな分らぬ事を云つてはいけません、早く養子をして初ういまご孫の顔を見せなければ成りません」

妻「ほんとうに養子をしてお前の身が定まれば、お父様も私も安心する、双方に安心させるのが孝行だよ……まことにあなた何時いつまでも子供のようにございます……あんな好よい養子はございませんよ、家うちへいらつしやつてもあの凜りり々しいお方で、本当に此の上もないお前まへ仕合せな事だよ」

善「さア、はいと返辞をすれば直すくに結納を取交せるから」

照「はい、私わたくしはあの池いけの端はたの弁天様へ、養子を致す事を三年の間願掛がんがけをして禁たちました」  
善「そんな分らぬ事を言つては困りますよ、弁天へ行つて然そう云つて来い、願掛がんがけは致し

だが、親の勧めだからお願を破ると云つて来い、それで罰を当てれば至極分らぬ弁天と申すものだ、そんな分らぬ弁天なら罰の当てようも知るまいから心配はありませんよ、これ何時まで子供の様な事を云つて何うなります、私が約束して今更変替は出来ません、直様返事をおしなさい、これ照、困りますなア」

## 六

妻「貴方、そう御立腹で仰しやつてもいけません……何時までもお前子供の様で、養子をする云うものは怖いように思うものだけれど、私も当家へ縁付いた時は、こんな不器量な顔で恥かしい事だと否々ながら来ましたが、また亭主となれば夫婦の愛情は別で、お父様お母様にも云われない事も相談が出来て、結句頼もしいものだよ、あいとお云いよ、泣くのかえ」

善「なに泣くとは何事、泣くという事はありません、何だ」

妻「まあ其様にお怒り遊ばすな」

と無理に手を取つて娘の居間へ連れて行き、種々言含めたが唯泣いて計り居て返答を

致しませんのは、屋敷内うちの下役に白島山平しろしまさんべいという二十六歳になります美男と疾とうから夫婦約束をして居りました。遠くして近きは恋の道でございます。逢引する処が別にございませぬから、旧来家うちに奉公を致して居りましたおきんと云う女中が、上野町うえのまちに団子屋をして居るので、此の家うちの二階で山平と出会いますので、是が心配でございませぬから、おきんの所へ手紙を出しますと、此方こちらはおきんが山平を呼出しまして、二階で三鉄輪みつがなわで話をして居ります。

きん「どうも先せん達だつては有難うございます、貴方、あんな心配をなすつては困りますよ、お忙がしい処をお呼立て申しましたのは困った事が出来ましてね」

山「毎度厄介になりましたして気の毒で、今日は急に人だから何事かと思つて来たのだが、どう云うわけだえ」

きん「どう云うたつて実に困りますよ、何うしたら宜よかろうと存じまして、お照さまに御両親様から急に御養子を遊ばせと仰しやるので、嬢様は否いやだと云つて弁天様へ禁たつたと仰しやつたそうでござりますが、お父様が聴かぬので、一旦約束したから変替へんがえは出来ぬと云うので、仕方がないから私わたくしは養子をする気はない、どんな事が有つても自分が約束したからは何処迄どこまでも強情を張る積りだが、お父様が腹を切るの何なんのと云うから、寧いっそ身を投げ

て死んでしまおうと、小さいお子様の様な事を仰しやるので困りますよ、何か云えば直すぐに  
自害をするのなどと詰らん事を云うので困ります、私わたくしは思案に余りますから貴方をお呼び  
申したので」

山「ふう成程、そうして何方どつちらから御養子を」

きん「お嬢様の仰しやるには、白島様には云わぬ方が宜よいと仰しやいますが、あの武田重  
二郎様ね、それあの厭いやな氣の詰るお方で、私も御奉公して居るうち見ましたが、偏屈いっや  
な堅かた苦たしいね嫌な人で、実に困った訳でございませけれども、否いやと言切る訳にも往ゆき  
ませんから誠に心配していらつしやいます」

山「お照さん……この山平は江戸詰に成りまして間がない事で、これまでお引立ひきたてを蒙こうむ  
りましたは、実は武田の重左衛門じゆうざえもん様の御恩でござります、そのお家の御二男様が御養子の  
約束になつて居るものを、貴方が否いやと仰しやれば何なに故ゆゑに背そむくと、夫それより事が顕あらわれま  
すれば、拙者は屋敷を逐出おいだされる事になります、私わたくしの身は仕方がない事でございませが、  
あなた様の御尊父にも済まぬ事で、何卒どつぞ是れまでお約束は致しましたが、何卒親御の意を  
背くは不孝なり、あなたも世間へ済まぬことになりますから、只今までの事は水にあそば  
して、何うかあなた武田から御養子をなすつてください、実は只今まで私はお隠し申した

が、国表を立出でます時男子出産して今年二歳になります、国には妻子がございますので「照「えゝ」

と娘は驚きまして、じつと白島山平の顔を見て居りましたが、胸に迫ってわつとばかりに泣倒れました。

きん「あなた奥様があるの、おやお子さん方がお二人、まだ若いのに、おや然うでござい  
ますかねえ：お嬢さん白島様が御迷惑になりますから、お厭でもございませうけれども、  
思い切つて貴方、お厭でも御養子を遊ばせな、此の事が知れると物堅い旦那様だからきん  
もきんだ、長らく勤めて居ながら娘を二階で逢引をさせるとは不埒な女だと仰しやつて私  
が斬られるかも知れませんよ、ねえ彼ア云う御氣象ですから、ねえ御養子をして置いて時  
々お逢い遊ばせよう、然うすりやア知れやアしませんよ、あの釜浦様の御新造様みたい  
な、彼アいう事もありますから、宜いじやアありませんか、然う遊ばせよ」

山「誠に手前も夢の昔と諦めますから、申しお嬢様不実な者と思召すでござりましょ  
うが、この白島山平を可愛相と思召すなら、あなた親御様の仰しやる通り武田から御養  
子をなすつて下さい、只今も金の申す通り、お聴済みがなければ止むを得ず、手前どうも  
切腹でもしなければならん訳で」

きん「貴方ア切腹なさると仰しやるし、お嬢様は自害などと困りますねえ……お嬢様何う遊ばしますよ」

照「はい、それ程白島様が御心配遊ばす事なれば致<sup>いたしかた</sup>方<sup>かた</sup>がありませんから、それにお国に奥様もお子様もある事は私<sup>わたくし</sup>は少しも知りません、最<sup>も</sup>う身を切られるより辛うございますけれども、あなたのお言葉でございいますから、背<sup>そむ</sup>かず武田から養子致します」  
と云いながら、わつと泣き倒れました。

## 七

おきんも山平も安心して、

きん「宜く仰しやいました、それで何うでも成ります、またねえ時々お逢い遊ばす工夫もつきますから」

と漸<sup>よつや</sup>く身<sup>みのうえ</sup>上の相談をして、お照は宅へ帰つて、得心の上武田重二郎を養子にした処が、お照は振つてく振りぬいて同<sup>ひとつね</sup>衾<sup>ね</sup>をしません。家付の我儘娘、重二郎は学問に凝<sup>こ</sup>つて居りますから、襖<sup>ふすま</sup>を隔て、更<sup>ふけ</sup>るまで書見をいたします。お照は夜着<sup>よぎ</sup>を冠<sup>かぶ</sup>つて向うを向いて寝

てしまいます。なれども武田重二郎は智慧者でございませうから、私を嫌うなど思いながらも舅姑の前があるから、照やくと誠に夫婦中の宜い様にして見せますから、両親は安心致して居ります中、段々月日が立ちますと、お照は重二郎の養子に来る前に最う身重になつて居りますから、九月の月へ入つて五月目で、お腹が大きく成ります。若い中では有りがちでございませうから、まあ淫奔は出来ませんものでございませう。お照は懐妊と気が付きましたから何うしたら宜かろう、何うかお目にかゝり相談を為たいと、山平へ細々と手紙を認め、今日あたりきんが来たらしんに持たせてやろうと帯の間へ挿んで居りましたが、何処へ振落しましたか見えませんか、又細々と文を認めおきんに渡し、それから直におきんより山平へ届けましたので、九月二十日に団子茶屋へ打寄つたが、此の時は山平は真青になりました。

きん「もし白島様実に驚きましたよ、お嬢様は同衾を遊ばさないので、それだからいやアしません、同衾をなされば少し位月が間違つて居ても瞞かしますよ、何うしたつて指の先ぐらゐは似て居りますから、何うでも出来ますのを、振つてく振抜いて、同衾をしないので隠し様がありませんからさ、押して云えば仕方がないから、私は自害して死ぬばかり、私は二度と夫は持たない、親が悪い、無理に持たせたから当然然と仰しやるだけ

で仕方がありませんよ」

山「露顕しては止むを得ない、何うしても割腹致すまでの事で」

きん「貴方は又そんな事を云つて、仕様がございませぬ、それじゃア相談の纏まり様がございませぬ」

と彼れの是れのと云つて居りますと、折悪しく其の晩養子武田重二郎は傳助と云う下男を連れて、小津輕の屋敷へ行つて、兩國を渡つて帰り、御徒町へ掛ると、

重「大分傳助道が溼るのう」

傳「先程降りましたが宜い塩梅に帰りがけに止みました」

重「長い間待遠で有つたらう」

傳「いえもう貴方お疲れでございませう、御番退から御用多でいらしつて、彼方此方とお歩きになつて、お帰り遊ばしても直に御寝なられますと宜しいが、矢張お帰りがあると、御新造様と同じ様に御両親が話をしろなどと仰しやると、お枕元で何か世間話を遊ばして御機嫌を取つて、お帰り遊ばしても一口召上つて、ゆる〜お氣晴しは出来ませんで、誠に恐入りましたな」

重「何も恐入ることはない、私は仕合せだのう、幼年の時継母に育てられても継母が邪

慳けんにもしないが、氣詰りであつたけれど、当家へ養子に来てからは舅しゅうとこ御ごが彼の通り  
 好よい方で、此の上もない仕合せで」

傳「へえ私わたくしは旧来奉公致しますが、旦那様も御新造様もいかつい事を云わないお方で、誠  
 に私わたくしも仕合せで、実に彼あアいう方でございますから、斯か様なことを申しては恐入りますが、  
 若御新造様はすこしも御奉公遊ばさない、世間を御存じがない方でございますからな、あ  
 なたがお疲れの処へ、御両親様の御機嫌を取つてお長くいらつしやる時には、御新造様が  
 最もうお疲れだからと宜よい様に云つてお居間に連れ申して、おすきな物で一杯上げる様にお  
 氣が付くと宜よろしいが、余り遅くお帰りになるのが御意に入らぬのか知れませんが、つと  
 腹を立つたように、お帰りがあつても碌ろくにお言葉もかけない事がありますからな」  
 重「いゝや然そうでない、御新造は奉公せぬに似合わぬ中々よ能く心付くよ」  
 傳「へえ……何わたくしうも私わたくしも旧来奉公致しますが、あなた様には誠まことに何なんうも何とも済まぬこと  
 で、実に恐入つたことで、私は心配致しますが、だからと申して黙もくつていても何うせ知れ  
 ますからな」  
 重「何を」

傳「へえー、誠に何うも恐入つて申上げられませんが、実は貴方様に対して御新造様がな、

何うも何う云うものか、誠に恐入りますな」

重「大分恐入るが、何だい」

傳「へえ……申し上げませんければ他から知れますからな、却つて御家名を汚すようになりますから、御両親様も……また貴方の名義を汚す一大事な事でございますから、外の方様なら申し上げますが、あなた様でございますから何うか内聞に願ひ、その処は世間に知れぬうち御工夫が付きますように参りましょうかと存じますが、何うか御内聞に、何うも何とも恐れ入りました」

重「恐れ入つてばかりではとんと何だか分らんが、他の事と違つて家名に障ると、私自身は何うでもよろしいが、中根の苗字に障つては濟まぬが、何じやか言つてくれよ、よ、傳助」

## 八

傳「実は申上げようはございませませんが、もう往来も途切れたから申上げますが、御新造様は誠に怪しからん、密夫を拵え遊ばして逢引を致しますので」

重「ふう嘘を云え、左様な嘘をつくな決して左様な事は有りません、世間の悪口わるくちだらうから取上げるなよ、私わしが来ましてから御新造は些ちつとも他ほかへ出た事はないぞ、弁天へ参詣ゆに行くにも小女が付き、決して何処どこへも行つた事はない」

傳「それが有るのでへえ……実に恐入りますがな、不埒至極なのはお金と申す旧来勤めて居りました団子茶屋おきん、へい彼奴あいつが悪いので、へい、奉公して一つ鍋の飯を喰いました女でございますから宜く私わたしは存じて居りますが、口はべらく喋るが、彼奴が不人情で怪けしからん奴で、お嬢様を自分の家うちの二階で男と密会をさせて、幾らかしきを取る、何如いかにも心得違いの奴で」

重「そりやア誰たれがよ、誰が左様な事を云う、相手は何者か」

傳「相手はそれは何どうも、白島山平と云う彼あの下役の山平で、私わたしも外ほかの方なら云いせんが貴方様だから、お舅御様しゅうとごさまのお耳にはいらぬ様にお計らいが附こうと思つて申しますが、何うも恐入ります」

重「嘘を云え、白島山平は義氣正しい男で、役は下だが重役に優まさる立派な男じゃ、他人の女房と不義致すような左様な不埒者でない」

傳「それが誠に有るので、実は昨日な証拠を拾つて持つて居りますが、開封致しては相済

みませんが、捨置すておかれませんかから心配して開封いたしました、山平へ送る艶書を拾すていました」

重「どう見せろ」

傳「何うか御立腹でございましょうが内聞のお計らいを」

重「見せろ、どれもつと提灯を上げろ」

と重二郎艶書をひら開いて繰返し二度許ばかり読みまして、

重「傳助」

傳「へえー」

重「少しも存ぜぬで知らぬ事であつたがよく知らしてくれた」

傳「何うも恐入ります、それだから貴方様がお帰りになつても、御新造様が快よく御酒の

一と口も上げませんので、何うも驚おどきますすな」

重「この文の様子では懐妊致して居おるな」

傳「へえー何うも怪けしからん事でげすな」

重「団子屋のきんの宅に今晚逢引を致して居るな」

傳「へえ丁度今晚逢引致して居ります」

重「きんの宅を存じて居るなれば案内しろ」

傳「いらつしやいますか」

重「己が行こう」

傳「貴方いらつしやつても内聞のお計らいを」

重「痴けた事を云うな、武士たる者が女房を他人に取られて刀の手前此の儘では済まされぬから、兩人の居処へ踏込み一刀に切つて捨て、生首を引提げて御両親様へ家事不取締の申訳をいたすから案内致せ」

傳「是は何うも飛んだ事を云いました、是は何うも恐入りましたな、外様なれば云いませんが、貴方様でございませうから内聞に出来る事と心得て飛んだ事を申しました」

重「飛んだ事と申して捨置かれるものか、行け」

と云われ真青になつてぶる／＼顫えて傳助地びたへ踵が着きませんで、ひよこ／＼歩きながら案内をするうちに、団子屋のきんの宅の路地まで参りました。

重「これ／＼其処に待つて居れ、町家を騒がしては済まぬから」

傳「何うかお手打ちは御勘弁なすつて」

重「黙れ、提灯を消してそれに控え居れ」

傳「へえー」

重二郎は傳助を路地の表に待たして、自分一人で裏口の腰障子へぼんやり灯がさすから  
小声で、

重「おきんさんの宅は此方かえ」

と云うと二階に三人で相談をして居りましたが、

きん「はい魚政かえ…いゝえ此の頃出来た魚屋でございますから、器物が少ないので  
お刺身を持つて来ると、直に後で甘を入るからお皿を返して呉れろと申して取りに来  
ますので」

きんは魚屋と間違えて、

きん「少し待つてお出でよ」

と階子段を下りて、

きん「魚政かえ、今お待ちよ」

と障子を開けて見ると、魚屋とは思いの外重二郎が刀を引提げてずうと入り、

重「これ照が二階に参つて居るなら一寸逢わして呉れよ」

きん「いゝえ御新造様は此方へは入つしやいません」

重「入つしやいませんたつて参つて居るに相違ない、是に駒下駄があるではないか」

きん「あのそれは先刻あの入つしやいまして、それはあの、雨が降つて駒下駄では往けな  
いから草履ぞうりを貸してと仰しやいまして」

重「馬鹿な、痴たわけた事を云うな、逢わせんと云えば直じきに二階へ通るぞ」

きん「はい何卒どうぞ真ま平御免遊ばして、何うぞ御勘弁遊ばして、御新造様がお悪いのでは  
ございません、皆きんが悪いのでございませから何うぞ」

重「何だ袖へ縫すがつて何う致す、放さんか、えい」

と袖を払つて長い刀を引提ひつきげて二階へどんくくくと重二郎駈上ります。これから  
何う相成りますか一寸ひと息致いきして。

## 九

引ひきつゞ続づきましてお聴きに入れますが、世の中に腹を立ちます程誠に人の身の害になります  
ものはございません。殊ことに此の赫かツと怒いかりますと、毛孔けあなが開いて風をひくとお医者いしやが申し  
ますが、何どう云う訳か又極ごくく笑うのも毒だと申します。また泣な入いつて倒れてしまふ様に愁し

傷 致すのも養生に害があると申しますが、入湯致しましても鳩尾まで這入って肩は濡してならぬ、物を喰つてから入湯してはならぬ、年中水を浴びて居るが宜いと申しますが、嫌な事を忍ぶのも、馴れるとさのみ辛いものではござりませぬ。何事も堪忍致すのは極く身の養生、なれども堪忍の致しがたい事は女房が密夫を拵えまして、亭主を欺し遂せて、他で逢引する事が知れた時は、腹を立たぬ者は千人に一人もござりません。武田重二郎は中根の家へ養子に来てからお照が同衾を為ないのは、何か訳があろうと考えを起して居ります処へ、家来傳助がこれくと証拠の文を見せたから、常と違つて不埒至極な奴、さア案内しろと云う。傳助も飛んだ事を云つたと思つても今更仕方ありません。重二郎は団子屋のお金の家へ裏口から這入つた時はおきんは驚きまして、きん「何うか私が悪いからお嬢様をお助けなすつて下さい」と袖に縫るを振切つて、どんくと引提げ刀で二階へ上りました時に、白島山平もお照も唯だ恟り致して、よもや重二郎が来ようとは思わぬから、膝に凭れ掛つて心配して、何う致そう、寧その事二人共に死んで仕舞おうかと云つて居る処へ、夫が来たので左右へ離れて、ぴつたり畳へ頭を摺付けて山平お照も顔を挙げ得ません。おきんは是れは最う屹度斬ると思ひ、怖々ながら上つて来て、

きん「何卒御勘弁なすつて下さい、お願いでございます」

重「まあ、静かに致せ、そう騒いではいかん、世間で何事かと思われる、え、何も騒ぐ事はない……これさお照お前何故そんなに驚きなさる、私が来たので置へ頭を摺付け、頭を挙げ得ぬが、何と心得て左様に恐れて居るのか、何うも何とんと私には分りません……山平殿それでは誠に御挨拶も出来ぬから頭を挙げて下さい……きん、静かに致して下の締りを宜くして置くが宜いぞ、よう、賊でも這入るといかぬ」

きん「はい誠に何うも何ともお詫の致方もございません、お嬢様が何も私が旧来奉公を致し、他に行く処もないからきんや家を貸せと仰しやった訳でもございません、世間見ずで入つしやいますから人の目棲に掛つてはなりませんと私がお招び申したのが初めて、何卒、御勘弁なすつて」

重「これさ静かにしろよう、何だか分りませんが、それじゃア何か差向で居る処へ私が入つて来たから、山平殿と不義濫行でもして居ると心得て、私が立腹して此れへ上つて来た故、差向で居た上からは申訳は逆も立たぬ、さア済まぬ事をしたと云うので左様に驚きましたか、左様か、然うだろう、然うでなければ然う驚く訳はない、誠にきん貴様は迷惑だ……のう山平殿、役こそ卑いが威儀正しき其の許が、中々常の心掛けと申し、品

行も宜しく、柔和温順な人で、他人ひとの女房と不義などをうん…なア…為る様な非義非道の事を致す人でないなア…が差向で居おつたが過あやまりであつた、男女なんによ七歳にして席を同じゅうせずで、申訳が立たぬと心得て、山平殿も恐れ入つて居おらるゝ様子、照も亦済まぬ、何う言訳しても身のあかりは立つまい、不義と云われても仕方がない、身に覚えはないけれども是れに二人で居たのが過おり、残念な事と心得て其の様に泣入つて居おることか、何とも誠に氣の毒な、飛んだ処へ私が上つて来たのう、そう云う訳は決してないのう、きんきん「はいくゝ決して夫それはそう云う、あの、其そん様なども訳ではございませんから」

## 十

重「だからノウ、私わしが養子に來ぬ前から照の心掛は實に感心、云わず語らず自然と知れますな、と申すは昨年霜月三日にお兄あにさま様は何者とも知れず殺せつがい害され、如何いかにも残念と心得御両親は老体なり、武士の家に生れ、女ながらも仇あたを討たぬと云う事はないと心掛けても、何どうも相手は立派な士さむらいであり、女の細腕では討つ事ならず、誰たれを助太刀に頼もう、親切な人はないかと思ふ処へ、親ちかしく出入でいりを致す山平殿、殊ことに心底も正しく信実な人と見込んだ

から、兄の仇討あだうちに出立したいと助太刀を頼んだので有ろうが、山平殿は私には然そうはい  
 かん、御養子前ごやしんの大切の娘御を私が若い身みそらで女を連れて行くゆ訳には往いかん、両親の頼  
 みがなければいかんなどと申されて、迎むかへもお用いがないのを、止むを得ず助太刀をして下  
 さいと照が再度貴公に頼んだは実に奇特きせきな事で、頼まれてもまさか女を連れて行くゆ訳にも  
 いかず、此方こちらは只ひたすら管頼むと云う、是は何うも山平殿も実に困った訳だが、私が改めてお  
 頼み申す訳ではないが、山平殿、中根善之進殿を討つたは水司又市と私は考える、彼あの日  
 逐電して行方知れず、落書らくがきだらけの扇子あうぎが善之進殿の死骸の側に落ちて有つたが、その  
 扇子は部屋で又市が持つていた事を私は承知して居いるから、敵かたきは私の考えでは又市に相違  
 なし、お国表へ立廻る彼あアいう悪い心な奴、殊に腕前うでまへが宜しいから何どんな事を仕出し出でかすか  
 も知れん、故に私が改めて貴公に頼むは、何うか隠おんみつ密みつになつてお国表へ参つて、貴公が  
 何うか又市を取押えて呉れんか……照お前は何処どこ迄も又市を探たずねて討たんければならぬが、  
 私から山平殿と一緒に下さいとは、何うも養子に來て問もなし、頼む訳には表おもてむ  
 向きいから、お前はお父様とつさまやお母様つかさまへの申訳わたかしに、私も武士の家へ生れ女ながらも  
 敵討を致したい故、池の端の弁天様へ、兄の仇あだを討たぬ中うちは決して良人おとこを持ちませんと命  
 に懸けての心願である処へ、強たつて養子をしろと仰しやるから養子をしたが、重二郎とは

未だ同衾ひとつねを致しませんのは、是まで私が思い立った事を果さずば、何うも私が心に濟みません、神に誓つた事もあり、仇討あだうちに出立致す不孝の段はどの様にもお詫致す、無沙汰で家出致す重々不埒はお宥ゆるし下さいと、文面は私が教えるから私の云う通りに書きなさい、また山平殿は……貴公に俱ともに行つて下さいとは云われませんが、山平殿は国表へ参つて彼を取調べ、助太刀をしてお照が仇討をして歸る時、貴公も共に其の所へ行合ゆきあわし、幸い助太刀をして本意を遂げさせしと云つてお歸りになれば、貴公の家は何うか潰つぶさぬ様に致そう、重二郎刀に掛けても致すから、二人へ改めて頼む訳にはいかんが、然うして仇を討たせて望のぞみを叶えてやつて下さい……お前は奉公した事がないからお父様お母様に我儘を云うが、山平殿は親切なれども長旅の事、我儘な事を云つて山平殿に見捨てられぬ様に中好なかよう、なさ若もし捨てられては仇は討てず、亦これから先は長い旅、水も異かわり気候も違うから、詰らん物を食して腹を傷いためぬ様にしなさい、左様そうじゃアないか、何でも身を大切に帰つて来てくれなければ困りますぞ、縦たえあゝは仰しやるが、二人で居たから密通と思召おぼしめすに違ちがひない、密通もせぬに然う思われては残念と刃物三昧でもすると、お父様お母様に猶な更た濟らみませんぞよ、必ずとも道中にて悪い物を食して、腹あたに中ならぬ様にしなさが宜よい  
のう、お照」

と五月いつつきになるお照の身重の腹を、重二郎に持つて居ります扇でそつと突かれた時は、はつとお照は有難涙ありがたなみだに思わず声が出て泣伏しました。

## 十一

山平も面目なく、

山「何なにとも共申訳はござらぬ、重々不埒至極な事拙者……」

重「いゝや少しも不埒な事はござらん、国表に於て又市が何んな事を為るか知れん、万一重役を欺あざむき、大事は小事より起る譬喩たとえの通りで捨置かれん……お父様お母様へも書置したを認めるが宜よい……硯箱すざりばこを持つて来な」

きん「はい」

重「硯箱を早く」

きん「はい」

重「何なんだ是は、松魚節箱かつおぶしばこだわ」

きん「はい」

と漸く硯箱を取寄せて、紙筆を把らせましても、お照は紙の上に涙をぼろ／＼こぼしますから、墨がにじみ幾度も書損ない、よう／＼重二郎の云う儘に書終り、封を固く致しました。

重「これは私がお母様の何時も大切に遊ばす彼の手箱の中へ入れて置く……きん、何うも長い間度々照が来てお前の家でも迷惑だろう、主人の娘が貸してくれと云うものを出来ぬとは義理づくで往かんし、親切に世話をしてくれ忝ない、多分に礼をしたいが、帰り掛であるから、是は誠に心ばかりだが世話になつた恩を謝するから」

きん「何う致しまして私がそれを戴いては済みません、何うかそれだけは」

重「いゝや、其の替り頼みがあるが、今日私が来て照と山平殿に頼んで旅立をさせた事は、是程も口外して呉れては困る、少しも云つてはならぬよ、口外して他から知れ／＼ば、お前より外に知る者はないから抛なくお前を手に掛けて殺さなければならんよ」

きん「はい／＼／＼どう致しまして申しません」

重「じゃア宜しい、さア山平殿、照早く表へ出なさい、宜しいから先に立つて出なさい」

二人は何事も只だ有難いと面目ないで前後不覚の様になつて、重二郎の云う儘に表へ出に掛る。台所口の腰障子を開け、

重「大きに厄介になつた……さア心配しなくも宜い、出なさい」

照「はい……金や長々お世話になりました」

きん「それじゃア直ぐに遠い田舎へいらつしやいますか、親切にあゝ仰しやつて下さるか  
ら、本当に敵を討つてお出でなさいよ」

照「誠に面目次第もございません」

重「口をきいてはいかん、さア〜」

と二人を連れて出ると、傳助は提灯を持つて路地に待つて居りまして、

傳「誠に何うも宜く御勘弁なすつて」

重「これ静かに致せ、兩人を手討に致し他を騒がしては宜しくないから」

傳「へい……」

重「人知れぬ処へ行つて兩人とも討果すから袂を押えて遁さぬように」

傳「へえ……へ宜しゆう」

重「これ提灯を腰へさせ」

傳「へい」

と兩人の袂を押えて重二郎に従つて、池の端弁天通りから穴の稻荷の前へ参りますと、

重「これく、もう往来も途切れたな」

傳「へえー何うぞ御勘弁の出来ます事なれば願ひとう、私は斯う云う事とは心得ませんで」  
重「静に致せ、照、山平、不埒至極な奴、予て覚悟があるう、それへ直れ」

と云いながらすらりと長いのを抜きましたから、二人は彼アは云つて出たが、是で手討にされることかと覚悟をして、両手を合わせ頸を伸ばして居る。

重「女から先ず先へ斬らなければならん、傳助広小路の方から人が来やアしないか」

傳「いゝえ」

と覗う傳助の素頭を、すぽんと抜打にしましたが、傳助は好い面の皮。

重「あゝいや驚かんでも宜しい、主人の事を有る事無い事告口を致す傳助、家に害をなす奴、此処で切殺せば誰も知る者はない、試切か何かに遭つたのだろうで済んでしまう」

と小菊の紙を出して血を拭い、鞆に納め、有合せの金子を出して、

重「多分に持参すれば宜かったが、今まで心得なかつた故、ほんの持合せで二十金ある、路銀の足しにも成るまいが、是でお前が仇を討つて帰つてくれんでは、私が一生不孝者で終らんければならん、お前の家も絶えてはならん、照も実に道に背いた女と云われるもお

前の心一つであるぞよ……我儘者だが何卒面倒を見て下さるようにお頼み申すぞ」  
 山「あゝ忝かたじけのうござる」

と重二郎の心底なこ何とも申し様もございませぬから、貰いました路銀を戴きます。

重「達者で行つて参れよ」

とちやらく雪駄せったばき穿ゆで行くのを、二人は両手を合せて泣きながら見送ります。重二郎は深い了簡がある事で、其の儘屋敷へ帰りましたが、二人は何うしても仇を討たんでは帰られません。これから仇討出立に相成りますが、一寸ちよつと一息つきまして。

## 十二

諸さてお話は二に分れまして、水司又市は恋の遺恨で中根善之進を討つて立退たちのきました。本もとはと云えば増田屋の小増と云う別嬪からで、婦人に逢つては何どんな堅い人でも騒動が出来ますもので、だがこの小増は余程勤めに掛つては能よく取った女と見えて、その事を後あとで聞いて、

小増「彼あの時私があゝ云う事をした故斯こう云う事になったのだろう、中根はんは可愛相な

事をした、気の毒な」

とくよく／＼鬱ふさぎまして見世を引いて居りますから、朋輩は

「くよく／＼しないでお線香でも上げて、お前まはんお題目の一遍もあげてお遣やんなはい」

と勧められ、くよく／＼して客を取る気もなく情じやうのある様な振ふりをするも外見みえかは知れませ

んが、皆来ては悔くやみを云う。処が翌年になつて風ふと来た客は湯島六丁目藤屋七兵衛と云う

商あきゆうど人、糸紙いとかみを卸おろす好よい身代で、その頃此の人は女房なくなが亡つて、子供二人ありまして

鬱ふさいで居るから、仲間の者が参会の崩れ

「根津へ行つて遊んで御覧なさらんか、ちようど桜時で惣門内を花魁おいらんの姿で八文字はちもんじを

踏むのはなか／＼品が好く、吉原も跣足はだしで、美くしいから行つて御覧なさい」

と誘ゆわれて行くと、悪縁と云うものは妙なもので、増田屋の小増は藤屋七兵衛の敵あいかた娼ちよつ

に出る、藤屋七兵衛の年は二十九だが、品が好い男で、中根善之進に似ている処ちよつから一

寸と初会よに宜く取つたから足を近く通う氣になり、女房はなし、遠慮なしに二会うらなじみ馴染なをつ

け、是から近ちかしく来るうち互あに深くなり、もう年季あとは後二年と云うから、そんなら身請みうけし

ようと云い、大金を出して其の翌年の二月藤屋の家うちへ入る。手に採とるな矢張野に置れんげけ蓮

華草そ、家いえへ入ると矢張並の内儀おかみさんなれども、女郎おに似合あわぬ親切れんげに七兵衛の用をする

が、二つになるお繼つぎという女の子に九つになる正太郎しょうたろうという男の子で悪戯いたずら盛り、可愛  
 がつては居りませうけれども、何どうも悪態をつき、男の子はいかんもので、  
 正おらとこ「己ん処のお母かあはお女郎おいらだ、本当の好よい花魁おいらではない、すべた女郎おいらだ」  
 なんとと申しますから、

増「小憎らしい、此の子供がきは悪態をつく」

と頬ほ片ぺたを捻つねる、股たぶらを捻る、女郎は捻るのが得手かむろで、禿かむろなどに、

「此の子供がきアようじれつてえよ」

など、捻るものでございます。正太郎を其の如くに捻つたり打ち擲ちやくを致しますから痣あざ  
 だらけになります。さア奉公人は鬣ひいきをする者もあり、又先の内儀せんおかみさんが居れば斯こんな事はな  
 いなどと云い、中には今度の内儀は惣菜あちらこちらの中に松魚かつおぶし節みりんに味淋みりんを入れるから宜いいなどと小  
 遣づかいを貰もらうを悦ぶ者もあり、小僧あちらこちらも彼方あちらこちらへ付きまして内うちがもめます。先妻は葛西かさいの  
 小岩井村こいわいむらの百姓ぶんげい文左衛門ぶんざえもんの娘むすめで、大根だいこん島しまという処あそこに浅井あさい様と云うお旗はたもと下したがございま  
 して其の処へ十一歳から奉公をして居りましたから、江戸言葉になりました、それに極ごく堅かた  
 い人で、家を治めて居りました処ところが、天あま死しを致いたしましたけれども、田舎は堅いから娘を  
 嫁かじつ付けますと盆暮ぼんぼるには屹きつと参りますが、此方こちらでは女房にようぼうが死んでからは少しも音信おとづれをしな

い、けれども、向うには二人の孫があるので、柿時には柿を脊負つて婆様が出掛けて来ます。

婆「はア御免なせえ」

男「へいお出でなさい、久しくお出でなさいませぬね」

婆「誠に無沙汰しました、皆は変りねえか」

男「へい皆変る事もござりません：あの坊ちゃん田舎のお婆さんがお出でなすつたよ」

と云うと嬉しいから、ちよこくと駈出して来て、

正「お婆さんおいで」

婆「何うした、毎度来てえ〜と思つても忙しくて来られねえで、汝が顔を見てえと思つて来たが、なにかお繼は達者か、なにか店へも出ねえが瘡瘡したか、然うだつてえ話聞いた、それ汝がに柿を持って来た、はア喰え」

正「柿、有難う、田舎のお婆さんが柿を持って来てくれると宜いって然ういつて居たが、お父さんが、あのまだ青いから最う少したつて、お月見時分には赤くなるからつてそう云つたよ」

婆「何だか知らねえがお母が異つて何うせ旨くは治るめえ、汝が憎まれ口でも叩いて、何

うせな家うちもうなやにやア往いくめえと文ぶん吉きちも心配して居るが、何うも仕方がねえ、早く女親おんなに別れる汝おれだから、何うせ運よは好よくねえと思つて居るが、何でも逆さからわずにはいゝと云つて居ろよ」

## 十三

正「はいゝて云つて居るの、あのねえお手習てならひに往いくのも六つの六月から往いくと宜いいて云つたけれども早いからてね、七つの七月から往いく様ようになつたから、先せんにはお弁当べんたうなんぞも届とどけて呉くれるのだが、今度のお母つかさんが来てからは然そう往いかないの、お父おとうさんが何ど処どこかへ行いつてもお土産みやげに絵えだの玩おも具ぐだの買かつて来たが、此この頃ころは買かつて来こないでお母おつかさんの物もの計ばり簪かんざしだの櫛くしだのを買かつて来て、坊ぼくには何なににも買かつて来てくれないよ」

婆ばあ「汝おれのような可愛かわいい子こがあつても子こに構かまわず後のち妻さいを持もちてえて、おすみの三回忌さんかいぎも経へたねえうち、女房にようばうを持もつたあから、汝おれよりは女じよ郎らうの方が可愛かわいいわ……虐いじめるか」

正「怖ころしく虐いじめるの、縁側えんがはから突つき飛としたり……こんなこんなに疵きずが有あるよ、あのね裁縫しんこが出来できないに出来る振ふをして、お父おとうさんが帰かへると広ひろげて出来る振ふをして居るの、お父おとうさんが出でて

行くと、突然片付けて、豌豆が好きて、湯呑へ入れて店の若衆に隠して食べて居るから、お母さんお呉れつて云つたら、遣らないと云つてね、広がって居るから縫物を踏んだら突飛して此処を打つて、顛へ疵が出来たの」

婆「呆れた、大い疵があるに気が注かねえで居た、それで汝黙つて居たか、父に云わねえか」

正「云つた、云つたけれどもお母さんが旨く云つて、おのお前の着物を縫っていると踏んだから、いけないと云つたら、態と踏んだから縫物を引張つたら滑つて転んだつて然ういって嘘をつくの、先のお母さんが生きていると宜いんだけれども、お婆さんの処へ逃げて行こうと思つた、連れてつて呉れねえか」

婆「おゝ連れて行かねえで、見殺しにする様なもんだから、可愛そうに、汝に食わせべえと思つて柿を持つて来たゞ」

正「あのね、麦焦が来ても、自分で砂糖を入れて塩を入れて搔廻してね、隠して食べて、私には食べさせないの、柿もね、皆な心安い人に遣つて坊には一つしか呉れないの、渋くツていけないのを呉れたの」

婆「それは父に汝いうが宜い」

正「云つたつていけない、いろんな嘘をついて云つけるからお父さんは本当と思つて、あのお母さんは義理が有るのだから大事にしなければならぬ、優しくすれば増長する、今からそれじゃアいけねえつてねえ、一緒になつてお父さんが拳骨で打つて痛いやア」

婆「あれえ一緒になつて、呆れたなア本当にまア、好え、七兵衛どんに己逢つて、汝だけはお婆さんが連れて行く、田舎だアから食物了ねえが不自由はさせねえ、十四五になれば立派な処へ奉公に遣つて、藤屋の別家を出させるか、然うでなければ己が方の別家えさせるから一緒に行くか」

正「行きたいやア、だから田舎で食物が無くつてもお母さんに抓られるより宜いから行くよ」

七「何方かお出でなすつた……おやお出でなさい、榮二郎お茶を持って来てお婆さんに上げな、田舎の人だから餅菓子の方が宜いから……宜くお出でなすつたね、お噂ばかり致して居りまして、此方から一寸上らなければ成らんですが、何分忙がしいので店を空けられないで、御無沙汰ばかり、まア此方へ」

婆「はい御免なせえ、御無沙汰アして何時も御繁昌と聞きました、文吉も上らんではないねえつてえ云いますが、秋口は用が多いで参り損なつて済まねえつてえ噂ばかりで、お前さ

んも達者で」

七「まことに宜くお出でなすった、帝釈様へお詣りに行こうと思つて、帰りがけにお寄り申そうとお梅とも話をして居たが……お梅」

梅「おや宜く入つしやいました、宜く田舎の人は重い物を脊負つてねえ」

婆「はい御無沙汰、はい己が屋敷内に実りました柿で、重くもあるが何うかまア渋が抜けたら孫に呉れべえと、孫に食わしてえばっかりで、重えも厭わず引提げて来ましたよ……はア最う構わず、飯も食つて来ましたから、途中で足い勞れるから蕎麦ア食うべえと思つて、両国まで来て蕎麦ア食つたから腹がくちい、構つて下さるな……七兵衛さん、私参つて相談致しますが、惣領の正太郎は私が方へ引取るから」

七「何で、何ういう訳で」

十四

婆「何ういう訳もねえ、おらが方へ来てえだ云うが、おらが方へ置きたくはねえが、お前様ア留守勝で家の事は御存じござんねえが、悪戯は果すかは知らねえが、頑是がねえ

十にもなんねえ正太郎だから、少しぐれえの事は勘弁して下さい」

七「あれさお婆さん極りを云つて居るぜ、来ると愚痴を云うが、私の子どもの、奉公人も付いて居るわね……正太は又田舎のお婆さんに何か云つつけたな」

正「何も云ツつげやアしない、お婆さんが彼方へ連れて行くてえから行きてえや」

七「行きたいと」

婆「何ういう訳で大事の親父をまず捨て、己が方の田舎へ来てえ、不自由してもと兎心にも思うは能くくだんべえと思うからお呉んなさえ、縁切でお呉んなさえ」

七「そんな馬鹿な事を云つてはいけません」

婆「何故そんならぞんぜえに育てるよ」

七「ぞんざいに育てはしませんよ」

梅「旦那……正太郎が云ツつけたのでお婆さんは然うと思つて居るのでしよう、私だつても頑是がないから、それは彼れも我儘を致しますが、邪慳に育てることは出来ません、仏様の前も有りますから、私も来たての身の上で私が邪慳に育てるようなことは有りませんよ」

婆「邪慳にしないでえ、これが顎の疵は何うした、なぜ縁側から突落した、お女郎だ

アから子を持つたことが無えから、子の可愛い事は知りますめえが、あんたに子が出来て御覧なさえ、一つでも打くことは出来ねえよ、辛いから兎心にも己ア方へ行きてえと云うのだ、おらは正太を此処へは置かれましねえよ」

七「お婆さん何処までも正太は連れて行くと云うが、家督させようと云うので何う有つても遣らぬてえば何うする」

婆「遣らぬと云えば命に掛けても連れて往きやすべえ、打つたり擲えたりして疵を付けるような内へは置かれやしねえじやアごさんねえか、何処へ出てもお代官様へ出ても連れて行くだア、はア」

七「そんな事を云つて……正太手前お婆さんの方へ行きたいか」

正「行きたいや」

婆「それ見なさえよ、善く云つた、何うあつても縁切で」

七「そんなら上げましよう、其の代り何ですぜ、お前さんの処とは絶交ですぜ」

婆「絶交でも何でも連帰りやすべえ」

七「行通いしませんよ」

婆「当りまえ、おらア方で誰が来べえ、お前さんのような女房が死んで一周忌も経たねえ

中、女郎を買つて子供に泣きを掛けるような人では、何んな事が有つてもお前さんの側へは参りませんよ、碌な物も喰わせねえでは了」

梅「あゝ云うことを云つて、正太が云ツつけるからですよ」

婆「何云つたつて是が皆な知つて居らア、何だ、さア正太来い」

と中々田舎のお婆さんで何と云つても聴きません。到頭強情で、正太郎を負つて連れて歸つた。さア一つ災が出来ますと、それからとん／＼拍子に悪くなります。

## 十五

翌年湯島六丁目の藤屋火事と申して、自宅から出火で、土蔵二戸前焼け落ち、自火大から元の通り建てる事も出来ませんで、麻布へ越しましたが、それから九ヶ年過ぎますと寛政四壬子年麻布大火でござります。市兵衛町の火事に全焼と成りまして、忽ちの間土蔵を落す、災難がある、引続き商法上では損ばかり致して忽ち微禄して、只今の商人方と異つて其の頃は落るも早く、借財も嵩み、仕方が無いから分散して、夫婦の中に十歳になりますお繼という娘を連れて、行く処もなく、越中の国射水郡高岡

と云う処に、萬助まんすけという以前の奉公人が達者で居ると云うから、これを頼って行き、大工町いくちようという片側町かたかわまちで、片側はお寺ばかりある処へ荒物店あらかものみせを出し、詰らぬ物売って商い致す中うちに、お梅もだん／＼慣れまして、外ほかに致方いたしかたも無いから人仕事ひとしごとを致しますし、碌には出来ませんが、前町まえまちは寺が多いからお寺の仕事をします。和尚さんの着物を縫つたり、納所部屋なつしよべやの洗濯をしたり、よう／＼と細い煙りを立てまして居ります中、お話は早いもので、もう此の高岡へ来ましてから三年になりますが、大工町に宗慈寺そうじじという真言宗の和尚さんは、永禪えいぜんと申して年三十七でございます。此の人は誠に調子の宜い和尚さんで、檀家の者の扱いが宜しいから信じてまして、畳を替える本堂の障子を張替はりかえる、諸処を修繕するなど皆檀家の者が各番かくばんに致す、田舎寺で大黒の一人ぐらいは置くが、この和尚は謹慎つくしみのよい人故仕事はお梅を頼み、七兵衛が来ると調子宜くして、永「お前は以前もとたいけ大家と云うが、災わざわいに遭あつて微祿して困るだろう、資本もとては沢山は出来ぬが十両か廿両も貸そう」

と云つて金を貸す。苦し紛れに借ると返せないから言訳に行くと、永「もう十両も持つて行け」

と三四十両も借財が出来ましたから、お梅は大事にしてはお寺へ手伝てつたいに行き宜く勤め

ます。ちようど九月節句前、鼠木綿の着物を縫上げて持つて行くと、人が居ないから台所から上り、

梅「あの眞達さん、庄吉さん……居ないの、何方も入つしやいませんか」

永「誰じゃ」

梅「はい」

永「お、お梅さんか、此方へ来なさい」

梅「はい、まことに御無沙汰致しました」

永「い、や最う何うも、もう出来たかえ、早いもう、今ねえ皆使に遣つたゞ、眞達も庄吉も居ないで退屈じゃア有るし、それに雨が降つて来た故」

梅「い、え大した雨でもございません、どうと来るようで又あがりそうでございますよ」

永「そうかえ、檀家の者も来ぬから一人で一杯遣つて居たのよ、お、着物がもう出来たか、好う出来た」

梅「お着悪うございましょうが……お着悪ければ又縫直しますから召して御覧なさいまし」  
永「好う出来た、一盃酌いで呉れんかえ、何ぼう坊主でも酒の酌は女子が宜え、妙なものだ、出家になつても女子は断念出来ぬが、何うも自然に有るもので、出家しても諦められ

ぬと云うが、女子は何うも妙に感じが違う」

梅「旨いことを仰しやること、あなた此の間の松魚節味噌ね、あれは知れませんが又にて来ましょう」

永「あれか、旨かった、あれ宜ええのう……一盃遣りなさい」

と一盃飲んでお梅に献さす、お梅が飲んで和尙に献さす。その中酒うちの酔えいが廻まわつて来まして、

永「眞達は帰りませんわ、大門だいもんまで遣つたが、お梅はんお前もまア一昨年もとから前町へ来て、彼あのようにまア夫婦暮よして宜よく稼いぎなさるが、七兵衛さんは以前もと大家の人ですが、運う悪く田舎へ来てなア氣の毒じや、なれど此の高岡は家数やかずも八千軒もある処で、良よい船ふな着つきの処ところじやが、けれども江戸御府内にいた者は何処どこへ行つても自由の足りぬものじや、さぞ不自由は察さしますぞよ……お梅はん私わしをお前忘れたかえ、覚えて居いまいのう」

十六

梅「はい覚えてと仰しやるは」

永「私わしの顔を忘れたかえ、十三年も逢あわぬからなア」

梅「そうでございますか、じやア旦那江戸にいらつしやいましたことが有るの」

永「お前は以前根津の増田屋の小増という女郎だね」

梅「あれ不思議な、旦那何うして知れますの」

永「何うしたつて、それは知れる、忘れもしない十三年前、九月の月末からお前の処へ私も足を近く通つた、私は水司又市だが忘れたかえ」

梅「おやまア何うも、旦那然う仰しやれば覚えて居ますよ、だけれどもお髪が變つたから些とも分りませんよ……何うもねえ」

永「何うもたつて私は忘れはせんぜ、お前此処へ来ると直ぐ知れた、若いうち惚れたから知れるも道理、私は頭ア剃こかして此の宗慈寺へ直つて、住職して最う九年じやアが、斯うなつてから今まで女子は勿論腥い物も食わぬも皆お前故じやア」

梅「私ゆえとは」

永「忘れやアしまい、お前が斯様じやア、榊原藩の中根善之進は間夫じやアからと云うて、金を私の膝へ叩き付けてな忘れやアしまい」

梅「あれ昔の事を云つては困りますね、年の往かない中は下らないもので、女郎子供とは宜く云つたもので、冥利が悪いことで、その冥利で今は斯うやつて斯う云う処へ来て、

貧乏の世帯にわく／＼するも昔の罰と思つて居りますよ」

永「丁度あのそれ忘れやアせんで、あの時叩付けられたばかりでない、大勢で悪口云われ、田舎武士と云つて、手前などが女子を買つても惚れられようと思つては押が強いなどと云つて、重役の権を振つて中根が打擲して、扇子の要でな面部を打割られたを残念と思つて、私は七軒町の曲角で待伏して、あの朝善之進を一刀に切つたのは私じゃアぜ」

梅「あれまアどうも」

永「宜えか、斯う打明けた話じゃが切つてしまつて眼が醒めて、あゝ飛んだ事をしたと思つたがもう為てしまい是非がない、とても屋敷には居られない、外に知己がないから風つと思ひ付き、此処に伯父が住職して居るから金まで盗んで高飛びし、頭を剃こかして改心するから弟子にしてと云うて、成らぬと云うを強て頼み、斯う遣つて今では住職になつて、十三年も衣を着て居るもお前故じやないか、人を殺したのもお前故じや」

梅「何うもねえ、然うで、何うもねえ、何うもねえ、元は私が悪いばかりで中根さんも然ういう事になり、罪作りを仕ましたねえ」

永「七兵衛さんは知るまいが、金を貸すもお前故だ、是まで出家を遂げても、お前を見て

私は煩惱が発つて出家は遂げられませんぜ」

梅「お前さん……あれ、何をなさる、いけませんよ、眞達さんが帰るといけません、あれ」  
 永「私ももう隠居しても宜えじやア、どの様な事が有つても此処は離れやアせんじや、後住を直して、裏路の寂しい処へ隠居家ア建て、大黒の一人ぐらいあつても宜えじやア、七兵衛さんが得心なれば何うでもなる、此方へ来て金も沢山貯めて居るが、嫌かえ、私はお前故斯う遣つて人を殺して出家になり、お前が又来て迷わせる、罪じやアないか」  
 とぐつと手を引き、お梅の脊中へ手を掛けて膝を突寄せた時は、お梅はあゝ嫌と云うたら人を殺すくらい悪僧、どんな事をするか知れぬ、何うかして此処を切抜け様と心配致すが、此の挨拶は何うなりますか、一寸一息つきまして。

十七

藤屋の女房お梅は、十三年振で凶らずも永禪和尚に邂逅しまして、始めの程は憎らしい坊主と思いましたがなれども、亭主が借財も有りますから一か遁れと思いましたが、固より汚れた身体ゆえ、何うかして欺し遂せて遁れようと言いくるめて居ります中に、度々

参ると、彼方でも親切に致しますも惚れて居りますから、何事もお梅の云う通りに行届き、亭主は窮して居りますから、固より不実意の女と見えて、永禪和尚の情にひかされて宗慈寺へ日泊を致す様に成りましたが、お梅は年三十になりますから少ししがれて見えますが、色ある花は匂い失せずの譬え、殊に以前勤めを致した身でございますから取廻しはよし、永禪和尚の法衣を縫い直すと申して、九月から十月の中頃まで泊り切りで、家はお繼という十二歳になる娘ばかりで、一日も帰つて来ませんで、まことに不都合だから、藤屋七兵衛は腹立紛れに寺へ来て見ると、台所に誰も居りません。

七「庄吉さん……お留守でげすか……御免なせえ」

と納所部屋へ上つて、

七「開けても宜うがすか……おや眞達さんも誰も居ない、何処へお出でなさつた……旦那様お留守でげすか、お梅は居りませんか」

と納所部屋から段々庫裏から本堂の方へ来ると、本堂の後に一寸した小座敷がございまず、此処にお梅と二人で差向い、畜生めという四つ足の置火燵で、ちんく鴨だか驚だか小鍋立の楽しみ酒、そうつと立聴をするとお梅だから、七兵衛はむつと致しますのも道理、身代を傾け、こんな遠国へ来て苦勞するも此の女ゆえ、実に斯う云うあまツち

よとは知らなんだ、不実な奴と癩癬が込上げ、直ぐに飛込んで髻を把つてと云う訳にもいきません、坊主ですから鉄鍋の様に両方の耳でも把るか、鼻でも削ごうかと既に飛込みに掛りましたが、いや〜お梅もまさか永禪和尚に惚れた訳でも無かろう、この和尚に借金もあり、身代の為にした事かと己惚て、遠くから差配人が雪隠へ這入った様にえへん〜咳払いして、

七「御免なさい」

永「お、誰かと思うたら七兵衛さん、此方へお這入りなさい」

七「へい御無沙汰を致しました、お梅が毎度御厄介に成りまして」

永「いゝやお前も不自由だろうが綿入物が沢山有るので、着物を直すにもなア、あまり暮の節季になると困るから、今の中にと云うてな斯うやって精出してくれる、私も今日は好い塩梅に寺に居て、今気がつきるから一杯と云うて居たが、好い処へ来たのう、相手欲しやの処へ幸いじやアのう、さア一杯、さア此方へ這入りなさい」

七「へい：有難うございます、お梅時々家へ帰つて呉んな、のう子供ばかり残して店を明ツ放しにして、頑是ねえお繼ばかりでは困るだろうじやアねえか、此方さまへ来ていても宜いが、家を空あきでは困るから云うのだ」

梅「あゝ、だからさ、もう沢山たんとお仕事もないから私は一寸ちよつと帰ろうと思つたが、けれどもねえ、綿入物もして置こうと思つて、二三日に仕舞になると思つて、一時いちどきに慾張つて縫つて居るのさ、さぞ不自由だろうね」

七「不自由だつて此方こちらさまでも仕事は夜でも宜いいやな、昼の中うち店を明ツ放しにして、年も往いかねえ子供を置いて来て居ては困るからな、それに此方では夜の御用が多いのだろうから夜業よなべしごと仕事にしねえな、昼は家で店番をして夜だけ此方さまへ来きねえな、おれも困るからよ」

永「あゝそれは然そうじゃア、内は夜で宜よい、まア詰らん物じゃアが一杯遣りなさい」

七「有難う……此のお座敷は今まで存じませんでした、こんな小座敷はないと思つて居りました、へえ此の頃お手入で、なるほど斯こう云う処がなければ不自由でしょうね、大層お庭の様子が違いましたな」

永「あゝ彼処あそこに墓場が有るから参詣人が有るで、墓参りのお方に見えぬように垣根かこして囲つたので」

七「なるほど左様で、墓場から覗のぞかれては困りましようね、旦那は薬喰いと云うが、此の頃は大層腥なまぐさ物を喰あがりますが、腥物を食つたつて坊様が縛られる訳でもないからねえ、

あたりまえ  
当然で、旨い物は喰った方が宜うがすね」

永「はい実はな時々養いに喰るじや、魚喰うたとて何も咎めはないが、仏の云うた事じやアから喰わぬ事に斯う絶つて居るが、喰うたからつて何も其の道に違うてえ訳ではないのよ」

七「然うでしょうね、これは然うでしょう、些とは精分を付けなければなりませんね、旦那今日は御馳走に成ります積りで」

永「左様ともね」

七「実は旦那お願いが有りますが、お前さんにも拝借致しましたし、その上こんな事を云つては済みませんが、包を脊負つて僅か旅籠町を歩いたぐらいでは何程の事も有りませんで、此の頃は萬助の世話で警女町へ行きますが、旅籠屋も有りますから些とは商いも、警女町だけにまア小間物は売れますが、荒物屋じやア仕様がございません、それに今度金沢から大聖寺山中の温泉の方へ商いに行きたいと思ひますのさ、就ては小間物を仕込みたく存じますが、資本が有りませんから、拝借のあるに願つては済みませんが沢山は入りません、まア五十両有れば山中の温泉場へ行つて、商いに少し利があれば金沢で物を買つて来る、大きい方の商いは今までに覚えが有りますので、元私はお梅も知つて居ますが、

奉公人の十四五人も使った身の上で、此奴は今は婆アですが若い中に了簡違いをして、此奴が来たからと云う訳でも有りませんが此様に零落して、斯う云う処へ引込み、運の悪いので、する事なす事損ばかり、誠に旦那済まねえが御鼻屣序でに五十兩貸して呉んなさいな」

## 十八

永「貸して遣ろうとも、お前が資本にするなれば貸しましょう、宜いわ、宜いが然う云う事は緩くり相談しなければならん、何の様にも相談しよう……お、酒が無くなったが折角七兵衛さんが来てのじゃ、酒がなければ話も出来ぬ、お梅さん御苦労ながら、門前では肴が悪いから重箱を持って替女町へ往つて、うまい肴を買って七兵衛さんに御馳走して……お前遠くも替女町へ往つて来て呉れんか、とてもうまいものは近辺にはないからのう」

梅「じゃア往つて来ましょう」

七「往つて来ねえ、御馳走に成るのだから……旦那え、お梅も追々婆アに成りましたが、あの通りの奴でね、また私も萬助より他に馴染がないので心細うございます、お梅も此方

へ上るのを楽しみにして居ります、旦那可愛がって遣つて、あんな奴でも一寸泥水へ這入つた奴で、おつう小利口なことをいうが、人間は余り怜愍ではないがね、もし旦那、お相手によければ差上げますぜ、だが上げる訳にもいきませんか、私も苦勞を腹一杯した人間ですから、旦那が私を鼻屑にして下されば、話合いで貴方は隠居でもなすつてねえ、隠居料を取つて樂に出来るお身の上に成つたら、その時にやア御不自由ならお梅は仕事に上げツ切にしても構わねえという心さ」

永「そりやまさか他人の女房を借りて置く訳には往かんが、仕事も出来る大黒の一人も置きたいが、他見が悪いから不自由は詮事が無いよ」

七「もしそれはお前さんの事だから屹度差上げますよ、それにお梅はお前さんに惚れて居りますぜ、ねえ宗慈寺の旦那様は何うも御苦勞なすつたお方だから違う、あれでお頭に毛が有つたら何うだろうなんぞと云いますぜ」

永「こりや、その様な詰らぬ事を云うて」

七「それは女郎の癖が有りますから……浮気も無理は無いのです、もう酒は有りませんか」

永「今来るが、私はねえ酒を飲むと酒こなしを為なければいかぬから、腹こなしを為る、

お前見ておいで」

と藁草履わらぞうりを穿はいてじんじん端折はしよりをして庭へ下りましたが、和尚様のじんじん端折は、丸帯まるぐけの間へ裾すそを上から挟はさんで、後鉢巻うしろはちまきをして、本堂の裏の物置から薪割まきわりの柄えの長いものを持つて来て、ぽかんと薪を割り始めましたが、丁度十月の十五日小春風こはるなぎで暖かい日でございます。

七「旦那妙なことをなさるね」

永「いや庄吉は怠おろそかにいかぬから私わしが折おり々割くるのさ、酒を飲んだ時はこなれて宜いいよ」

七「なるほど是れは宜ようございましょう、跣足はだしで土を踏むと養生くすりだと云いますが、旦那が薪を割るのですか」

永「七兵衛さん薪炭を使わんか、檀家から持つて来るが、炭は大分だいぶん良い炭じゃア、来て見なんせ……此方こつちやに下駄ごが有るぞえ」

七「何処どこに下駄ごが」

永「それ其処そこに見なさい」

七「成程これは面白い妙なりな形で、旦那の姿すがたが好いいねえ、何うもあなた虚飾みえなしに、方丈様とか旦那様とか云われる人の、薪を割るてえなア面白いや」

永「七兵衛さん、先刻お前、私におつう云掛けたが、お前はお梅はんと私と訝しな事でも有ると思つて疑つて居やアせぬか」

七「旦那もし、私が疑ぐるも何もねえ、貴方が隠居なさればお梅を上切りにしても宜いで、疾うに当人も其の心が有るのだから、その代りにねえ貴方」

永「おい／＼私はお前はんのな女房を貰い切りにしたいと何時頼みました」

七「頼まねえと、頼んでも宜いじやアねえか、吸涸しではお氣に入りませんかえ」

永「これ私も一箇寺の住職の身の上、納所坊主とは違うぞえ、それはお前はんがお梅さんと私が訝しいと云うては、夫ある身で此の儘には捨置かれんが」

七「捨置かれんたつてお前さんも分りませんね、お梅はお前さんと何うなつて居ると云うのは眼が有りますから知つては居ますが、何も苦勞人の藤屋七兵衛知らねえでいる氣遣いはねえのさ」

永「こりや私は覚えなぞ、え、や何う有つても、そんな事をした覚えないわ」

と大声を揚げて云うより早く、柄の長い大割という薪割で、七兵衛の頭上を力に任せ、ずうーんと打つと、

七「うーん」

と云いつゝ虚空を掴んで身を顫わしたなりで、只た一打に致しましたが、これが悪い事を致すと己の罪を隠そうと思うので、また悪事を重ねるのでございますから、少しの悪事も致すもので有りません。少しの悪事でも隠そうと思つて又重ねる、又其の罪を隠そうと思つては悪事を次第々に重ねて猶また悪事に陥ります。毛筋ほどでも人は悪い事は出来ませんものでございます。永禪和尚は毒喰わば皿まで舐れと、死骸をごろ／＼転がして、本堂の床下へ薪割で突込みますのは、今に奉公人が帰つて来てはならぬと急いで床下へ深く突入れました。

## 十九

お繼という七兵衛の娘は今年十三になりますが、孝心な者でございます。母親が居りませんに、また父親が見えませんか、屹度宗慈寺様へ行つて居るので有ろうと、自分も何時も此の寺へ参りますと、和尚に物を貰つて可愛がられるから度々参りますので、勝手を存じて居りますから、

繼「お父様は居りませんか、お母さんは」

と納所部屋を捜しても居りません。すると本堂の次が開いて居りますから、其処へ来ると草履ぞうりが有りますから庭へ下りまして、

繼「おや和尚様お母さんは居りませんか、お父様は」

と屈こんで云いましたが、女の子は能よく頭かしらを斯こう横にして下を覗のぞく様にして口を利くものでございますが、永禪は只見ると飛んだ処へ来た、年は往いかぬが伶俐りこうな娘、こりや見たなと思つたから、物をも云わず永禪和尚柄の長い薪割を振上げて追掛おっかけたが、人を殺そうという劍幕けんまく、何ともどうも怖いから、

繼「あれえ」

ばた／＼／＼／＼／＼／＼と庭を逃げる、跡を追掛けて行き、門の処まで追掛け、既に出ようとする時お梅が帰つて来て、

梅「まあ旦那何うなすつたよ、みつともないよ」

永「お、宜いい処へ来た」

梅「もし何ですよ、お繼はキエ／＼と云つて駈ゆけて往ゆきましたが、貴方もみつともないよ  
跣足はだしでさ」

永「一寸お前ちよつと此こ処へ来な……お梅はん、お繼が逃げたから最もう是までじゃア、詮しよ事が

ない、さア私も最早命はない、お前も同罪じゃでなア、七兵衛さんはお前と私の間を知つて五十両金の無心、二つ三つ云合うたが、知られては一大事、薪割でお前の亭主を打殺したぜ」

梅「あれまアお前さん、何だつてねえ」

永「さアく殺す気もなかったが、是も仏説で云う因縁じゃア、お前はんに迷つたからじやア、お前は藤屋七兵衛さんを大事に思う余り私の云う事を聴いたろうが、お繼が駈けて来て床下を覗いてお父様はと云うたから、見たと思うて追掛けたが、お繼を欺して共に打殺し、私と一緒に逃げ延びて遠い処へ身を隠すか、否じゃアと云えば弑心じゃア、お前も打殺さなければならん」

梅「何だつてまア、そんな事を云つたつて、お繼はお前さんが可愛がるから仮令見たつて、よもや貴方が親父を殺したとは気が付くまいと思ひますから、其処がまだ子供だから分る氣遣は有りませんよ、私が篤くり彼の子の胸を聞きますからさ」

永「じゃアお前が連れて来れば宜い」

梅「まアお待ちなさい、当人を連れて来て全く見たなら詮方もないが、見なければ殺さなくつても宜いじゃアないか」

永「知らぬければ宜えいが、ありやお前の実ほんの子じや有るまいが」

梅「だつて三歳みっつの時から育て、異ちがつた子でも可愛ちがいと思つて目を掛けましたから、彼あの子も本当の親の様にするから、私も何うか助けとうございますわ、あれまア何うでもするから待つて下さいよ」

と話をして居る処へ寺男が歸つて来て、

庄吉「は、只今歸りました」

永「お、歸つたか」

男「へえー彼方あつちやさま様へ参めえりますと何れ此方いざこつちやから出向でむかかれました、えずれ御相談致あしますと、そりやはや何事も此方でむかから出向かまうれましてと斯かまう様にしばくと申されまして、宜しくと仰せ有りましたじやと」

永「お、手前あのなに何へ行つて大仏前へ行つてな、常陸屋ひたちやの主人あるじに夜よになつたら一寸ちよつと

和尚わしやうが出て相談あひだんが有るからと云うて、早く行つて」

男「はい左様さやか、行いて参まりますと」

永「お梅早く先へ歸りな」

梅「じやア私は先へ歸ります」

永「潜かに今宵忍んでお前の処へ行くぜ」

梅「そうして死骸は」

永「しい、死骸で庭が血だらけに成つてゐるから、泥の処は知れぬように取片付けて置いた、なそれ、縁の下へ彼の様に入れて置いたから知れやアせん、江戸と違つて犬は居ず、埋めるはまア後でも宜い、お前は先へ帰りな」

梅「はい〜」

と云いますが、お梅は此処に長居もしませんのは脛に疵持ちや笹原走るの譬えで、直に門前へ出まして、これからお繼を捜して歩きましたが、何処へ行つたか頓と知れなかつたが、漸く片原町の宗円寺という禅宗寺から連れて来ました。この宗円寺の和尚さんは老人でございましてからお繼を可愛がりますので、此の寺に隠れて居りましたのを連れて帰り、

梅「まアお前何処へ行つて居たかと思つて方々捜したよ」

繼「はい宗円寺様へ行つて居たのでございませわ」

梅「何でお前逃出したのだよ」

繼「あのお母様怖いこと、宗慈寺の和尚様が薪割を提げて殺して仕舞うつてね、怖くつて

一生懸命に逃げたけれど、行く処がないから宗円寺様へ逃込んだの」

梅「お前本当じゃアないよ、嚇かしだよ、からかったのだね」

繼「いゝえ、おからかいでないの、一生懸命の顔で怖いことく」

梅「一生懸命だつて、お前を可愛がつて御供物や何か下さる旦那さまだもの、ほんのお酒の上だよ」

繼「然う、私やねお父様を捜しに往つたの」

二十

梅「お父様はあのお商いも隙だから、あの金沢から山中の温泉場の方へ商いに往つて、事に依つたら大阪へ廻つて買出しを致したいからと云つて、些とばかり宗慈寺様からね資本を拝借したのだよ、そうして買出しがた／＼お商いに往つたから、半年や一年では帰らないかも知れないよ、その代り確かり仕入れて、以前の半分にも成れば、お繼にも着物を拵えて遣られると云つて、お前が可愛いからだね」

繼「そう、お父様が半年も帰らないと私は一人で寝るの」

梅「宜いじゃないか、私が抱いて寝るから」

繼「嬉しい事ね、あの他処の子と異つて私は小さい時からお父様とばかり一緒に寝ましたわ、お母さんと一緒に寝られるなら何時までもお父様は帰らないでも宜いの」

梅「然うかえ、私と寝られ、ばお父様は帰らないでも嬉しいとお思いかえ、然うお云いと誠にお前がなア憫然で、なに可愛くなつてね、どんなに私が嬉しいか知れないよ、本当に小さいうちから抱いて寝たいけれども、何だか隔てゝいる中で、己が抱いて寝るとお父さんに云われたが、お前の方から抱つて寝たいと云うのは真に私は可愛いよ」

繼「私も本当に嬉しいの」

梅「あのお前私がお膳立するから、お前仏様へお線香を上げなよ、お父様へ、いえなにお先祖様へ」

とお梅は不便に思いますから膳立をして、常と異つてやさしくお繼に夕飯を食べさせ、あとで台所を片付けてしまい、

梅「お繼お前表口の締りをおしよ」

繼「はい」

とお繼は表の戸締りを為ようと致しますると、表から永禪和尚が忍んで参りまして、

永「お梅く」

梅「はい今開けます、旦那でございますかえ」

と表を開る。永禪が這入るを見るとお繼は驚きまして、

繼「あゝれ」

と鉄切声で跣足でばたくと逃出しますので。

永「あゝ悔りした、何じやい」

梅「今お前さんの顔を見てお繼が逃出したので」

永「おゝ左様か、お繼は最前の事は何うじや、死骸を隠した事は怜悧だから見たで有ろう」

梅「いゝえ見ませんよ」

永「いや見たじや」

梅「見やアしませんよ、お前さんは心配していらつしやるが大丈夫ですよ」

永「然うかえ」

梅「お父様はと聞きますからお父様は山中の温泉場から上方へ往つたから、一二年帰らないと云つたら、私に抱かつて寝られゝば帰らないでも宜いと云います、お父さんは何処へ往つたと聞くくらいだから知りませんよ」

永「知らぬか」

梅「大丈夫でございます、知る氣遣きづかいないと私は見抜いたから御安心なさいよ」

と云うので、是から亭主が無いから毎晩藤屋の家へ永禪和尚忍んで来ては逢引を致します。心棒しんぼうが曲りますと附いて居る者が皆みなな曲ります、眞達という弟子坊主が曲り、庄吉という寺男が曲る。旅魚屋たびさかなやの傳次でんじという者が此の寺へ来て、納所部屋でそろく天下御制禁せいきんの賭博いたずらを為す、怪けしからぬ事で、眞達は少しも知らぬのに勧められて為ると負ける。

傳「眞達さん冗談じゃねえ、おいお前金を返さなくつちやアいけねえ」

眞「今は無なえよ」

傳「今無くつちやア困るじやアねえか」

眞「無え物を無理に取ろうて云うも無理じやアねえか、だらくさい事を云いおるな」

傳「無ねえたつてお前おれ己が受ければ払いを附けなければ成らねえ」

眞「今無なえから袈裟文庫けさぶんこを抵当かたに預ける」

傳「こう袈裟文庫なんぞ己おらつちが抵当に預かつても仕様がねえ」

眞「是が無くては法事に往いくにも困るから、是をまア払うまで預かつて」

傳「そんな事を云つて困るよ、おい眞達さん一寸聞きねえ、まア此処へ来ねえ」

と次の間へ連れて往きまして

「こゝろお前和尚に借りねえ」

眞「師匠だつて貸しはしなえ」

傳「貸すよ」

眞「いや此の間私が一両貸しやさせと云うたら何に入るてえ怖ろしい眼して睨んだよ、

貸しはせんぞ」

傳「お前いけねえ、和尚は弱い足元を見られて居るぜ、お前知らねえのか、藤屋の亭主は

留守で和尚は毎晩しけ込んで居る、一箇寺の住職が女犯じやア遠島になる、己ア二度見

たぜ」

眞「じやア藤屋の女房と悪い事やつて居るか」

傳「やつて居るよ、己ア見たよ」

眞「それははや些とも知らぬじや」

傳「斯う為ねえ、彼処へ往つてお前が金を貸してと云えば、否応なしに貸そうじやアね

えか」

眞「成程、じゃア私が師匠に逢うてお前様お梅はんと寝て居りみすから、私に何うか賭博の資本を貸してお呉んなさませと云うか」

傳「そんな事を云つちやア貸すものか、そこがおつう訝しく云うのだ、人間は楽しみが無くつてはいけません、私も女を抱いては寝ませんが、警女町へ往つて芸者を買つたとか、娼妓を買つたとか、旨いものが喰いたいから、二十両とか三十両とか貸せと云えば、直きに三十両ぐらえは貸すよ、お前さんはお梅さんの酌でお楽しみぐらいの事を云いねえ」

眞「むう、巧い事を教えて呉れた、有難い〜」

と悦びまして、馬鹿な坊主で、じん〜端折で出掛け、藤屋の裏口の戸の節穴からそつと覗くと、前に膳を置いて差向いで酒を飲んで居りますから、小声で、

眞「もしお梅はん〜」

## 二十一

梅「誰だえ」

眞「ちよつと開けてくださいませ」

梅「誰だえ」

眞「眞達で、旦那に逢いたいので、一寸ちよつとなア」

永「居ないてえ云え」

梅「あの旦那は此方こちらにおいでなさいませんが」

眞「その様なことを云うてもいかぬ、そこに並んで居るじや」

永「あゝ覗のぞいて居やアがる」

梅「おや覗いたり何かして人が悪いよ」

永「障子閉たてゝ置けば宜よいに」

梅「さア此方こちらへお這入こんなさい」

永「いや今近江屋おうみやへ往つてのう、本堂の修繕しゆぜんかた／＼相談に往つて、帰り掛に一寸寄

つたら、詰らぬ物だが一杯と云うて馳走ちそうになつて居るじや、今帰るよ」

眞「帰らぬでも宜ええので、檀家の者が来ればお師匠さんが程の宜え事云うて畳替でえも出来

飛石とびいしが斯こうなつたとか何なんとか云えば檀家の者が寄進よしんに付く、じゃけれど此方こつちやも骨が折れ

る、檀家の機嫌きげん氣づまるとるは容易よういなものじゃアないじやて、だから折々は氣晴しも無けれ

ば成らん、氣を晴さんでは毒じや、泊つても宜ええがじや、眞達が檀家の者は宜え様にする

から泊つても宜えがにして置くじや」

永「いや直しきに帰ります」

眞「もしお梅はん、大事に気晴しのなるようにして呉れんなさませ：あゝ私わしやなア済まぬが金かね十兩借りたいが、袈裟文庫を抵かた当たに置くから十兩貸してくんなさませ」

永「此こ奴いつこ此ないだ間ないだ三兩貸せてえから貸したが返さぬで、袈裟文庫、何なんじやえ、出家の身の上で十兩などと、汝われが身に何で金が入る」

眞「此こ間ないだ瞽女町へ往て芸者を買こうたが、面白くつて抱いて寝るのではないが遊んだので、借金があるから袈裟文庫を預けようと思うたが、明日あした法事が有つても困りますから、是を貴方あんたへ預けて置いて、明日法事が有れば勤めてお布施で差引く」

永「黙れ、何だ二三百のお布施で埒らちが明くかえ、貸されぬ、うーん悪い処ところへ往ゆき居おつて、瞽女町で芸者買うなんて不埒ふちやう千万な奴じやア」

眞「然そう云いやすなね、人は楽たのみが無ければ成らぬ、葬ともらい式しきが有れば通夜に往いて眠い眼すくで直すくに迎むかい僧を勤め、又本堂へ坐つて経を読むは随分辛いたまが、偶たまには芸者の顔も見たい、人間にんに生なれて何も出家じやアつて人間じやア、釈迦わしも私も同じ事じや、済まぬが一寸ちよつと、貴あ方ただつて種いろく々く此方こちやへ来てお梅はんとねえ、何事もないじやアねえ、お梅はんと気晴しに

一杯やれば甘いから、お互に一寸は楽しみをして気を晴らさんでは辛い勤めは出来ん、お梅はんの処へ泊つても庄吉にも云わぬじや、私が心一つで」

永「うーん種々な事を云うな……貸すが跡で返せ、それ持つて往け」

眞「有難い、これども……お梅はん余り大切に仕過ぎて、旦那の身体悪うしては成らぬから、こりやはやおやかましゆう」

とさあツくと歸つて来て、

眞「傳次さん貸したぜ」

傳「え」

眞「貸した」

傳「何うだい貸したろう」

眞「えらいもんじやア十両貸した」

傳「なんだ十両か、たつたそればかり」

眞「いや初めてだから十両、又追々と云うて貸りるのじや」

などと是から納所部屋にて勝負事をする。予て二番町の会所小川様から探索が行届き、十分手が廻つて居るから突然に手が入りました。

「御用く」

と云う声に驚きました、旅魚屋の傳次は斯う云う事には度々出会つて馴れて居るから、場錢を引攫つて逃出す、庄吉も逃出し、眞達も往く処がないから庫裏から庭へ飛び、物置へ這入つて隠れますと、旅魚屋の傳次は本堂へ出ましたが、勝手を知らんから木魚に躓き、前へのめる機みに鉄灯籠を突飛し、円柱で頭を打ちまして経机の上へ尻餅をつく。須弥壇へ駆け上ると大日如来が転覆かえる。お位牌はばた／＼落ちて参る。がらく／＼どんと云う騒ぎ。庄吉は無闇に本堂の縁の下へ這込みます。傳次は馴れて居るから逃げましたが、庄吉は怖々縁の下へ段々這入りますと、先に誰か逃込んで居るから其の人の帯へ掴まると、捕物の上手な源藏と申す者が潜つて入り、庄吉の帯を捕えて、

源「さア出るく」

と引出す。

庄「こりやはい迎もく、どもはや私は見て居つたので」

自分の掴まえて居る帯を放せば宜いに、先の人の帯を確かりと捉えて居たからずるずると共に引摺られて出るのを見ると、顔色変じて血に染みた七兵衛の死骸が出ますと云

う、これから永禪和尚悪事露頭のお話、一寸一息つきまして。

二十二

お話は両ふたつに分れまして、大工町の藤屋七兵衛の宅へ毎夜参りまして、永禪和尚がお梅と楽しんで居ります。すると丁度真夜中の頃に表の方から来ましたのは真達と申す納所坊主：  
とんく、

眞「お梅はんくちよと明けてお呉くんなさい」

梅「はい：旦那、真達はんが来ましたよ」

永「あゝ来やアがったか、居ないてえ云え、なに、いゝえ来ぬてえ云えよ」

梅「あの真達さん、何の御用でございますか」

眞「旦那にお目に懸りたいのですが、何どうぞ一寸ちと和尚さんに逢わしてお呉くんなさい」

梅「旦那はあの今夜は此方こちらにお出でなさいませんよ」

眞「そんな事を云うても来てえるのは知っているからえけません、宵にお目に懸こつちつて此方こちに泊やつても宜えいと云うたのだから」

永「じゃア仕方がない、明けて遣れ」

と云うので、仕様がなからお梅が立つて裏口の雨戸を明けますると、眞達はすつとこ冠りにじんじん端折をして、跣足で飛込んで来ました。

永「何じゃ、どうした」

眞「お梅はん、後をびつたり締めてお呉んなさい、足が泥になつてるから此の雑巾で拭きますからな」

永「何う為よつたじゃア、深更になつてまア其の跣足で、そないな姿で此処へ来ると云う事が有るかな、困つた者じゃア、此処へ来い、何うした」

眞「和尚さん最前なア、私ア替女町で芸者買つて金が足りないから貴方に十兩貸してお呉んなさいましと、まアお願い申しましたが、あの金と云うものは実はその芸者や女郎を買つたのではないので、実はその庄吉の部屋でな賭博が始まつて居ります所へ浮かり手を出して負けた穴塞ぎの金でございます」

永「此奴悪い奴じゃアぞ、己れ出家の身の上で賭博を為るとは怪しからん、えゝ何じゃア其様な穴塞ぎの金を私にを借るとは何ういう心得じゃア」

眞「それは重々悪いがな、あれから帰つて庄吉の部屋で賭博して居りますと、其処へ

二番町の町会所から手が這入ったので」

永「それ見ろ、えらい事になった、寺へ手の這入るといふは此の上もない恥な事じゃアないか、どゞど何うした」

眞「私も慌てゝな庭の物置の中へ隠れまして、薪の間に身を潜めて居りますると、庄吉め本堂の縁の下へ逃げて這込んで見ると、先に一人隠れて居る奴が、ちまゝと其処に身を潜めて寝つて居ります所へ、庄吉が其奴の帯へ一心に噛り付いて居る所へ、どかゝと御用聞が這入つて来て、庄吉の帯を取つてずるゝと引出すと、庄吉が手を放せば宜いに、手を放さぬで居たから、先に這入つた奴と一緒に引ずり出されて来る、庄吉は直に縛られてしまい、又是は何者か顔を揚げいと髻を取つて引起すと若し……此処な家の夫の七兵衛さんの死骸が出たのじゃが」

永「えゝ何……死骸それは……どゞどどうして出た」

眞「何うして出たもないもんじゃ、あんたは此所なお梅はんと深い中になつて、七兵衛さんが在つては邪魔になるからと云うので、あんた七兵衛さんを殺して縁の下へ隠したじやろう、隠さいでも宜いじやアないか、えゝ左様じやないか、直ぐに庄吉は縛られて二番町の町会所へ送られ、私は物置の中に隠れて居て見付からなかつたから、漸う這出して、皆

出た後あとでそうつと拔出して此処まで来たのでげすがな、私がぐずぐずしてると直すぐに捕つかまり  
ます、捕つかまって打ぶち叩はたきされて見れば、庄吉は知らぬでも私は貴方あんたが楽しんで居える事は知  
つて居えるから、義理は済まぬと思しながらも打ぶたれては痛いから、実は師匠の永禪和尚は  
お梅はんと悪い事をして居ります、それ故七兵衛さんを殺して縁いんの下へ隠したのでござい  
ましようと思が云うたら、あんたも直に縛られて行つて、お処刑しおきを受けんではなるまいが、  
そうじゃないか」

永「ふうーん」

眞「ふうーんじゃない、斯うしてお呉わんなさい、私は遠い処へ身を隠しますから旅銀ろぎんをお  
呉わんなさい、三十両お呉わんなさい」

永「そりやまあ宜く知らしてくれた、眞達悪い事は出来ぬものじやな」

眞「出来ぬたつて殺ころさいでも宜えいじやないか、仮令たと殺しても墓場へでも埋うめれば知れやアせ  
んのじや」

永「庄吉にも汝てまえにも隠てまいし、汝てまいたちの居ぬ折に埋めようと思つて少しの間凌しのぎに縁の下へ入  
れると、絶えず人が来るし、汝てまいや庄吉が絶えず側に居いるから、見られては成らぬと思つて、  
抛よんろなく床下へ入れた儘まにして置いたが私わしの過あやりじやな」

眞「通りでも宜いが、路銀をお呉んなさいよ」

永「路銀だつて今此処に無いからな、その路銀を隠して有る所から持つて来るが、死人が出たので其処へ張番でも付きやアしないか」

眞「張番所でない、手先の者も怖い怖いと思つて、庄吉を縛つて皆附いて行つてしもうて、誰も居ませんわ」

永「お梅、何をぶる／＼ふる 慄える事はない、其様にめそ／＼泣いたつて仕様が無い、是れ七兵衛さんの襦袍を貸しな、左様して何か帯でも三尺でも宜いから貸しな、己はちよつと往つて金を持つて来るから、少し待つてろ、其の間にどうせ山越して逃げなければ成らぬから、草鞋に紐を付けて、竹皮包でも宜いから握飯を拵えて、松魚節も入るからな、食物の支度して梅干なども詰めて置け、己は一寸往つて来るから」

二十三

永禪和尚も最う是までと諦らめ、逐電致すより外はないと心得ましたから、覗きの手拭で頬冠りを致し、七兵衛の襦袍を着て三尺を締め、だく／＼した股引を穿きまして、

どうだ気が利いてるだろうと裾すそをからげて、大工町の裏道へ出まして、寺の門へこわ／＼這入つて見ると、一向人がいる様子もござりませんから、勝手を知った庭伝いに卵塔らんとう場へ廻つて自分の居間へ参り、隠して有りました所の金包かねづゝみを取出して、丁度百六拾金ばかり有りますのを、是を懐中へ入れて、そつと抜け出して来まして。又災わざわいも三年置けばと申す譬たとえの通りで、二十五歳の折に逃げて来ました其の時に、大の方は長くつていかにぬから幾許いくばくかに売払つたが、小が一本残つて居りましたから、まさかの時の用心にと思つて短かいのを一本差して、恐々こわ／＼藤屋七兵衛の宅へ歸つて来まして、永「さア早く急げ／＼」

と云うので、お梅は男の様な姿に致しまして、自分も頭にはぐるりと米屋冠こめやかぶりに手拭を巻き付けて皆形なりを変えましたが、眞達も其の後あとからすつと冠かぶりを致し、予て袈裟文庫を預けて有つたが、これはまた何処どこへ行つても役に立つと思つて、その文庫をひつ脊負しよつて、せつせと逃出しました。これから富山とやまへ掛つて行けば道順なれども、富山へ行くまでには追分おひわけから堺さかいに関所がございますから、あれから道を斜はすに切れて立山たてやまを北に見て、だん／＼といすの宮から大杓川おおくつがわへ掛つて、飛驒ひだの高山たかやま越をいたす心でございますから、神通川じんつうがわの川上の渡しを越える、その頃の渡し銭は僅わずか八文で、今から考えると誠に

廉やすいものでござります。無暗むやみに駈通かすしに駈かけまして、五里足らずの道でござりますが、恐  
 いが一生懸命、疵持きずつ足に笹原走ると、草くたびれ臥ふを忘れて夜通し無暗に逃げて、丁度大沓へ  
 掛つて来ますると、神通川の水音がどうーどつと聞える。山から雲が吹出しますと、ぱら  
 くくくと霰みぞれが額へ当ります。

永「あゝー寒い、大分遅れた様子じやな、眞達はまだ来ぬかな……眞達ようーく」

眞「おおい」

永「早う来んかなア」

眞「来うと云うたてもなア、お梅はんが歩けんと云うから、手を引張ひっぱつたり腰を押したり  
 するので、共に草臥れるがな、とてもく足も腰も痛んで、どうも歩けぬので」

永「確かしつりして歩かんではいかぬじやアないか」

梅「歩かぬじやいかぬと云つたつてお前さん、休みもしないで延のべつ続つづけに歩くのだもの、  
 何うして歩けやアしませんよ」

永「しらりと夜が明け掛つて来て、もうぼんやり人顔ひとがおが見える様に成つて来るが、この  
 雲の吹掛ふっかけでぱつたりと往来は止まつて居るが、今にも渡しが開あいて、渡しを渡つて此処こゝ  
 へ来る者が有れば、何でも三人だと、何う姿を隠しても坊主頭うしろうは後から見れば毛の無いの

は分るから、眞達手前はなア三拾両金遣るがなア、此処から別れて一人で行んでくれ、己はお梅を連れて高山越えをする積りだから」

眞「私も其の方が宜いのでげす、斯うやつて三人で歩くと、私はお梅はんを勞り、あんたは無暗に駈けるから歩けやアしない、どうも私は草臥れていかぬ、それじゃア三十両お呉んなさい、その方が私は仕合せじゃ」

永「うん然うか、今金を遣るから、若し渡し口の方から此方へ人でも来ると何うも成らぬから、模様を見て居てくれ、金の勘定をするからよう、封を切つて算える間向うを見て居ろよ」

眞「まだ渡しは開きやアしません、この雲の吹ツかけでは向うから渡つて来やアしますまい」

と眞達が浮かり渡し口に眼を着けて居りますると、腰に差して居りましたる重ね厚の一刀を抜くより早く、ぷすりつと肩先深く浴せますと、ごろり横に倒れましたが、眞達は一生懸命、

眞「やアお師匠さん、私を殺す気じやな」

とどん／＼／＼／＼と死物狂い、縋り付いて来る奴を、

永「え、知れたこつちや、静かにしろ」

と鳩尾の辺をどんと突きます。突かれて仰向に倒れる処を乗掛つて止めを刺しました処が、側に居りましたお梅は驚いて、ぺた／＼と腰の抜けたように草原へ坐りまして、

梅「旦那」

永「え、確かにせえ」

梅「確かにせえと云つたつて、お前さん酷い事をするじやないか、眞達さんを殺すなら殺すと云つてお呉れなら宜いに、突然で私は腰が抜けたよ」

永「え、もう宜いや、そんな意気地のない事で成るか」

と眞達の着物で血を拭つて鞆に納め、

永「さア来い」

と無暗に手を引いて渡場へ参り、少しの手当を遣つて渡しを越え、此処から笹沢、のり原、いぼり谷、片掛、湯の谷と六里半余の道でござりますが、これから先は極難所で、小さい関所がござりますから、湯の谷の利助と云う家へ泊りました。是れは本當の宿屋ではない、その頃は百姓家で人を留めました。此処で、

永「お梅、厭でも有ろうけれども頭を剃つて呉れえ、どうも女を連れて行けば足が付くから」

と厭がるお梅を無理無体に勧めて頭を剃らせましたが、年はまだ三十で、滅相美しいお比丘様が出来ました。当人も厭ではあるうが、矢張身が怖いから致し方がない。

永「さ、幸い下に着て居る己の無地の着物が有るから、是を内揚をして着るが宜い」

と云うので、是から永禪和尚の着物を直してお梅が着て、その上に眞達の持つて居りました文庫の中より衣を出して着、端折を高く取つて袈裟を掛けさせ、又袈裟文庫を頭陀袋の様にして頸に掛けさせ、先これで宜いと云うので、俄にお比丘様が一人出来ました。

## 二十四

永禪は縞の着物に坊主頭へ米屋被りを致し、小長いのを一本差して、これから湯の谷を出しましたが、その頃百疋も出しますと何うやら斯うやら書付を拵えて呉れますから、かに寺まで往く処の関所は金さえ遣れば越えられたものでござります。漸く金で関所を越え

て、かゞぞへ出て小豆沢、杉原、靱、三河原と五里少々余の道に来て、足も疲れて居ります。殊に飛驒は難処が多くて歩けませんから、三河原の又九郎という家に宿を取りました。

永「まア此処は静かで宜い、殊に夫婦とも誠に親切な者であるから、暫く此処に足を留めようじゃアないか、おれも頭の毛の長く生えるまでは居なければならぬ、此処なれば決して知れる氣遣いは有るまい、汝も剃たて頭では青過ぎて目に立つから、少し毛の生えるまでは此処にいよう、只少し足溜りの手当さえすれば宜い、併し此処には食い物が無いが、これから古河町へ往けば米も有るから米を買って、又酒や味噌醤油などの手当をして」梅「それじゃア然うしてお呉んなさい」

と云うので多分に手当を遣つて、米や酒醤油を買いに遣るから、是は大したお客様と又九郎爺が悦びまして、米を買つたり何かして、来年まで居ても差支えないように成りました。その中に彼の辺は雪がますます降つて来ますと、旅人の往来が止ります事で、丁度足溜りには都合が好いと云つて、九月の二十日からいたして十一月の三日の日まで泊つて居りましたが、段々と頭の毛も生えるが、けれども急には生えは致しません。宿屋の亭主は氣が利いていて、年はとつて居るが、多分に手当をして呉れるから有難いお客だと云

つて、何か御馳走をしたいと山へ往つて、小鹿を一匹撃つて来まして、

又「おい婆さんく〜」

婆「あい何だえ」

又「小鹿を一匹撃つて来たよ」

婆「何処どこで」

又「あの雪崩なだれぐち口くちでな、何もお客様に愛想がねえから、温あつたまる様に是れを上げたいものだ、己がこしらえるからお前味噌こしらで溜こしらりを拵こしらえて、爛かん鍋なべの支度あつたをして呉あつたんな」

とこれから亭主が料理をしてちゃんと膳立ても出来ましたから、六畳の部屋へ来て破れ障子を明けて、

又「はい御免」

永「いや御亭主か」

又「まことに続いてお寒いことでございます、なれども沢山も降りませんでまア宜うござい  
ますが、是からもう月つき末すえになつて、度々たび雪が降りますと道も止りますが、まアノ  
今年こゝろは雪が少ないので仕合せでござります、さぞ日々御退屈でございましょう」  
永「いゝやもう種々いろくお世話に成りまして、それに此の尼様が坂道で足を痛めて歩けぬと

云うこと、殊に寒さは寒しするから、気の毒ながら来年の三月迄は御厄介じやア」

又「へい有難いことでございます、毎日婆アともはア然う申して居ります、あなた方がお泊りでございますから、斯うやつて米のお飯のお余りや上酒が戴いて居られる、こんな有難い事はございませんと云つて、婆アも悦んで居ります、何うかなんなら二三年もおいでなすつて下されば猶宜いと存じます、なんで此の山家では何もございませんが、鹿を一匹撃つて参りまして調らえましたが、何うか鹿で一杯召上つて、あの何ですかお比丘尼様は鹿は召上りませんか」

永「いや、何じや、それは何とも、まア一体は食われぬのじゃけれどもなア、旅をする中は仕方がない、却つて寒気を凌ぐ為に勧めて食わせるくらいだから、薬喰には宜いな」

又「左様でげすか、鹿は木実や清らかな草を好んで喰うと申すことで、鹿の肉は魚よりも潔いから召上れ、御婦人には尚お薬でございます……おい婆さん何を持って来て、ソレこれへ打込みねえ、それその麩朶を燻べてな、ぱツくと燃しな……さア召上りまし、此方の肉が柔かなのでございますから、さア御比丘様」

梅「有難う存じます、まア本当に斯う長くお世話に成りますとも思いませんでしたが、余

り御夫婦のお手当が宜いから、つい泊る気になりました」

婆「何う致しまして、もうこんな爺婆アで何もお役には立ちませんから、どうか御退屈でない様にと申しまして、家もない山の中でございますから、外に仕方もございませぬ、どうか何時までもいらしつて下されば仕合せでと、爺も一層蔭でお噂致して居りますよ……爺さんお相手をなさいよ」

又「さアこの御酒を召上りませ、それから鍋は一つしかございせんから取分けて上げましょう」

永「いや皆此処で一緒の方が宜いから」

又「左様でげすか、いろく又爺婆の昔話もございますから、少しはお慰みにもなりましようと思ひまして……婆さん、どうも美しい酒だのう、宜かろう何うだえ、え、この御酒はあの古河町へ往かなければないので、又醤油が好いから甘いねえ、これでね旦那様、江戸の様な旨い味噌で造つたたれを打込んで、獣肉屋の様にぐつぐつ遣れば旨いが、それだけの事はいきません、どうも是では旨くはないが、これへ蕨を入れるもおかしいから止ましよう……へえお盃を戴きます、私も若い時分には随分大酒もいたしましたが、もう年を取つては直に酔いますなア、それでも毎晩酎鍋に一杯位ずつは遣らかします」

と差えつ押えつ話をしながら酒宴をして居りましたが、其の内にだんくくと爺さん婆さんも微酔になりました。

永「何うだい、お前方は何うも山の中にいる人とは違い、また言葉遣いも分るから屹度苦勞人の果じやろう、万事に宜く届くと云うて噂をして居ることだが、生れは何処だね」

又「え、旦那様お馴染に成りましたから斯んな事を伺いますが、あなたは元は御出家様でございますかえ」

永「私は出家じゃア無い」

又「へえー左様でげすかえ、貴方は其の頭髮がだんくく延びますけれども、元御出家様ではからだんくくお生しなさるのではないかと存じまして」

永「なに私は百姓だが、旅をする時にはむしやくしやくして鬢陶しいから剃るのじゃ、それに寺へ奉公をして居るから、頭を剃る事などは頓と構わぬじゃア」

又「へえー左様で、お比丘尼様はこの頃御剃髪なすつたのでげすな」

永「え、い、え……なに然う云う訳じやアないのじゃ」

又「へえ左様でげすかえ」

永「尤も幼少の時分からと云う訳じやアないが、七八年前から少々因縁有つて御出家にな

らつしやツたじや」

又「へえー左様で、私わたくしども共うちの家には御出家様が時々お泊りになりますが、御膳の時はお経を誦よんで御膳をお蓋きせに取分けて召上りますな、あなたも此の間お遣りなすつたしお経もお読みなさいますが、お比丘尼様の方はそう云う事をなさる所を見ませんから、それで貴方は御出家お比丘尼様は此の頃御剃髪と思ひまして」

永「それは門前の小僧習わぬ経を誦よむで、寺にいと自然と覚えて読んで見たいのだが、また此方こなたは御出家じやアが、もう旅へ出ると経を読まぬてえ、是こが紺屋こうやの白しら袴ばかまというたと譬たとえじやアのう」

又「そうでございますかえ、私わたくしはまた御苦勞の果じやア無いかと思つて、のう婆さん」

婆「お止しよ、ひちくどくお聞きで無いよ、鬱陶おぼしめしく思おぼ召しめすよう」

又「でもお互に昔は……旦那私わたくしはねえ、ちよつと気がさすので、然そういう事を云いますが、この婆ばあを連れて私が逃げまする時にやア、この婆ばあが若い時分だのくりくり坊主に致いたしましてねえ、私も頭すを剃すつこかして逃げたことが有るね、え、是は昔話でございませがねえ」

婆「爺さんお止しよ、詰つらない事を言い出すね、よしなよ」

又「なに、いゝや、旦那の御退屈しの凌しのぎだ、爺婆じばあの昔話だから忌いやらしい事も何もねえじやね

えか」

二十五

又「旦那此の婆はもと根津の増田屋で小澤と云った女郎でございます」

婆「およしよ爺さん」

又「いゝやな、昔は鶯を啼かして止まらした事もある……今はこんな梅干婆で見る影も有りませんがね、これでも二十三四の時分には中々薄手のあまつちよで、一寸その氣象が宜うがしたね、時々、今日は帰さねえよと部屋着や笄などを質に入れて、そうして遊んで呉れると云うから、ついとぼけて遊ぶ気になり、爪弾位は静かに遣ると云う、中々粋な女でございます」

婆「およしよう、詰らない事を言つて間が悪いやね、恥かしいよ」

又「恥かしいも無いものだ、もう恥かしいのは通り過ぎて居るわ」

永「おや左様かえ、何でも然うじやろうと思つた、中々お前苦勞人の果でなければ、あの取廻しは出来ぬと思つた、あゝ左様かえ、一旦泥水に這入つた事がなければなア」

梅「おや然うかね、長く御厄介になつて見ると私はどうも御当地の方じやないと実は思つて居ましたが、然うでございますか、不思議なものだねえ増田屋に、どうも妙だね、然うかね」

永「どうも妙だのう、それじやアお前何かえ、江戸の者かえ」

又「いゝえ私はねえ旦那様富山稲荷町の加賀屋平六と云う荒物御用で、江戸のお前さん

下谷茅町の富山様のお屋敷がございますから、出雲様へ御機嫌伺いに参りまして、下

谷に宿を取つて居る時に、見物かた／＼根津へ往つて引張られて登つたのが縁さねえ、

処が此奴中々手管が有つて帰さないから、とうとうそれがお前さん道楽の初りで酷いめに

遭いましたけれども、此奴の氣象が宜いものだから借金だらけで、漸々、年季が増えて

長いが、私の様な者でも女房にして呉れないかと云いますから、本当かと云うと本当だと

申しますから、借金があつては逆もいかぬから、連れて逃げようと無分別にも相談をした

のが丁度三十七の時ですよ、それからお前さん連れて逃げたんだ、国には女房子が有る

のに無茶苦茶に此奴を引張つて逃げましたが、年季は長いし、借金が有るから追手の掛る

のを恐れて、逃げてく信州路へ掛つても間に合わぬから、此奴をくりく坊主にして私

も坊主になつてとうとう飛驒口へ逃込んだのよ」

永「ふうん然うかえ」

又「それがお前さん面白い話でどうも高山にもうっかり居られないで、だん／＼廻って落合の渡しを越えて、此の三河原と云う此処の家へ泊ったが不思議の縁でございます、先に又九郎と云う夫婦が有ってそれが私が泊って翌日立とうかと思うと、寒さの時分では有るが、誠に天の罰で、人が高い給金を出して抱えて居る女郎を引浚って逃げた盗賊の罪と、国に女房子を置放しにした罰が一緒に報つて来て私は女房のかの字を受けたと見えて痲病に痔と来しました、これがまた二度めの半病床と来て発つことが出来ません、此処の爺婆に厄介になつて居りますと、先の又九郎夫婦が誠に親切に二人の看病をして呉れ、その親切が有難いと思つて稍半年も此処に居りまして、漸く二人の病気が癒ると、此処の爺婆が煩い付いて、逆も助からねえ様になると、その時私共を枕辺へ喚んで、誠に不思議な縁でお前方は長く泊つて下すつたが、私はもう逆も助からねえ、どうもお前方は駈落者の様だが、段々月日も経つて跡から追手も掛らぬ様子、何処か是から指して行く所がありますかと云うから、私共は何処も行く所はないが、まア越後の方へでも行くこうと実は思うと云うと、そんなら沢山も有りません、金は僅かだが、この後の山の焚木は家の物だから、山の藪を取つても夫婦が食つて行くには沢山ある、また此所を斯うすれ

ば此所で獸物が獲れる、冬の凌ぎは斯うくとすっぱり教えて、さて私の家には身寄もなし婆も弱く居るから、私が命のない後はお前さん私を親と思つて香花を手向け、此処な家の絶えぬようにしてお呉んなさらんか、と云う頼みの遺言をして死んだので、すると婆様が又続いて看病疲れかして病氣になり、その死ぬ前に何分頼むと言つて死んだから、前に披露もしてあつたので、近辺の者も皆得心して爺さん婆さんを見送つたから、つい其の儘ずるくべつたり二代目又九郎夫婦に成つたのでございます、あなた恰ど今年で二十三年になるが、住めば都と云う譬の通りで、蕨を食つて此処に斯う遣つて潜んで居ますがねえ、随分苦勞をしましたよ」

永「そうかねえ、苦勞の果じやがら万事に届く訳じやのう、でも内儀さんと眞実思合うての中じやから、斯うして此の山の中に住んで居るとは、情合だね」

又「情合だつて婆さんも私も厭だつたが、外に行く所がなし詮方がないから居たので」

永「じゃア富山の稲荷町で良い商人で有つたらうが、女房子はお前の此処に居る事を知らぬかえ、此の飛騨へは富山の方の者が滅多に來ないから知らぬのじやなア」

又「え、それは私が家を出てから行方が知れぬと云つて、家内が心配して亡なり、それから続いて家は潰れる様な訳で、忤が一人ありました、その忤平太郎と云う者は、仕様が

なくつて到頭お寺様か何かへ貰われて仕まつたと云う事を、ぼんやり聞いて居りましたが、妙な事で、去年富山の薬屋、それお前さん反魂丹はんこんたんを売る清兵衛せいべえさんと云う人が家へ来て、一晩泊つて段々話を聞きました所が、私共の悴は妙な訳でねえ、良い出家に成られそうでございまして、越中の国高岡の大王町にある宗慈寺と云う寺の納所になって、立派な衣を着て居るそうで」

永「はアそれは妙な事だなア、大王町だいぐまちの宗慈寺と云うは真言寺じゃアないか」

又「はい真言寺で」

永「そこにお前の悴が出家を遂とげて居るのかえ」

又「はい名は何とか云つたなア、婆さんお前めえ知つて居るか、あゝそうよ……いゝや、眞達と云う名の納所でございます」

永「左様か」

とじろりつと横眼でお梅と顔を見合わした計ばかり、ぎっくり胸にこたえて、流石さすがの悪党永禪和尚も、これは飛んだ所へ泊つたと思ひました。

又「それで婆さんの云うのには、前の事をあやまつて尋ねて行つたら宜かろうと云います  
が、何だか今更親子とも云い難いと云うのは、女房子を打遣つて女郎を連れて駈落する  
身の越度、本人が和尚さんとか納所とか云われる身の上になつたからと云つて、今私が親  
父だと云つても、顔を知りますまいし、殊に向うは出家で堅固な処へ、何だか気が詰つて  
往けませんなれども、その話を聞いて一度尋ねて行きたいとは思つて心掛けては居ります  
が、たとえば是れで死にました処が、旦那様何でございます、まア其の本人が坊主でござい  
ますから、死んだと云う事を風の便りに聞いて、本当の親と思えば、死んだ後でも悪いと  
は思いますまいから、お経の一遍位は上げてくれるかと思つて、それを楽しみに致して居  
る訳で」

永「なるほど然うかえ」

又「へえ……まことに長つ話を致しまして」

婆「本当にお退屈様で嘸お眠うございませう、此の通り酔うとしつこう御座いまして、  
繰返し一つことを申しまして……さア、此方へお出でよう」

又「宜やな」

婆「誠にお邪魔さまで……さア…此方へお出でよ、また飲みたければお飲りな」

と手を引いてお澤と云う婆さんが又九郎を連れて部屋へ参りました跡で、

梅「旦那々々」

永「えゝ」

梅「もう、此処には居られないからお立ちよ、早くお立ちよ」

永「立つと云つても直に立つ訳にはゆかん」

梅「いかぬたつてお前さん怖いじゃア無いか、此処は劍の中に這入つて居るような心持がして、眞達の親父と云う事が知れては」

永「これゝ黙つてろ、明日直に立つと、おかしいと勘付かれやアしないかと脛に疵じゃ、此の間も頼んで置いたが、広瀬の追分を越える手形を拵えて貰つて、急には立たぬ振をして、二三日の中にそうつと立つとしようじゃア無いか」

梅「何うかしてお呉んなさい、私は怖いから」

とその晩は寝ましたが、翌朝になりますと金を遣つて瞞かして、何うか斯うか広瀬の追分を越える手形を拵えて貰い、明日立とうか明後日に為ようかと、こそゝ支度をして居りますと、翌日申の刻下りになりまして峠を下つて参つたのは、越中富山の反魂丹を

売る薬屋さん、富山の薬屋さんは風呂敷包を脊負うのに結目を堅く縛りませんで、両肩の脇へ一寸挟みまして、先をぱらりと下げて居ります。懐には合口をのんで居る位に心掛けて、怪しい者が来ると脊負て居る包を放ねて置いて、懐中の合口を引抜くと云う事で始終山国を歩くから油断はしません。よく旅慣れて居るもので御座ります。一体飛騨は医者と薬屋が少ないので薬が能く売れますから、寒いのも厭わずになだれ下りに来まして。

薬屋清「やア御免なさいませ」

又「おやこれはお珍しい……去年お泊りの清兵衛さんがお出なすつた、さア奥へお通りなさい、いやどうも能く」

清「誠に、是れははや、去年は来まして、え、長えこと御厄介なり居りみした、いやもう二度と再び山坂を越えて斯う云う所へは来ますまいと思つて居りみすが、又慾と二人連れで来ました……おや婆様この前は御厄介になりみした、もうとてもこの山は下りは楽だが、登りと云うたら足も腰もめきりくと致して、やアどうも草臥れました、とてもく」

又「今夜はお泊りでげしよう」

清「いや然うでない、今日は切みて落合まで行く積で」

又「婆さん今日は落合までいらつしやるてえが仕方が無いのう、まア今夜はお泊りなさいな、この頃は米が有ります、それに良い酒もありますからお泊りなさい、お裙分をしますから」

清「いや然うは行きませぬ、何うでも彼うでも落合まで未だ日も高いから行こ積りで」

又「それは仕方が無いなア、然うでしようがまア一杯飲んで」

清「いゝや……」

又「そんな事を云わずに、これ婆さん早く一杯……」

婆「能くお出でなさいました、去年は誠にお草々をしたって昨宵もお噂をして居りました」

又「清兵衛さん、去年お泊の時に、私の悴は高岡の大工町の宗慈寺と云う寺に這入って、弟子に成つて居ると云う貴方のお話が有つたが、眞達と云う悴は達者で居りますかな」

清「いや何うも是やはや、それを云おうくと思つて来たが、お前さん余り草臥れたので忘れてしまったが、いや眞達さんの事に就いてはえらい事になりみした」

又「へいどうか成りましたか」

清「いやもうらちくちのつかない事に成りみしたと云う訳は、お前さん宗慈寺の永禪和尚と云う者はえらい悪党でありみすと、前町の藤屋七兵衛と云う荒物屋が有つて、その女房のお梅というのと悪え事をしたと思ひなさませ、永禪和尚とお梅と間男をして居りみして、七兵衛が在つては邪魔になるといふて、夫の七兵衛を薪割で打殺し、本堂の縁の下へ隠したところが、悪え事は出来ぬものじやなア、心棒が狂い曲うたから、まア寺男からお前さんの子じやア有るけれども眞達さんまでも悪え事に染りまして、それからお前さん此の頃寺で賭博を為ますと」

又「賭博を、ふうん〜成程」

清「ところがお前さん二番町の小川様から探索が届いて居るもんじやから直に手が這入つて、手が這入ると寺男の庄吉という者がお前さん本堂の床下へ逃げたところが、先に藤屋七兵衛の死骸が隠して在るのを死骸とは知らいで、寺男の庄吉が先へ誰か逃込んで床下に此の通りちま〜と寝つて居りみすと思つて、帯の処へ後生大事にお前さん取付いて居りみすと、さ、するとお前さん出る〜と云うので役人が来て庄吉の帯を取つて引ずり出すと、藤屋の夫の死骸が出たと思ひなさませ、さアこれはうさんな寺である、賭博どころではない、床下から死骸が出る所を見ると、屹度調べを為なければ成らぬと、お

役所<sup>やくしょ</sup>まで参れ<sup>まゐ</sup>と忽<sup>たちま</sup>ちきり／＼と縛<sup>いまし</sup>められて、庄吉<sup>しやうきち</sup>が引かれみしたと、もう事が破れたと思<sup>おも</sup>つて永禪和尚<sup>えいぜんおしょう</sup>が藤屋<sup>ふじや</sup>の女房<sup>にやま</sup>の手を取<sup>と</sup>つて逃<sup>のが</sup>げた時に、お前<sup>ま</sup>さんの御子息<sup>ごこし</sup>の眞達<sup>まんだ</sup>どもと一緒に逃<sup>のが</sup>げたに相違<sup>ちが</sup>ないのじやが、それが此<sup>こ</sup>の世<sup>よ</sup>の生涯<sup>しやうがい</sup>で、大沓<sup>おほくさ</sup>の渡<sup>わた</sup>しを越<sup>こ</sup>える渡口<sup>わたぐち</sup>の所に、いや最<sup>も</sup>うはや見る影<sup>かげ</sup>もない姿<sup>すがた</sup>で誠<sup>まこと</sup>に情<sup>なさけ</sup>ない、それは／＼と逆<sup>と</sup>も／＼何<sup>なに</sup>とも云<sup>い</sup>い様<sup>よう</sup>のない姿<sup>すがた</sup>に斬<sup>け</sup>殺<sup>ころ</sup>されて居<sup>ゐ</sup>りみしたが、

又「えー悴<sup>せきり</sup>が斬<sup>きり</sup>殺<sup>ころ</sup>されて」

清「いやもう何<sup>なに</sup>とも」

又「誰<sup>たれ</sup>が殺<sup>ころ</sup>しました」

## 二十七

清「あとで小川<sup>こがわ</sup>様がだん／＼お調<sup>てい</sup>べに成<sup>な</sup>つたとこ<sup>ところ</sup>が、流石<sup>さすが</sup>名奉行<sup>なべいりやう</sup>様<sup>さま</sup>だから、永禪和尚<sup>えいぜんおしょう</sup>が藤屋<sup>ふじや</sup>の女房<sup>にやま</sup>お梅<sup>うめ</sup>を連<sup>つ</sup>れて逃<sup>のが</sup>げる時<sup>とき</sup>のこ<sup>こと</sup>を知<sup>し</sup>つて居<sup>ゐ</sup>るから、これ<sup>これ</sup>を生<sup>え</sup>かして置<sup>お</sup>いては露<sup>つゆ</sup>顯<sup>あ</sup>する本<sup>もと</sup>というて、斬<sup>け</sup>つて逃<sup>のが</sup>げたに違<sup>ちが</sup>いないと云<sup>い</sup>うので、足<sup>あし</sup>を付<sup>つ</sup>けたが今<sup>いま</sup>に知<sup>し</sup>れぬと云<sup>い</sup>ますわ」

又「それはまあ何うも有難う存じます、お前さんがお通り掛りで寄って下さらなければ、私は忤が殺された事も知らずにしまします、それは何時の事でございましたか」

清「えーとえーつい先々月十九日の暁方でありみしたか」

又「十九日の明方……そうとは知りませんでのう婆さん、昨宵余り寒いからと云つて、山へ鹿を打ちに往きまして、よう／＼能い塩梅に一疋の小鹿を打つて、ふん縛つて鉄砲で担いで来ましたが、その親鹿で有りましよう峰にうろ／＼哀れな声をして鳴きまして、小鹿を探して居る様子で、その時親鹿も打とうと思いましたが、何だか虫が知らして、子を探して啼いて居るから哀れな事と思つて、打たずに歸つて来ましたが、四足でせえも、あゝ遣つて子を打たれゝば、うろ／＼して獵人の傍までも山を下つて探しに来るのに、人間の身の上で唯た一人の忤を置いて遁げると云うは、あゝ若い時分は無分別な事だった……のう婆さん……昨宵婆と話をして居りましたが、まことに有難うございます、亡くなりました日が知れますれば、線香の一本も上げ、念仏の一つも唱えられます、有難うございます、あゝ誠に何うも……何と云つたつて一人の子にも逢えず、あなたが去年お出で下さつてお話ですから、雪でも解けたら尋ねて行こうと存じて、婆さんとも然う申して居りました」

清「え、私わしやもう直まじに帰りましょう、まことに飛んだ事をお耳みみに入れてお氣けの毒に思おもいませが、云えわぬでも成りませんから詮し方ようなしにお知らせ申ました訳わけで、能よくまア念ねん仏ぶつども唱なえてお遣やりなされ、私わしや帰りみすから」

又「じやア帰りには屹きつと度よりお寄よりなすつて」

清「はい屹けつと度より寄よつて御ご厄やく介けに成なりみすよ、左さ様よなれば」

婆「どうぞお帰りにお待ち申まします」

清「大おおけにお妨たごげを致いたしました、左さ様よならば」

又「お前まへさん山やま手ての方かたへよつてお出いでなさいませんと、道みちが悪わるうございますよ、崩くずれれ掛かつた所ところが有ありますから、何時いつもいう通りとおりにね、あの寄よ生せい木きの出でた大おほ木きの方かたに附ついてお出いででなさいよ……あゝまア思おもい掛かなく清きよ兵へい衛ゑさんがお出いででなすつて、一ひと晩ばんお泊とどめ申まして緩ゆるくり話わを聞ききたいが、お急いそぎと見みえてハイもう影かげも見みえなく成なつた、のう婆おばさん忤この殺ころされたのは十九日じゅうくにちの明あ方かた大おほ沓くつの渡わた口ぐちだつたのう婆おばさん」

婆「あい」

又「奥おくに泊とどつて居ゐる客きやく人にんは己おれの所ところへ幾い日にちに泊とどつたつけな」

婆「あれは先ま々ま月づきのちようど、二十日にじゅうにちの晩ばんに泊とどりました」

又「二十日……えー十九日の明方に川を渡つて湯の谷泊りと仰おつしやつたが、ちようど二十日が己の所へお泊りと……婆さん、あのお比丘さんの名はお梅という名じゃないか」

婆「何だか惠えほい梅様くくと云つたり、またお梅と呼びなざる事もあるよ」

又「は、ア何でも此の頃頭髪あたまを剃すつた比丘しん様に違ちがひない、毛の生えるまで足溜あしだまりに己の家へ泊うちつて居るのだ、彼奴あいつら二人が永禪和尚にお梅かも知れねえぜ、もう婆さん」

婆「それア何とも云えないよ」

又「酒をつけろ」

婆「酒をつけろたつてお前」

又「宜いからつつけろ、表の戸締りをすつぱりして仕舞え、一寸ちよつと明けられねえ様に、しん張はりをかつてしまいな、酒をつけろ」

婆「酒をつけろたつてお前さん無理酒むりざけを飲んではいけないよ、無理酒は身体あたまに中あたるから、悴せが死んだからつてもやけ酒はいけないよう」

又「もう死んだつても構うものか、身体に中あたつたつてよいくくになつて打倒ぶつたおれて死んだつて、何も此の世に思い置く事はない、然うじゃないか、お前は己めえが死んだつて、一生食くうに困るような事はねえから心配しなさんな、己おれはもう何なにも此の世の中に楽しみはねえ

から、酒をつける」

と爛鍋で酒を温め、爛の出来るも待てないから、茶碗でぐいぐいと五六杯引っかけて、年は五十九でございますが、中々きかない爺、欄間に掛った鉄砲を下して玉込をしましたから。

婆「爺さんお前何をするのだえ、また鹿でも打ちに往くのかえ」

又「え、黙つて居ろ、婆さん己は奥へ行つて掛合つてな、何処までも彼奴ら二人に白状させるつもりだが、きやアとかぱアとか云つて逃げぬえものでもねえ、若し逃げに掛つたら、手前は此の細口から駈出して、落合の渡しへ知らせろ、此方は山手だから逃げる氣遣いはない、え、心配するな」

と山刀を帯して片手に鉄砲を提げ、忍足で来て破れ障子に手を掛けまして、窈つと明けて永禪和尚とお梅の居ります所の部屋へ参つて、これから掛合に成りますところ、一寸一息つきまして。

又九郎は年五十九でございますが、中々きかん気の爺おやじで、鉄砲の筒口すぐちを押し握にぎつてそつと破れ障子を開けると、此方こちらはこそく荷にこしら拵へえを致して居る処ところへ這入こつて来きましたから、覺さとられまいと荷を脇へ片付けながら、

永「誰たれじゃ」

又「へい爺じいでございます」

永「おやははく、さア此方こちらへお這入こりなさい、未まだ寝ねずかいのう」

又「まだ貴方あなたがたもお寝やすみでございますか」

永「寝ねようと思おもつても寒さむうて寝ねられないで、まだ起きて居ゐました」

又「へい早速お聞き申ましたいことが有あつて参まりましたが、貴方あなたがたのお国どちは、何ど処ちでございますか」

永「うーん何なんじや、私わしは大聖寺だいしょうじの者ものじや」

又「大聖寺へえー、大聖寺じやアありますまい、貴方あなたがたは越中えちゅうの高岡たかおかのお方かたでございますまい」

永「うーんイヤ私わしは大聖寺だいしょうじの薬師堂やくしだうの尼様にじやうのお供ともをして来きた者ものじやア、何どで高岡たかおかの者ものとお前まへが疑うつて云いいなさるか」

永「うーんイヤ私わしは大聖寺だいしょうじの薬師堂やくしだうの尼様にじやうのお供ともをして来きた者ものじやア、何どで高岡たかおかの者ものとお前まへが疑うつて云いいなさるか」

永「うーんイヤ私わしは大聖寺だいしょうじの薬師堂やくしだうの尼様にじやうのお供ともをして来きた者ものじやア、何どで高岡たかおかの者ものとお前まへが疑うつて云いいなさるか」

永「うーんイヤ私わしは大聖寺だいしょうじの薬師堂やくしだうの尼様にじやうのお供ともをして来きた者ものじやア、何どで高岡たかおかの者ものとお前まへが疑うつて云いいなさるか」

又「お隠しなさつてもいかねえ、貴方は高岡の大工町宗慈寺という真言寺の和尚様で、永禪さんと仰しやるだろうね」

永「何を言うのじゃ、そんな詰らぬ事をそれは覚ええない、何ういう事で私を然う云うか知らぬけれども、それは人違いだろう」

又「隠してもいけません、そちらの恵梅様というお比丘尼様は前町の藤屋という荒物屋の七兵衛さんのお内儀で、お梅さんと云いましような」

永「何を詰らぬ事……飛んだ間違いでお前の事をあないな事を云う」

梅「まア何うもねえ、どう云うまアその間違だか知れませんが、けれどもねそんな何うもその、私共は尼の身の上で居る者を、荒物屋の女房なんてまア何う云う何かね……お前さん」

永「さア何ういう訳で其様ことを、さア誰がそんな事を言つたえ」

又「隠しちゃアいけねえ、あなたは一箇寺住職の身の上で、このお梅さんと間男をするのみならず、亭主の七兵衛が邪魔になるといので、薪割で打殺して縁の下へ隠した事が、博奕の混雑から割れて、居られねえのでお梅さんの手を引いて逃げて来なすつた時に、私の悴の眞達と何処でお別れなすつたい」

永「これ何を云う、何を云うのじや、思い掛けない事を云つて、眞達なんて、それはまるで人違いじゃア無いか、何ういう訳じや、眞達さんと云うのは昨夜話に聞いたが、私は知りませぬが」

又「とぼけちやアいけねえ、お前さん、しらアきつたつて種が上つて居るから役に立たねえ、眞達を連れて逃げては足手まといだから、神通川の上大沓の渡口で悴を殺して逃げたと言つてしまいなせえ、おい隠したつても役に立たねえ」

永「何うもこれは思いがけないことを言つて、まアそんな事を言つて何うもどゞ何ういう理窟で其様な事を云うか……のう惠梅様」

梅「本当に何だつて其様事を云いますか、私どもの身に覚えのない事を言いかけられて、何うも何ういう訳で、その何だか、それが実に、それはお前は何ういう訳で」

又「何ういう訳だつてもいかねえ、種が上つて居るから隠さずに云え、云わなければ詮方がねえ、お前方二人をふん縛つて落合の役所へ引いても白状させずには置かねえ、さア云わねえか、云わなければ了簡が有る、おい云わねえか」

と云われこの時は永禪和尚もこれは隠悪が顕れたわい、もう是れまでと思つて爺い婆を切殺して逃げるより外はないと、道中差の胴金を膝の元へ引寄せて半身構えに成つ

て坐り、居合いあいで抜く了簡、柄つかへ手をかけ身構える。爺も持つて参つた鉄砲をぐつと片手に膝の側へ引寄せて引金に手を掛けて、すわと云つたら打果そうと云うので斯こう身構えしました。互いに竜虎の争いと云おうか、呼吸いきの止るようにならんと睨にらみ合いました時は側に居るお梅はわななく、慄ふるえて少しも口を利くことも出来ません。永禪は不図ふと後に火繩くわじろの光るのを見て、此奴こいつ飛道具とびどうぐを持つて来たと思うからずーんと飛掛り、抜打ぬきうちに胸のあたりへ切付けました。

## 二十九

又「やア斬りやアがつたな」

と引金を引いてどんと打つ、永禪和尚は身をかわすと運の宜いい奴、玉は肩を反それてぶつりと破やぶれ壁かべを打貫うちぬいて落る。又九郎は汝おのれ斬りやアがつたなど空鉄砲からでつぽうを持つて永禪和尚に打つて掛るを引ひつ外はずして、

永「猪口ちよこ才さいな事をするな」

と肩先深く斬きり下げました。腕は冴さえて居るし、刃物きれものは良し、又九郎横倒れに斃たおれるの

を見て婆は逃出そうと上総戸へ手を掛けましたが、余り締りを嚴重にして御座いまして、  
栓張を取つて、掛金を外す間もございませぬ、処へ永禪は逃げられては溜らぬと思ひ  
ましたから、土間へ駈下りて、後から一刀婆に浴せかけ、横倒れになる処を踏掛つてど  
めを刺したが、お梅は畳の上へ俯伏になつて、声も出ませんでぶる／＼慄えて居りまし  
た。ところへ見相変えて血だらけの胴金を引提げて上つて来ました。

永「あゝ危い事じやつたな」

梅「はい」

永「確かにせえ」

梅「確かにせえたつて私は窃と裏から逃げようと思つてる処に、鉄砲の音を聞いて今度ば  
かりは本当に死んだような心持になりましたよ」

永「毒喰わば皿まで舐れだ、止むを得ぬ、えゝ悪い事は出来ぬものじゃ、怖いものじゃア  
無いか」

梅「本当に怖い事ね」

永「此処に泊つたのが何うして足が附いたか、もう此処に長う足を留めて居る事は出来ぬ、  
広瀬の追分を越えるだけの手形が有るから差支えはないが、今夜此処を逃げて仕舞うと、

死骸は有るし夜中に山路は越えられないから今夜は此処に寝よう」

梅「怖くって、寝られやアしません」

永「今夜は誰も尋ねて来やアせんから」

梅「死骸は何うするの」

永「宜わ」

と又九郎夫婦の死骸をごろ／＼土間へ転がして、鉄砲を持つて来て爺婆の死骸を縁の下へ入れましたが、能く死骸を縁の下へ入れる奴です。これから血の掃除を致し、凶々しく残りの酒を飲んで永禪和尚は軒をかいて寝ましたが、実に剛胆な奴であります、翌朝身支度をして何喰わぬ顔で、此処を出ましたが、出ると急ぎまして、宜い塩梅に広瀬の渡を越して、もう是れまで来れば宜いと思うと益々雪の降る気候に向つて、行く事も出来ませんから、人知れず千島村という処へ参つて、水無瀬の神社の片傍の隠家に身を潜め、翌年雪も解け二月の月末に越後地へ掛つて来ます。芦屋より平湯駅に出で、大峠を越し、信州松本に生まして、稲荷山より野尻、夫より越後の国関川へ出て、高田を横に見て、岡田村から水沢に生まして、川口と云う処に幸い無住の薬師堂が有ると云うので、これへ惠梅比丘尼を入れて、又市が寺男になつて居てお

経を教えて居る。其の中に尼はだんく覚えてお経を読むようになると、村方から麦或いは稗ひえなどを持つて来て呉れるから、貰う物を喰つて漸く此処こゝに身を潜めて居る中に又市も頭髪かみは生えて寺男の姿になり、片方かたは坊主馴れて出家らしく口も大きく此処に足掛三年の間居りますから、誰有つて知る者はございませぬ。爰こゝにお話は二つに分れまして寛政九年八月十日の事でございしますが、信州水内郡白鳥村と申す処ところがございします。是は飯山いひやまの在やまがで山家やまがでございします。大滝村おたきむらという処ところに不動様がありまして、その側わきに掛茶屋かぢやがあつて、これに腰を掛けて居ります武士さむらいは、少し羊羹色ようかんいろではありますませんが黒の羽織わきを着て、大小を差して紺足袋なかにめきに中なか抜ぬきの草履わらじを穿はき、煙草を呑んで居りますと、此の前を通りまする娘は年頃二十一二でございしますが、色のくつきり白い、山家に似合あわぬ人柄よの能よい女で、誠におとなしやかなの姿で、前を通つて頻しきりに不動様を拝みお百度を踏んで居ります。武士は余念もなく彼の娘かの姿を見て居りますが、お百度だから長うございします。自分も用があるのに出掛けようともしませんで、お百度の済むまで、娘が往つたり来たりするのを見て、頭くびを彼方あつちへふり此方こゝちへふり、お百度の歩く通りに左右へ頭を廻して、とうとう仕舞しまいで見て居りました。

武士「あゝ美しいな、婆ア今あの不動様へお百度を上げて居た彼の女あは、何処どこの女だのう」

婆「はいありやア何でござりやすよ、あの白鳥村の者でござりやすが、能く間があると参詣にひえー参りやすが、ありやア信心者でござりやして、何でも廿八日には暴風雨があつても欠かさないでござりやしてな、ひやア」

武士「宜い女だね」

婆「ひやア此処にはまア沢山はねえ女でござりやすよ、ひやア」

武士「何処の何者の娘かな」

婆「何だか知りやしねえが武士の娘で有りやすが、浪人してひやア此の山家へ引込んだ者じゃアはと評判ぶつて居りやす、ひやア」

武士「はア左様かのう」

男「ちよつとくゝ旦那え」

と後に腰を掛けて居りました鯨背の男、木綿の小弁慶の単衣に広袖の半纏をおつて居る、年三十五六の色の浅黒い気の利いた男でございます。

武士「いやお前はナニとんと心付かぬで、何処にお居でかな」

男「この衝立の後に有合物で一杯やつて居ります、へー、碌な物は有りませんが、此の家の婆さんは綺麗好で芋を煮ても牛蒡を煮ても中々加減が上手でげす、それに綺麗好だから喰い心がようございます」

武士「は、あ貴公何だね、言葉の様子では江戸御出生の様子だね」

男「へい旦那も江戸児のようなお言葉遣いでげすね」

武士「久しく山国へ来て居て田舎者に成りました」

男「今の娘を美しい女だと賞めておいでなすつたが、あれは白島村の何です元は武士だと云いますが、何ういう訳か伯父が有ると云うので、姉弟で伯父の世話になつて居ますが、弟は十六七でございますが、色の白い好い男で、女の様でございます、それで姉弟で遣つてるのだが彼の位のは沢山はありませんな」

武士「は、あ、貴公は御存知かえ」

男「へい、私は白島村の廣藏親分の厄介で、傳次と申す元は魚屋でございますが、江戸を喰詰めてこんな処へ這入つて、山の中を歩き廻り、極りが悪くつて成らねえが、金が出来ませんじゃア、江戸へ帰る事も出来ません身の上で」

武士「は、ア左様かえ、じゃ彼の婦人を御存知で」

傳「へい朝晩顔を見合せますからね」

武士「あ、左様かえ、貴公些ちつと遊びに来て下さらんかえ、私は桑名川村くわながわむらだから」

傳「じゃ隣り村で造作アございません」

武士「拙者も江戸児で、江戸府内で産れた者に逢うと、江戸児は了簡が小さいせえか、懐かしく親類のような心持がしますよ」

傳「そうです、変な言葉の奴ばかりいますから貴方あなたのような方に逢うと氣丈夫でげす、閑ひまで遊んで居りますから何時いつでも参ります」

武士「何うだえ拙者てまえたく宅へ是を御縁としてな、拙者てまえは柳田典藏やなぎだてんぞうと申す武骨者だが、何うやら斯こうやら村方の子供を相手にして暮して居ります」

傳「何で、何方どちらの御藩ごはんでげす」

典「なに元は神田橋近辺に居た者だ、櫻井監物さくらいけんもつの用人役をも勤めた者の忤だが、放蕩を致して府内にも居おられないで、斯ういう処へ参るくらいだから、別して野暮な事は言わぬが、兎も角も一緒に、直じき近い細川を渡ると直すぐだ」

傳「御一緒に参りましょう」

とずうくしい奴で、ぴよこく付いて来ました。

典「さア、此方こつちへ這入りなさい……庄吉、今お客様をお連れ申したから」

庄「はい大層お早くお帰りで、今日は此の様にお早くお帰りはあるまいと思つて居りました……さア此方こつちへお客様お這入りなさい」

傳「へいこれは何うも、御免なさい……おや庄吉さんか」

庄「や、こりやア傳次さんか、いゝやア是れははや、何うも」

傳「何うした思い掛けねえ」

庄「何時も變りも無のうて目出とうありますと」

傳「いやア何うも、何とも彼かんとも、お前めえにも逢いたかつたが、彼あれから行端ゆきはがねえので」

典「庄吉手前てめえは馴染か」

三十一

庄「いや馴染だつて互いに打明けて埒らちくちもない事をした身の上で……まア無事で宜いいな」  
傳「何時いつ此方こつちへ来たのだえ」

庄「何時と云うてお前も此方へ何時来たでありますと」

傳「いや何うも私わっちもからきし形かたはねえので、仕ようが無いから来たんだ」

庄「旦那妙なもので、これは本当に真の友達で、銭が無けりやア貸して遣やらう、己おらが持も合せちあわがあれば貸そうという中で有りますと」

傳「随分此の人の部屋で燻くすぶつた事もあるのでねえ」

典「左様かえ、兎も角も」

と是ありあから有合物あいのもので何かみつくるってと云つて一杯始めると、傳次は改めて手を突き、

傳「私わっちア旅魚屋の傳次と申す者で、何うか御贔屓になすつて……大層机などが有りますね」

典「あゝ田舎は様々やらでは成らんから、出来はしないが、村方の子供などを集めてな、

それに以前少しばかり易学えきがくを学んだからな売うらないトをやる、それに又また少しは藥屋のよう

な事も心得て居おるから医者いしやの真似もするて」

傳「へえー手習の師匠に医者いしやに売トに藥屋でがすかこれは大丈夫でげす、どうも結構なお

住居すまいですな」

典「田舎では種々いろくな事を遣らぬではいかぬ、荒物屋は荒物ばかりと極きめてはいかぬて」

傳「妙でげすな」

典「さアお酌を致しましょう」

傳「へえ…有難う」

典「まづい物だが召上れ」

傳「頂戴致します…庄吉さん久し振で酌をして呉んねえ、何うも懐かしいなア、何うして来たかなア」

庄「本当に思掛けなくゆやはや恥かしいな、何うしてお前も此処へ来たか」

傳「旦那おかしい事があればあるものさ、此の人はね越中の高岡で宗慈寺という寺に居りました寺男でね、賭博ばくちをしておかしい事がありやした…今では過去すぎさきつた事だが、あれは何うなつたえ」

庄「何うたつて何うにも彼こうにも酷ひどい目に遭おうたぜ、私わし縁の下に隠れて、然そうしてお前様死人しびととは知らぬから先に逃げた奴が隠れて居ると思うたから、其そ奴の帯を掴つかんでしまゝと隠れて居ると、さア出ろ、さア出ると云うので帯を取って引かれるから、ずるゝと引摺ひきずられて出ると、あの一件が出たので」

傳「旦那もう過去つたから構わねえが、此の人が死人しびとと知らずに帯に掴つかまって出ると、死人しにんが出たので到頭いぼくが割れて縛られて往いきました」

庄「すると彼れから其の響けで永禪和尚が逃げたので、逃げる時、藤屋の女房と眞達を連れて逃げたのだが、眞達を途中で切殺して逃げたので、ところが眞達は死人に口なしで罪を負うて仕舞い、此方は小川様が情深い役人で、調べも軽くなつて出る事は出たが、一  
 旦人殺しと賭博騒ぎが出来たから、誰あつて一緒に飯い喰う者もないから、これは逆も仕様がねえ、と色々考え、何処か外へ行こうと少しばかりの錢を貰うて流れくつて此処へ来て、不思議な縁で、今は旦那の厄介になつて居るじゃ」

傳「旦那、……寺の坊主が前町の荒物屋の女房と悪いことをしやアがつて、亭主を殺して堂の縁の下へ死人を隠して置いたのさ、ところで其の死人に此奴が掴まつて出たと云う可笑しい話だが、彼の時おれは一生懸命本堂へ逃げ上つたが、本堂の様子が分らねえから、木魚に蹴躓いてがらく音がしたので、驚いて跡から追掛けるのかと思つたが、然うじやアないので、又逃げようとする、がらくくと位牌が転がり落る騒ぎ、何うか彼うか逃げましたが、いまだに経机の角で向脛を打つた疵は暑さ寒さには痛くつてならねえ」

庄「怖かねえことであつたのう」

傳「それが此処で遇おうとは思わなかつたが、お互いに苦勞人の果だ」

典「時に改つて貴公にお頼み申したいことがあるが、今の婦人は主はないのか」

傳「え、主はない、たった姉弟二人で弟は十六七で美しい男さ、此の弟は姉さん孝行姉は弟孝行で二人ぎりです」

典「親はないのか」

傳「ないので、伯父さんの厄介になつて機を織つたり糸を繰つたり、彼のくらい稼ぐ者は有りませんが、柔しくつて人柄が宜い、いやに生つ世辞を云うのではないから、あれが宜うございます」

典「拙者も当地へ来て何うやら斯うやら彼うやって、家を持って、聊か田畑を持つ様になつて村方でも何うか居り着いて呉れと云うのだが、永住致すには妻がなけりア成らぬが、貴公今の婦人に手蔓が有るなれば話をして、拙者の処の妻にしたいが、何うだろう、話をして貴公が媒介人にでも、橋渡しにでもなつて、貰受けて呉れ、ば多分にお礼は出来んが、貴公に二十金進上致すが、その金を遣つてしまつてはいかぬけれども、貴公も左様して遊んで居るより村外れで荒物店でも出して、一軒の主になつて女房子でも持つようになれば、親類交際に末永く行き通いも出来るから」

傳「有難うが、私も斯う遣つてぐずついで居ても仕様がねえから女房も置去にしまし

たが、これは下谷の上野町に居りますが、音信たよりもしませんので、向うでも諦あきらめ、今では団子こしらを拵こしらえて遣こつて居るようですが、そうなれば有難い、力に成なつて下されば二十両戴たいがなくつても宜よい、併しかし苦しい処ところだから下されば貰もらいます、それは有難い、私わたしが話せば造ぞう作さくなく出来るに相違さむありませんから、行いつて話をしまししょう」

典「早いはやいが宜よいが」

傳「えゝすくななに直すくに往いきましよう」

と止せば宜よいに直すくに柳田典藏りゅうでんていざうの処ところを出でて、これから娘むすめの処ところへ掛合かあに参まゐる。是こが間違まちがの端は緒ぐち、この娘むすめお山やまは前ぜん申ま上げた白島山平しらかしまへいの娘むすめで、弟あには山之助やまのすけと申まして、親山平おやまへいは十六年前じゅうろくねんから行方知れいりかたしれずになり、母ははは亡なくなつて、この白島村しらかしまむらの伯父おじいの世話せわになつて居ゐりますが、これから姉きょうだい妹いが大難おほいに遭あいますお話おはなし、一寸一息いちじゆんつきまして。

三十二

おやま山之助やまのすけの姉きょうだい弟あには、白島山平しらかしまへいが江戸詰えどづめになりましてから行方知れいりかたしれずになり、母ははは心配致しんぱいして病死致びじきした時ときはおやまが八歳はちさい、山之助やまのすけが三歳さんさいでござりますから、年としの往ゆきま

せん二人の子供は家の潰れる訳ではないが、白島村の伯父多右衛門が引取り、伯父の手許で十五ヶ年の間養育を受けて成人致しまして、姉は二十二歳弟は十七で、小造な華者な男で、まだ前髪だちでございます。姉も島田で居りますが、堅い気象で、姉弟してひよつとお父様がお帰りの有った時は、伺わずに元服しては済まないと言うので二十二で、大島田に結って居ると申す真真正しい者で、互いに姉弟が力に思合ひまして、山之助は馬を引き或は人の牛を牽きまして、山歩きをして籠朶を積んで帰る。姉は織物をしたり糸を繰つたりして隙はございせんが、少し閑が有れば大滝村の不動様へ親父の生死行方が知れますようにと信心して、姉弟二人中ようして暮して居ります。門口から旅魚屋の傳次がひよこ〜お辞儀をして。

傳「へい御免なさい」

山之助「はいお出でなさい」

傳「今日は結構なお天気で」

山「はい、何方様で」

傳「へい私も久しく此地に居りますからお顔は知って居ります、私は廣藏親分の処に居る傳次と云う魚屋でございりますが親分の厄介者で」

山「へえそうでございますか」

傳「どうも感心でげすね、姉様ねえさんを大事になすつて、お中が宜いいつて実に姉弟こで斯こう睦むつましく行く家はねえてえ村中の評判やうちでございますよ、へえ御免ごめんなさいよ」

やま「さアお掛けなさい、何か御用ごようでございますか」

傳「へえ姉様ねえさんまアね藪やぶから棒ぼうに斯こんな事を申しては極ごくりが悪わるうございますが、頼たのまれたからお前まへさんの胸むねだけを聞きに來きましたが、あの大滝おほたきの不動ふどう様へお百度ひゃくどを踏ふみにいらつしやいますね」

やま「はい」

傳「今日けふお百度ひゃくどを踏ふんで帰かへんなさる時とき、葎よしず簧つぱり張はりの居酒屋いさけでそれ御ごぞんじでげしようね、詰あつらねえ物を売うる、彼あつ処こにね腰こしを掛かけて居ゐた、黒くろの羽織うゑを着きて大小おほいを差さし色の浅あ黒くろい月つき代しろの生なえた人柄ひとがらの宜いい旦那だんなをごらんなすつたか」

やま「はい私わたくしは何なにだか急いそぎましたから、薩さつ張ぱり存ぞんじません」

傳「彼あの方は元もとお使つか番ばんを勤つとめた櫻井監物うらなの家來けらいで、柳田典藏やなぎでんざうと仰おほしやる大おほした者もの、今いまは桑名川村さながわむらへ來きて手習てなれえの師匠しせうで医者いしゃをしてそれで売うちをする三点張さんてんぱりで、立派うちな家うちに這入まつて居ゐて、これから追々おいくでんじ田地でんじでも買かおうと云いうのだが、一人ひとりの身み上のうえでは不自由ふじゆう勝かた

だから、傳次女房を持ちてえが百姓の娘では否だが、聞けば何か此方の姉さんは元武士のお嬢さんで、今は御運が悪くつて山家へ這入つて居る様子だが、彼の姉さんを嫁に貰えてえが傳次お前は同じ村に居るなら相談して貰いてえと頼まりましたが、そうすれば弟御様は一緒に引取り、先方で世話をしようと言う、お前さんも弟様も仕合せで、此の上もねえ結構な事、お前さんの為を思つて私は相談に来たんだが、早速お話になるよう善は急げだが何うでげしよう」

やま「まことに御親切は有難うございますが、私の身の上は伯父に任して居りますから、伯父さえ得心なれば私は何うでも宜いので」

傳「へえ伯父さんあの多右衛門さんでげすかえ、へえ然うで、堅い方で、長い茶の羽織を着て居るお人かね、時々逢います、あの伯父さんさえ得心なれば宜しいの、宜しい、左様なら」

と直に伯父の処へ行きまして。

傳「へえ御免なさい」

多「はい何方から、さア此方へ」

傳「へえ私は廣藏親分の処に居ります、傳次てえ不調法者で」

多「左様で御ざりやすか、御近所に居りましても碌にお言葉も交しませんで、何分不調法者で、此の後ともお心安く願います」

傳「へえ私も何分お心易く願います、就いてはね、今姉さんの処へ往つたのでですが……あなたには姪御さんでありますね」

多「へえ、おやまに」

傳「へえ姪御さんに逢つてお話をした処が、伯父さんさえ得心になれば宜いと云う嫁の口が出来たので、誠に良い口で、桑名川村の柳田典藏と云う大した立派な武士だが、運が悪いと云いながら此方へ来て田地や何かも余程有り、また是から段々殖そうという売トに手習の師匠に医者てなれえの三点張と云う此のくらい結構な事は有りませんが、彼処へお遣りなすつては何うで、弟御おとこぐるみ引取ると云うので、随分お為になる処でございますが」

多「おやまが貴方あなたに御挨拶致すに伯父が得心なれば構わぬと言いましたか」

傳「え、言いました」

多「何うも自分ではお断りが仕憎いから、大概の事は私の処へ行つて相談して呉れと、まず言い抜ぬけに云いますよ、彼あれはなアとてもな無駄でございます」

傳「へえ何う云う訳で」

## 三十三

多「いえ十六年前あとに親父おやじが行方知れずになつて、今に死んだか生きたか知れない、音も沙汰もねえでございしますが、ひよつと親父が存ぞんしやう生きで歸つた時は、親父に一言の話もしないで聳を取つたり嫁に行つては濟まぬと云つて、姉きやうだい弟だいで、あゝ遣やつて、元服もせずに居りますくらいでござりやすから、何処どこから何なんと云つても駄目だめでござりやす、聳でも取つて遣りたいが中々そやう左様言つたつて聴きアしませんから」

傳「それじゃアお父とつさんが歸らねえでは相談は出来ませんか」

多「へえ親父が歸れば直すくに相談が出来ますが、歸らぬうちは駄目だめでござりやして、ひやア」  
傳「弱よわりましたね、左様なら」

と呆ぼんやり然歸つて来て。

傳「へえ往つて来ました」

典「いやもう待つて居ました」

傳「へえ」

典「何うもね、お前は弁舌が宜し、何かの調子が宜いから先方で得心するなら、多分のお礼は出来ぬが、直にうんと得心の上からは失礼の様だが、まア当座十金差上げるつもりで目録包にして此処に有るので」

傳「へえー、からどうも仕様がねえね、誠に何うもいけません、幾ら金を包んでも仕様がねえあれは」

典「何ういう訳で」

傳「何うたつていけません、誠に話は無しだねえ、親父が十六年あとに行方知れずに成つたから、親父の歸らぬうちは嫁にも行かぬ簀も取らぬ、元服もしねえ、親父に聴かねえうちにしては済まぬてえ彼れは変り者でげす、いけませんよ、へえ」

典「いかぬと云うのか」

傳「えー往かねえと云うのでげす」

典「左様か仕様がな、それは仕方がない、それは先方で厭なんでげしようが、然う云わなければ断り様がないからだ、今時の者が親父が十六年も行方知れず音沙汰のない者を待つて元服もせずに居るなんて、そんなら二十年も三十年も四十年も歸らぬ時は何うする、白髪になつて島田で居る訳にもいかぬが、それは先方が断り様がないから、然う云うのだ、

宜しいく、宜しいけれども実は事を極めて来たら直に礼をする心得で、ちゃんと金も包んで置いたが、仕方がない、是までの事だ」

傳「から何うも仕様がねえ変り者もんでげすな、お前めえさんの云う通り白髪しらがの島田はないからねえ、何うも仕様がねえ何うも」

典「貴公わし私せんぼうの名前を先方へ言いますまいねえ」

傳「私わっちは左様そう言いましたよ、柳田典藏さん様と云う手習てなれえの師匠で、易たつを立て斯こうとすっかり列なまらべ立つたので」

典「それは困りますね、姓名を打明うちあかして呉れては恥入るじやアないか」

傳「だって余よっぽど程受まけが宜いかろうと思つて列なまらべたので」

典「それはいかぬ、先まず先方で縁談とくのが調いなうか否くわしかを聞いて詳くわしくは云わんで、然しかるべき為なになる家うちぐらいの事を云つて、お前行ゆくか、はい参りますとぼんやりでも云つたら、そくく姓名を打明いけて云つても宜いいが、極くらぬうちから姓名を打明いけては困りますな、何うも最もう少し何か事柄わがの解わかるお方かと思つたら存外考えがなかつた、宜しいく、実は荒物屋あらかの店でも貴公きこうに出させようと思つて、二三十金もとしては資本もとしてを入れる了簡りょうかんで、媒なこうど介おや親おやと頼たのまんければ成ならぬと思おもひまして……最もう少し万ま事に届とどく方かたと思つたが、冒頭のつけに姓名を明あかされて

は困りますねえ、実に恥入る」

傳「然う怒つたつていけません、旦那、旦那怒つちやいけません、斯う仕ようじやアござ  
 いませんか、種々いろくわっち私も路々みちく考えたが私の云う事を聴いて然うお前さんまえ云つてしまつて  
 はいけねえ、あれさ、そんな事をぶんく怒つたつていけません、何でも気を長くしなけ  
 れば成らねえ、あの娘は不動様へ又お参りに来ましよう、そこでまだ貴方を見ねえのだけ  
 ら先刻さつち私が話を聴いて見ると、斯ういう墨の羽織を着て、斯々これくの方を御覧かと云つたら  
 急いだから存じませんと云うから、あの娘に貴方を見せたいや、貴方ね、二十二まで独身ひとり  
 で居るのだから、十九や二十で色盛いろざかり男欲しやで居るけれども、貴方をすうつとして美  
 男おとこと知らず、矢張村の百姓と思つて居るから厭だと云うかも知れねえから、お前さ  
 んの色白で黒の羽織を着てね、それが見せたい、まだ当人に逢わないからで、娘が逢いさ  
 えすれば直すぐだからお逢いなさい」

典「逢うたつて、それ程厭てえものを逢う訳にはいきません」

傳「それは工夫で、お前さんと二人で例の茶見世へ行つて、旨くもねえ、碌なものねえ  
 が、美しい酒を持つて行つて一ぱい遣やつて、衝立ついたての内に居るのだね、それで娘がお百度を  
 踏んで帰る所を引張ひっぱりこ込んで、お前さんが乙おつ世辞を云つて一杯飲んでお呉れと盃をさし

て、調子の好い事を云うと、娘はあゝ程の宜い人だ、あゝ云う方なら嫁に行きたいとずうと斯う胸に浮んだ時に、手を取つて斯う酔つた紛れに□つてしまふが宜い、こいつは宜い、これは早い、それで伯父さんに掛合うからいけないが、当人に貴方を見せてえ、これが私は屹度往こうと思つている」

典「だけれども何かどうも赤面の至りだな、無暗に婦人を引張込んで宜しいかねえ」

## 三十四

傳「宜しいたつて、お前さんの様な人は近村に有りやアしません、だからお前さんを見せたい、ちよつと斯う大めかしに着物も着替え、髪も綺麗にしてね」

典「何うも何だか、宜しいかねえ、旨く往くかねえ」

傳「宜しいてえ是は訳はねえ、明日遣りましょう」

と悪い奴も有るもので、柳田典藏も己惚が強いから、

典「じやア往きましょう」

と翌日は彼の大滝村へ怪しい黒の羽織を引掛けて、葎簀張の茶屋へ来て酒肴を並

べ、衝立の蔭で傳次が様子を窺つて居ると、おやまが参つて頻りにお百度を踏み、取急いで帰ろうとすると飛出して、

傳「姉さん」

やま「はい」

傳「此の間は」

やま「はい此の間は誠に」

傳「此間話したね柳田の旦那が彼処で一杯飲んで居るが、一寸お前さんに逢いたいと云つて」

やま「有難うございますが、私は急ぎますから」

傳「お急ぎでしようが、そんな事を云つちやアいけねえ、此間ね、旦那にお頼の事はいけねえと云うと、手前は行きもしねえで嘘だと云つて疑ぐられて居て詰らねえから、お前さん厭でも一寸上つて、傳次さん此間はお草々でしたと云えば宜い、然うすれば私が行つたてえのが通じるのだから、彼処へ往つて一寸私に挨拶するだけ」

やま「いけませんよ」

傳「いけねえてえ私が困るから、野暮なことを云わずにお出でなさい」

と無理に引摺り込ひきずんだから仕方なしにひよろ／＼躑よろけながら上あがり口ぐちへ手を突くと、臀しりを持って押しますから、厭々上つて来ると、柳田典藏は嬉しいが満ちてはつと赤くなり、お世辞を云うも間が悪かったか反身そりみになつて、無闇に扇で額を叩き、口も利かずに扇を振り廻したりして、きよと／＼して変な塩あんばい梅こしらで有りますから、

傳「旦那、旦那お連れ申しました、此方こちらへ／＼、ぐず／＼して居てはいけねえ、姉ねえさんに御挨拶をさ」

典「これは何うも誠に、何か、御信心参りにお出での処ところを斯様なる処へお呼立て申して甚だ御迷惑の次第で有ろうと申した処が、何か、御迷惑でも御酒を飲あがらぬなれば御膳でも上げたいと思つて、一寸これへ、何うも恐入ります、一寸只御酒はいけますまいから、じゃア御膳を」

と云うのを傳次は聞いて、

傳「いけねえね、そんな事ばかり云つて困るな、めかして居て……一寸姉さんお盃を、お酌を致しますから」

やま「何をなさる、お前さん方は何をなさるのでございますえ、私わたくしの様な馬鹿でございませけれども、あなた方は何もお近ちかづき昵むりやりになつた事もない方が無理遣むりやりにこんな処へ手を持つ

て、厭がる者を引張込んで、人の用の妨げをして、酒を飲めなんて、私わたくしは酒のお相手をする様な宿屋や料理茶屋の女とは違います、余り人を馬鹿にした事をなさいますな」

傳「旦那、腹を立つちやアいけねえ……姉さん然そう云つちやアから何うも仕様がねえ、それは然うだがね姉さん人の云う事をお聞きなさいよ、この旦那は早く言えばお前さんに惚れたんだ……旦那、黙もくつて其方そつちにおいてなせえ、お前さん口を出しちやアいけねえ、黙もくつて頭を叩いておいでなさい……姉さん、人の云う事をお聞きよ、此こ間伯父さんへ掛合つたのだ、宜いいかえ、処ところがそれはお父とうさんが居ねえので元服もせず待つて居ると云うお話だから、その事を柳田さんに話すと、それは御ご尤もつともだてんで、今日も柳田さんがお前さんと呼んでくれと云つたのではない、全く私わつちの了簡りょうかんで、旦那は誠に感心な娘だと云うので、どうも十六年も音信おとずれをしない親父おやじを待つて、それ程までに元服もせずに居るとは、実に孝行な事だから嫁が厭なら宜いしいが、実にその志こころざし操なほに傳次なりやや尚惚なほるじやアねえかと斯こういう旦那の心持で、誠まことに尤もつともだからそう云う事ならせめて盃とりの一つも献酬けんじゆして、昵ちかづき近こに成りたいと云うので、決して引張込んで何う斯うすると云う訳じやアないが、お前さんが得心して嫁になれば弟も引取つて世話をすると云う、実に仕合せだから、うんと云つたら宜いいじやアないか」

やま「何をうんと云うのでございますえ、私の身の上は伯父に」

傳「それは伯父さんに聞いたよ、遁辞いひぬげで伯父さんに托かこつけると云う事は知ってる」

やま「知つて居るなれば何も仰しやらんでも宜いじやア有りませんか、私わたくしも今は浪人しては居りますけれども、やはり以前は少々御扶持ごふちを頂きました者の娘でございませぬ、あなた方の御酒のお相手を致すような芸者や旅稼しよろぎの娼妓しょうぎとは違います、余りと申せば失礼を知らぬ馬鹿ばかくしいお方だ」

## 三十五

傳「あれ、それじやア姉ねえさん、だがね、困るねどうも、然そうお前まへさん言つてしまつては：

…何とか云い様が有りそうなものだ、何どうも困るね、左様さようじやア」

やま「左様じやアつて考えて御覽なさい、お前さんは頼まれたか知らないが、此こゝ処いにいらつしやる方は大小を差した立派なお武家様で、人の娘を知りもしない処ところへ無理遣むりやりに引ひきずり込んで、飲めもしない者に盃さかずきをさして何うなさる、彼あの方は本当に馬鹿々々しくして、私わたくしも武士の家に生れたが、武家はそんな乱暴な馬鹿な真似は為しはしません、余あんなまり馬鹿な事

で呆れて愛想もこそも尽果てた厚かましい人だ」

典「なに厚かましいと、何だ、馬鹿々々しいとは何だ、否なら否で宜しい、無理に嫁に貰おうと云う訳ではないが、手前が……」

やま「厚かましいから厚かましいと申しました、袖をお放しなさいよ」

と袖を引張るのを、

やま「お放しなさい」

と立上りながら振切つて百度の籤をぽんと投付けると、柳田典藏の顔へ中つたから痛うございます。はつと面を押えて居るうち戸外へ駈出しました。

典「傳次々々」

傳「へえ、何うも彼の通りで仕様がねえ」

典「だからいけぬと云うに、無理遣りに連れ出して、内々ならば仕様も無いが、斯ういう茶見世へ参つて恥を与えるとは怪しからん事」

傳「お前さん、そう怒つちやアいけねえ」

典「貴様は最う己の家へ来るな」

傳「そんな事を言つてはいけねえ、旦那腹を立ててはいけません、婆がね、娘の跡を追掛

けたが、居ないから最う仕方がないが、お前さん腹を立つちやアいけません、そこは処きむす女めで、仮令たとい向うが惚れていても、氣障きざだよお止しよと振払うのは娘っ子の情で、殊ことには二十二まで何だつて島田で居る様な変り者もんだから、氣短かに何う斯うと云うなア、からもう色をした事もないように、極りが悪いじやア有りませんか、何でも氣長に往いかなければいけません、旦那斯うしましょう」

典「もう手前の云う事は聴かぬ、種々いろくの事を云つて籤さしを投付けて」

傳「籤さしなんぞは何でも無い、此の前張倒されて溝どぶへ落ちた人も有るそうでねえ、斯うなさい、娘を何うかして、そーツと他処わきへ連れて行こう」

典「連れて行つて何うする」

傳「何うすると云つてまアお聞きなさい、何処どこかへ夜連出して、酷ひどい様だが私一人ではいけねえ、ぎやアく云わねえ様に猿轡さるぐつわでも箆はめて、庄吉と二人で葉広山はひろやまへ担かついで行つて、芝原しばはらの綺麗な人の来こねえ処で、さて姉さん、是程惚れて居る者を宜く此間こないだは大滝村で恥を搔かしたな、殺して仕舞うと云うのだが、可愛くつて殺せねえ、若もし云う事を聴かぬ時は武士が立たぬとか男が立たぬとか云つて、何でも女房にようばに成つて呉いやれ否いやてえれば仕方がねえから、腕を押えても□□寝るが何うだ、それよりは得心して知れない様にと云

えば命が惜いから造作アねえ、それから家へ連れて来て、得心ずくでお前さん□□寝ちやア何うです宜うがすか、それで娘の方で屹度惚れるねえ、初めて男の味を覚えて、真にあゝ云う人ならと先方から惚れて、伯父さん嫁に遣つてようと先方から云うよ」

典「うーん然う旨く往くかえ」

傳「それは大丈夫いきますとも」

とそれから様子を窺つて居ると、八月の十八日は白鳥村の鎮守の祭礼で、今日は屹度来るに相違ない、何うかして担ぎ出そうと昼から附けて居ると、昼の中は用が有るから物見遊山にも出ず、不動様へお参りに行くだけで、夜に入って山之助と二人で、祭礼だから見て来ようと云つて来ると、突然に竹藪の茂みから駈出して来て、おやまを担ぎ上げて、どんくくくく林の小路へ駈上りました事でございますから、山之助は盗賊……勾引……と呼んで跣足で追掛けると山之助は典藏に胸をどんと突かれましたから、田の中へ仰向に転がり落ちます。其の中にどんくくと路を走り、葉広山まで担いで駈上ります。折から雨がざあーくと降出して来ましたが、その中をどんくく滑る路を漸々と登りまして芝原へおやまを引据えて、三人で取巻く途端、秋の空の変わり易く忽に雲は晴れ、木の間に漏れる月影に三人の顔を睨み詰め、おやまは口惜いから身を慄わして芝原へ泣倒れまし

た。

三十六

傳「おい姉さん、泣いたっていけねえ、おい、お前本当に今日斯う遣つて担ぎ上げたのは  
酷い、盗賊勾引と思うだろうが、然うでない、実は旦那が又惚れたんだ、お前が籤  
をぽんと投付けて否だと云つたので、何うも堅い娘だ、感心だ、あんな女を女房に貰わな  
いでは己が一旦口を出したのが恥だから、お父さんの帰つた時はどの様にも詫をする……  
担ぎ上げたのは酷いが、話を為たいからの事だが、これから柳田の旦那の処へ行つて……  
なに泊めやアしない、一寸彼処で酒の相手をして、な、否てえれば仕方がねえ、私が中へ  
這入つて旦那に済まねえ、済まねえから二人で腕を押え足を押えて居ても、否でも応でも  
旦那に思いを遂げさせなくちやアならねえが、左様すればお前得心ずくでなく疵を付けら  
れて、他へ縁付く事も出来ねえ、それよりはうんと云つて得心さえすれば弟御も仕合、旦那も斯んな挙動を為たくはねえが、お前があゝ云う気性だから仕方がねえ、よう後生だ、  
ようそれで連れて来たんだ、私が困るから諾と云つて、よう後生だから諾と云つて呉んね

え」

やま「さア殺しておしまい、何うも恐しい悪党だ、徒党をして山へ連れて来て慰さもうとする気か、舌を噛んでも人に肌身を汚けがされるものか、さア殺してしまえ」

傳「それじやア仕様がねえ、おいそんな事を……お前めえが否だと云えば手足を押えても□□ぜ」

やま「慰めば舌を喰切つて」

典「なに」

傳「旦那腹を立つてはいけねえ、おい姉ねえさん、お前めえ否だと云えば仕方がない」

と無理遣むりやりに手を取りますと、

やま「何を、放せえ」

と手に喰付きますから、

傳「いけねえ、此のあまつちよ、おい庄吉さん□□□□□□」

と□□□□押おし転こし、庄吉は足を押える。

やま「ひー殺してしまえ、殺せえ」

と云う声は袂こたまに響うしろきます、後の三峰堂のみみねどうの中に雨止あまやみをしていた行脚あんぎゃの旅僧たびそう、今一

人は供と見えて菅すがの深い三度笠さんどうがきに廻し合羽あひうで、柄前つかまえへ皮を巻いて、鉄拵てつこしらえの胴どうが  
金ねに手を掛け、千草木綿ちくさもめんの股引こうがけに甲掛草鞋穿こうがけわらしばきで旅馴れた姿、明荷あけにを脇に置き、一人は  
鼠ねずの頭陀ずだを頸くびに掛け、白い脚半きゃはんに甲掛草鞋。

男「あゝ、気の毒な、助けて遣やらん」

と飛出しましたのは前申ぜん上げました水司又市の永禪和尚、彼の川口の薬師堂に寺男にな  
つて居ると、尼様に寺男が御経を教えて居る、あれは寺男が本当の坊主の果で有ろうと段  
々噂うわさが高くなり、薄気味が悪いから、川口を去つて越後から倉下道くらげみちを山越をして信濃路  
へ掛つて、葉広山の根方を通り掛ると村雨に逢い、少しの間雨止あまやみと三峰堂へ這入つて居  
ると、雨も止みましたから、支度をして出ようと思ふ処へ人殺し、殺してしまえと云う女  
の鉄切り声かねきりゆえ、つか／＼と飛出しまして、又市は物をも言わずに、娘の腕を押えて居り  
ました傳次の襟えり髪がみを取つて引倒し、足を押えて居た庄吉の頤あごを土足で蹴倒しますると、  
柳田典藏は驚き、何者だと長いのを引抜いて振上げる。此方こちも透すかさず道中差をすらりつと  
引抜き、

又「何者とは何だ、悪い奴らだ、纖弱かよわい女を連れて来て、手前達てまいたちが何か慰もうと云うの  
か、ひい／＼泣く者を不埒な奴だ、旅だから許してやる、さつ／＼と行いけ、兎とや角こう云え

ば承知致さぬぞ、さつさつと行け」

傳「あゝ痛え、突然に無闇と蹴やアがつて、飛んだ奴だ、手前は訳を知るめえが己達は

かどわかし

勾引でも何でもねえ、この女には訳があつて旦那に済まねえ廉が有るから、此方が為

になる様に納得させようと思つて居るのに、きいきい云やアがるから嚇しに押えるのだ、

お前は何も知らねえで、何もいらざる所へ邪魔アしやアがるな、旅の者だと吐しやアがる

手前は

と月影で顔を見合せると、互に見忘れませぬ。又市も傳次も見たようなど思うと、庄吉

は宗慈寺に旧來奉公して居りましたから永禪和尚の顔を能く知つて居りますから、

庄「えゝゝゝゝ貴方は高岡の永禪様」

永「庄吉か」

庄「永禪様か」

と此の時は又市も驚きまして、此奴らは吾身上を知つて居る上からは助けて置いては

二人の難儀と思ひ、永禪和尚と声を掛けられるや否や持つて居た刀で庄吉の肩へ深く切付

ける、庄吉はきやアと云つて倒れる。傳次は驚いて逃げに掛る処を袈裟掛に切りましたか

ら、ぱったり倒れると、柳田典藏は残念に思ひ、この乱暴人と自分の乱暴人を忘れ振冠

冠

冠

つて切掛ける。又市は受損じ、蹠めく機みに又市が小鬢をはすつて頭へ少し切込まれたが、又市は覚えの腕前返す刀に典藏が肱の辺へ切込みますと、典藏は驚き、抜刀を持ちながらばら／＼／＼／＼山から駈下りました。傳次は面部へ疵を受けながら、

「太え奴だ人殺し」

と又市の足へ縫り付く処を。

又「放せえ、うーん」

と止めを刺しましたから、其の儘息は絶えました。

永「惠梅々々」

梅「はい恟りしました」

又「宜いかえ」

梅「あゝ怖い」

又「お前は嘸怖かつたで有ろうのう、斯様な奴を助けて置くと村方を騒がして何の様な事を為るかも知れぬから、土地の助けに殺したのだ」

やま「有難うございます、命の親でございます」

と手を合せたが、おやまは後へ下る、是は又市が刃物を持って居りますから気味が悪い

から後へ下る。

又「何も心配は無いから」

と血のりぬぐを拭ぬぐつて鞆さやに納め、額の疵へ頭陀の中より膏藥こうやくを出して貼付け、後鉢巻うしろはちまきをし  
て、

又「さア是から家うちまで送ろう」

とおやまの手を取つて白島村へ帰ろうとする途中、山之助が帰つて伯父に知らせたから、村方の百姓二十人許ばかりおやまの行方を捜しに来る者に途中で出逢い、これから家まで送り届けると云う。是が縁に成つて惠梅と水司又市の二人がおやま山之助の家へ来て永く足を留める。これが又一つ仇討あだうちに成りまする端緒いとぐちでございます。

### 三十七

おやまの危あやうい処ところを助けて、水司又市と惠梅比丘尼は彼かのおやまの家うちまで送つて参る途中で出会いました者は、弟山之助に村方の者でございます。

山「姉は何処どこへ担がれて参つたかと、伯父多右衛門と大きに心配して尋ねに参る処で、貴

方が助けて下さったか有難う存じます」

皆々も大悦びでございます。

又「実は斯う云う訳で、はか匭らずも通り掛つてお助け申したが実に危あぶない事であつた、併しかしお怪我もなく幸いの事で有りましたが、就つては私わしも止むを得ず二人まで殺したから其の屈を出さなければ成るまいが」

多「はい、届けましても御心配はございません、重々悪い事が有る奴でございませうから」  
と是から名主へ届けました処が、素もとより悪人という事は村方で大概ほしの付いて居ります旅魚屋の傳次なり、おやまを辱はかずかしめようとした廉かどがあり、直すぐに桑名川村へ調べに参ると、典藏は家を畳み、急に逐電致しました故、此の事は山家ではあるし、事なく済みましたが、此方こつちは急ぐ旅でないから疵きずの癒なほる間逗留して下さいと云われ、おやま山之助二人暮しの田舎住居ずまい、又市は幸いにして膏藥を貼つて此の家いえに逗留して居る間は、惠梅比丘尼は方々へ齋ときに頼まれて参り、種いろく々な因縁話を致しまして、

梅「私も因縁あつて尼になり、誠に私は若い時分種々の苦勞も有つたが、只今では仏道に入つて胸の雲も晴れて、実に世の中を氣樂に渡る、是こが極樂と申します」

などと、尤もつともらしい事を云うと、田舎の百姓衆は此方こちらへ何卒どうぞいらつしやつて、私の親類

が三里先に有りますが、是へもと云つてお布施を貰い、諸方へ参つてお齋を致しますと、お布施の外ほかに割ひきわり麦あるい或は粟稗あわねえなどを貰つて、おやまの家の物うちを食つて居るから、実は何時いつまでも置いて貰いたいと思つて居りますうちに疵も癒り、或日あるひ惠梅比丘尼は山之助と隣村まで参りまして、又市は疵口の膏藥を貼替えまして、白布で巻いては居りますが、疵も大方癒いえたから酒さけ好ずきと云う事を知り、膳ぜん立だてをして種々の肴こしらを拵えまして、

やま「もしあなた、一杯お酒を癪つけましたから召上りませんか、お医者様も少し位召上つても障さわりには成らないと仰しやりますから、一口召上りまして」

又「いや誠に有難う、大した事ではなし、一体酒が好すきで旅をするには一杯飲めば気が晴れるから、宿で一杯出せば尼様に隠ないしよして内所ないしよで飲むこともある、これはく有難う……え、お前はまア姉きょうだい弟いしゆう衆二人ながら仲よう稼いぎなさる、暗いうちから起きて糸を繰つたり機はたを織つたり、また山之助さんは牛馬ぎゆうばを牽ひいて姉弟で斯う稼いぐ人は余り見た事がない、実に感心の事じゃ」

やま「いゝえもう二人ながら未だ子供のようでごいます、彼あれが年も往いきませんから届きません、只私を大事にして呉れます、日々あゝやつて御城下へ参りまして、荷を置いて参ります、又彼方あちらから参る物は此方こちらへ積んで参りまして少々の賃ちんせん錢せんを戴かきます、はい宜く

稼ぎますが、丁度飯山の御城下へまいり、お酒の美しいのを買つて参りましたが、お肴は何にもございせんが、召上つて下さいまし」

又「いや此処らは山家でも御城下近いから便利でございます、一杯頂戴致しましょう、是ははい御馳走に成ります……一杯酌いで下さい、四五日酒を止めて居たので酔いはせんかな」

やま「どうぞ召上つて」

となみくとつぐ。素より好きな酒、又市二三杯飲むうち、少し止めて居たから顔へ色がぼうと出ましたけれども、桜色という訳にはいきません、栗皮茶のような色に成りましたが、だんくと酔が廻りますと、もとより邪淫奸智の曲者、おやまは年齢二十二でございます、美くしい盛りで、莞爾と笑います顔を、余念なく見て居りましたが、又「あゝ見惚れますねえ、お前さんの其の、品の良いこつちやなア……あゝ最う十分に酔いました、もしおやまさんく」

やま「はい」

又「あの何で、この先に伯父さんが有るが、彼はあなたの真実の伯父さんかえ」

やま「はい私の真実の伯父でございます」

又「御両親はないのかえ」

やま「はい両親はまあない様なものでございます、母は亡くなりましたが、親父は私の少さい時分行方知れずに成りましてから、いまだに音沙汰がございません、死んだと存じまして出た日を命日として居りますが、ひよつとして存命で帰って来たらと姉弟で信心して居ります位で」

又「はア左様かえ、お前さんまだ御亭主は持たずに」

やま「はい」

又「二十二に成つて亭主を持たずに、此のどうも花なら半開という処その何うも露を含める処を、斯う遣つて置くは実に惜しいものじゃアね、お前さん」

やま「はい」

又「お前まアねえ、一杯飲みなさいな」

やま「いゝえ私は御酒は少しも戴きません」

又「其様な事云わんでも宜い、私のじゃアに依つて半分ぐらい飲んで呉れても宜いじゃないか」

## 三十八

やま「いゝえ半分などと仰しやつては困ります、お厭なれば何卒其処へお残し遊ばして」  
又「おやまさん、私は最うこれ四十に近い年をして、お前のような若い女子を想うても是は無駄と知つては居るが、真実お前のような柔しい、器量といい、其のどうも取廻しなり口の利きようといい別じやアて、心に想うて居ても私はまア今まで口に出して言やせぬが何うだえ、私は真実お前に惚れたぜ」

とおやまの手を取つてぐつと引寄せに掛りましたから堅い娘で驚きまして、振払つて後へずうと下りまして、呆れて又市の顔を見て居りました。

又「怖がつて逃げんでも宜いじやないか」

やま「あらまア貴方御冗談ばかり仰しやつて困りますよ」

又「困る訳はない、宜いじやアないか、えゝ只た一度でもお前私の云う事を聴いて呉れたら、お前の為には何の様に情合を尽そうと思つて居る」

やま「御冗談でございましょう、貴方の様な方が私の様な者にそんな事を仰しやつても私は本当とは思いません」

又「何故、私は年を取つて冗談やおどけにお前さん此様な事を言掛ける事はない、お前さん、実は疾うから真に想うても云出し兼ていたが、酔うた紛れに云うじやアないけれども、お前さん私は只た一度で諦めますぜ」

やま「あなた本当に仰しやるのですか」

又「本当だつて今まで如何にも好い娘じやアと思うても色気も何も出やアせぬが、けれども朝夕膏藥を貼替えて呉れる其の優しい手で額を斯う押えて呉れまする、其のどうも手当に私は惚れた、さア最う斯う云い出したら恥も外聞もないじやア、誰も居らぬは幸いじやア、只た一度で諦めるから」

やま「あら呆れたお方様で、それでは折角の貴方御親切も水の泡になります、伯父も彼様なお方はない、額に疵を受けるまで命懸で助けて下さつたから、その御恩を忘れては濟まないよと伯父も申しますから、私も有難いお方と存じて居りまして、実に届かぬながらお世話致します心得でございますに、そんな事を仰しやつて下さると実に腹が立ちます」

又「腹が立ちますと云つたつて、恩義に掛けるわけではないが、けれども、宜いじやアないか、私も命懸で彼処へ這入つて助け、私が通り掛らぬ時は、悪者に押え付けられて、否でも応でも三人のため瑕瑾が付くじやアないか、それを助けて上げたから、彼処で□□□

□れたと思うて素性の知れた私に一度ぐらい云う事を聴いても宜いじゃアないか」

やま「貴方にはお内儀かみさんがお有んなさるではございませんか」

又「女房は有りやせん」

やま「あら恵梅様は貴方のお内儀でございます、お比丘尼様に済みませんから貴方の側へは参りません」

又「比丘だつて彼あれは女房ではない、彼れは山口の薬師堂に居た時に私わしは寺男に這入つたので」

やま「それでも夜分は一緒に御寝げしなるじやアございませんか」

又「御寝なるたつて彼奴あいつが薬師堂に居た時、私わしは奉公に這入つたが、彼奴も未だ老朽おいくちる年でもないから、肌寒いよつて、この夜着の中へ這入つて寝ろと云うので、抛よんろなく這入つて寝たが、婆ア比丘尼じやアから厭いやでくならん、お前がうんと云うてくれ、ば、恵梅に別れて、私は此処こゝの家へ這入つて働き男になり、牛馬うしまを牽ひいたり、山で籠そだをこなし、田畑へ出て鋤すき取つても随分お前の手助けしようじやアないか、然そうして置いて下さい」

やま「そんな事を仰しやつては困ります、それでは明日あしたにも直すぐにお発足たち遊ばして下さい、私わたくしは御恩になつたお方ゆえ大事と思うから手厚くお世話をするのでございます、それを恩

に掛けるなれば、私も随分貴方へ御恩報じと思つて出来ないながらも看病して居る心得でございませす、はい」

又「お前のように堅く出られては面白くない、そんな事を云わずに」

と無理遣りに手を取つて引寄せます。この時は腹が立ちますから殴付けてやりたいと思うが、そこは命を助けられた恩義が有るから、余り無下にしても愛想<sup>あいそうづか</sup>尽し気の毒と存じまして、おやまは何うしようかともじくして居ります。

### 三十九

又市は増長して無理に引付け、髻<sup>ひげ</sup>だらけの頬片<sup>ほうぺた</sup>をおやまに擦り<sup>こす</sup>付けようとする処<sup>ところ</sup>へ、帰つて来たは惠梅に山之助でございませす、山之助は気の毒だから後<sup>あと</sup>へ下<sup>さが</sup>る。惠梅は腹を立て、鹿<sup>そだ</sup>朶<sup>だ</sup>を持つて二三度続けて殴つたから胆<sup>きも</sup>を潰<sup>つぶ</sup>して、

又「いや帰つたか」

梅「まことに呆れてしまつて……おやまさん、さぞ腹が立ちましたろう、私も恟<sup>びつく</sup>りしました、山之助さんにも誠にお気の毒で、お前さん何をするのだよ、おやまさんにさ」

又「誠に困つたなア、今御馳走が出たので一杯遣つた処、つい酔うてそのな、酒を飲めば若い女子に冗談をするは酒飲の当り前だ、突然打ちやアがって、打たんでも宜いわ」

梅「おやまささんお腹も立ちましたろうが堪忍して下さいよ、私は少し云う事が有りますから彼方へ行つて居て下さい、余まりやれこれ云つて下さると増長するのでございますからどうぞ其方へ……又市さん今の真似はあれは何だえ」

又「酔うたのだよ、酔うて居るから宥せと云うに……困つたね、突然打つとは酷い、疵が出来たらどうも成らん、みともないわ」

梅「何だえ今の真似は、ようお前幾歳にお成りだよ、命を助けたの何のと恩義に掛けて、あの娘が彼様に厭がるものを無理に引寄せてなぐさむ了簡かえ、呆れた人だね、怖い人だね」

又「怖い事は有りやせん、若い娘にからかうは酒飲の当り前だ」

梅「当り前だつて宿屋の女中や芸者じゃアない、一軒の主じゃアないか、然うして姉弟で堅くして彼アやつて、温和しくして居る堅人だよ、伯父さんも村方で何とか彼と云われる人で失礼ではないか、お前さんを主人の様に、姉弟二人で私の事を尼様々々と大事に云つて呉れるじゃアないか、それに恩を被せてあんな真似をすれば、今までの事は

水の泡に成るじやアないか」

又「己が悪いから宥せ」

梅「宥せじやアない、お前さんは何だね、あの娘がもし義理に引かされて、仕方なしにアいと云つたら、あの娘をなくさんで、あの娘と訝わかしい中になると、私を見捨てる気だね」

又「いゝや見捨てやアせんじやア、そのような心ではない」

梅「おとぼけでない、嘘ばかり吐ついて、越後の山口でお前の処へ這込んだ助倍すけべい比丘尼と云つたらう」

又「あゝ聞いて居たな、酔うた紛れだ……打ぶつな、血が染にじんで来た」

梅「私はお前さん故で斯こんな様に馴れない旅をして、峠を越したり、夜夜よるよなか中歩いて怖い思いをするのはお前さん故だよ、お前さんも元は榊原様の藩中で、水司又市と云う立派な侍では有りませんか、武士に二言はない、決して見捨てない、おれも今までの坊主とは違い、元の武士の了簡に成つたから見捨てないと云うから、亭主にしたけれども、お前さん何だろう、浮気をして私を見捨てる人だと思つと心細くつて、附いて居るも何だかどうも案じられて、見捨られたら何うしようと思つと、こんな山の中へ来てと考えると心細くなるよ」

又「見捨てやアせん」

梅「見捨てかねないじやアないか、見捨てられて難儀するも罰ばちと思うのさ、終ついには七兵衛さんの祟たよりでも、私の身も未始終碌すえな事はないと思つては居りますけれどね」

又「愚痴をいうな、一寸ちよつと酔うた紛れに云うたのだ：大きな声をするなよ」

梅「お前さんも高岡の大王町で永禪和尚という一箇寺の住職の身の上で有りながら、亭主のある私に無理な事を云うから、否いやとも云えない義理詰に、お前さんと斯こういう訳に成つたのが私の因果さ、それで七兵衛さんを薪割で殺して」

又「これ馬鹿、大きな声をするな」

梅「云いたくもないけれどもさ、先刻さつき云う事を聞けば、比丘尼を打捨うちちやつてしもうても、お前がうんと云う事を聴けば、おれは此の家うちへ這入つて、寺男同様な働きをして牛馬うしまを牽ひいて百姓にもなろうと云つたが、能よくそんな事が云われた義理だと思つて居るよう」

## 四十

又「それは悪いよ、悪いが大きな声をして聞えると悪いやアな」

梅「いったつて宜いいよ」

又「馬鹿いうなよ」

梅「言つたつて宜うございます」

又「宜いたつて、此の事が世間に知れちやアお互に」

梅「お互だつて当りまえで、馬鹿々々しいね、本当に能くあんなことが云われたと思うのだよ、私は本当に高岡を出て、お前に連れられて飛驒の高山越に」

又「そんな事を云うな、己が悪いよ」

梅「唯悪いと云えば宜、かと思つて、お前は見捨るる了簡になつたね」

又「あいたくくく痛い、捻り上げて痛いわ、何じやア」

梅「痛いてえ余まりで」

又「また殴付けやアがる、これ己が悪いから宥せと云うに、おれが酔うたのだ、はつと云う機みじやア」

梅「わたしはもう厭だ、此処に居るのは厭だよ、立つよ」

又「おれも立つよ、おれが悪いから宥せ」

と愠氣でいうが、世間へ漏れては成りませんから、又市は種々に宥めて、その晩は共に臥りましたことで、先ず機嫌も直りましたが、翌朝になり、又市は此処に長く居ては

都合が悪いと心得、正午時分までは何事もなかつて居りましたが、昼飯を食つてしまつて急に出立と成りましたから、おやまも悦び、いやな奴だから早く立つた方が宜い、それでも義理だから伯父を喚んで詰らぬ物でも餞別など致します。これを又市が脊負いまして暇乞をして出立致しました。御案内の通りあれから白島村を出まして、青倉より横倉へ掛り、筑摩川の川上を越えまして月岡村へ出まして、あれから城坂峠へ掛ります。此方を遅く立ちましたから、月岡へ泊れば少し早いなれども丁度宜いのを、長い峠を越そうと無暗に峠へ掛りますと、松柏生茂り、下を見ると谷川の流れも木の間より見え、月岡の市街を振返つて見ると、最うちらく灯のつく刻限。

又「あゝまだ月が出ねえで、真闇になつたのう」

梅「ちよつとくゝ又市さん、私は斯様に暗い処ではないと思つたが、斯様に暗くなつては

提灯がなくなつては歩けないよ」

又「提灯は持つている」

梅「灯火をお点けな」

又「もう些と先へ行つて」

梅「先へ行つたつて真暗で仕様がな、全体月岡へ泊れば宜いに、この峠を夜越して来

たから仕様がないうよ」

又「己も越したくも何ともないわ、え、汝がぎやア〜騒ぎ立てるから彼処の家にも居られず、急ぐ旅ではなし、彼処に泊つて彼処の物を喰つて居て、お齋に出て貰つた物が溜れうから居られないで、抛なく立つて来たのだ」

梅「よんどころなく立つたにもしろ月岡へ泊れば宜いのに、夜になつて峠を越すのは困るね」

又「困つて悪ければ是から別れよう」

梅「別れて何うするの」

又「汝おれが横面を宜くも人中で打つたな」

梅「打つたつてお前そんな事を何時までも腹を立て居るがね、私も腹立紛れに打つたのじゃアないか、彼の娘が義理づくで、命を助けられた恩義が有るから、お前の云う事を聴けば見捨てかねないよ」

又「仮令見捨てると云つたにもせよ、何故苟にも亭主の横面を打つという事が有るか」

梅「打つたのは悪いが、お前さんも彼様な事をお云いだから、私も打つたのじゃアないか」

又「打つたで済むか、殊ことに面部おのれの此こゝの疵縫きずうた処ほころが綻ほころびたら何うもならん、亭主おのれの横面よこつらを  
麩そだ朶だで打つてえ事が有るか、太ふてえ奴やつじやア汝おのれ」

と拳こぶしを固めて、ほんど惠梅比丘尼おのれの横面よこつらを打つたから眼まなこから火かが出るよう。

梅「あゝ……痛い、何なにをするのだね、何なにを打つのだよ」

又「打つたが何なにうした」

梅「呆おろれてしまう、腹はらが立つなればね、宿屋しゆくやへ泊おちつつて落著おちついてお云いいな、何もこんな夜道よみちの峠とせへかゝつて、人も居いない処ところへ来て打擲ぶちたきするは余あまりじやアないか、此こゝ処ところで別わかれるとお云いいのはお前まへ見捨みすてる了しまり簡かんかえ」

#### 四十一

又「己おのれは愛想あいそが尽あきて厭いとになつた、ふつゝ厭いとになつた、坊主頭ぼくしやうを抱かかえて好よい年としをして嫉や  
妬ねたを云いやアがるし、いやらしい事ことばかり云いうから腹はらが立つて堪たまらんわい、人中にんちゆうだから耐こ  
えて居いた、殊ことに亭主おのれの頭あたまを打ぶちやアがつて、さア是こゝれで別わかれよう」

梅「呆おろれてしまった、私わたしを見捨みすてる……あ痛い何なにをするのだね、何なにうも怖ころしい人ひとじやアな

いか、腹立紛れに打つたのは悪いと謝まるじやアないか、こんな峠へ来て何だねえ、私を見捨て、ゆきところ行 処ゆきところのない様にして何うする気だねえ」

又「何うも斯こうもない、一大事の事を嫉妬やきもちまぎ紛れにぎやア／＼云つて、二人の首の落るを知らぬか、余あんまり馬鹿で愛想が尽きた」

梅「愛想が尽きたつてお前さん」

又「さつ／＼と行ゆけ」

梅「あれ危い、胸を突いて谷へでも落ちたら何うするのだね、本当に怖い人だ、それじやア何だね私にお前愛想がつきて邪魔になるから、お前の身の上を知つて居るから谷へ突落して殺す了簡かえ」

又「え、知れた事だ」

と云いながら道中差の小長いのを引抜きましたから、お梅は驚きまして、ばた／＼／＼逃げかゝりましたなれども、足場の悪い城坂峠、殊には夜道でございますから、あれ人殺しと声を立てに掛つたが、相手は亭主、そこは情と云うものが有るから、人殺しと云つたら人でも出て来て、二人の難儀に成りはしないかと思ひ、

梅「あれ気を静めないか、全く別れるなら話合いに」

と言掛けますが、最<sup>も</sup>取<sup>とりの</sup>上<sup>の</sup>せて居りますから、木の根に躓<sup>つまづ</sup>き倒れる処を此方<sup>こちら</sup>は駈<sup>かけ</sup>下<sup>り</sup>りながら一刀浴せ掛ければ、惠梅比丘尼の肩先深く切付けました。

梅「あゝ私を切つたな悪党、お前は私を殺して彼<sup>あ</sup>のおやまさんを又口説こうという了簡<sup>な</sup>だ

と足にしがみ付くを、

又「おゝ知れた事だ」

と云いながら、刀を逆手<sup>さかて</sup>に持直し、肩<sup>かいらほね</sup> 胛<sup>の</sup>の所からうんと力に任して突きながら抉<sup>こじ</sup>り廻したから、只<sup>たつ</sup>た一突きでぶるゝと身を慄わして、其の儘息は絶えましたが、麓<sup>ふもと</sup>からは来はせぬかと見ましたが、誰<sup>たれ</sup>あつて来る様子もないから、まず谷へ死骸を突落そうと思うと、又市の裾に縋<sup>すが</sup>り付いたなりで狂い死<sup>しに</sup>を致しました故中々放す事が出来ませんから、惠梅の指を二三本切落して、非道にも谷川へごろゝゝゝとんと突落し、饞別に貰いました小豆<sup>あずき</sup>や稗<sup>ひえ</sup>は邪魔になりますから谷へ捨て、血<sup>のり</sup>を拭つて鞆に納め、これから支度<sup>たす</sup>をして、元来た道を白島村へ帰つて来ました。悪い奴は悪い奴で、おやまの家<sup>うち</sup>の軒下<sup>たす</sup>へ佇<sup>す</sup>んで様子を聞くと、おやま山之助は、何かこそゝ話をしている様子でございませぬ。とんゝゝ

又「おやまさん」

山「はい誰だえ」

又「一寸開けてお呉んなさい、又市じやア明けてお呉んなさい」

やま「又来たよ、又市が何うして来たねえ」

山「はい何でございますか、昼間お立ちなすった方ですか」

又「一寸開けて下さい、災難事が有つて来たから」

山「はいく」

と山之助が表の半戸はんどを開けますと、きよとくしながら這入つて、

又「此方こちうらへ惠梅比丘尼は来ませんか」

山「いゝえお出いでなさいません」

又「はてな何うも、今に此方へ来るに相違ないが、城坂峠へ掛るとね、全体月岡へ泊れば宜かつたが、修行の身の上路銀も乏しいから一二里は踏越そうと思つたから、峠の中ばまで掛ると、四人ばかり追剥がら出して、身ぐるみ脱いで置いて往いけという故、此方こつちは修行者でございますから路銀は有りませぬ、お比丘尼を助けてと云うに、然そうは往かぬときらくする刀を抜いて威おどす故、私わしがお比丘めくばに目配せしたら惠梅比丘尼は林の中へ駈込んで逃

げたから、最う宜いと思ひ、種々云つて透を見て逃げようと思ひ、只今上げます、些とばかり旅銀も有るから差上げますから、手をお放しなさいと云うと、ほっと手が放れるが否や、転がり落ちて死ぬるか生るか二つ一つと、一生懸命谷へ駈け下り逃げたが、比丘尼は外へ行く処はない、お前さんの処へ来るに相違ないと思つたが、未だ来ませんか」

## 四十二

やま「あれまア、余まり遅うお立で、途中で間違が有つてはいけませんと思ひましたが、それはくお比丘様は今にお出でしようからお上りなすつて……山之助お草鞋でおいでなさるから足を洗つて」

又「いや怖い目に遭いました、あゝ心持が悪い、二三人できらくするのを抜きました故な、此方も命がけで切抜けました故、疵を受けたかも知れぬ、着物に血が着いて居るよう  
で」

山「足を洗つてお上りなさい」

又「はい、私は怖くて胸の動気が止まらない、どうぞ度胸定めに酒を一杯下さい」

とはから酒を飲んで空々しい事を云って寝ましたが、此方は真実と心得伯父に話をする  
と、惠梅比丘尼の行方を尋ねますと、月岡村の雪崩法寿院なだれほうじゆいんという寺の山清水の流れに尼  
の死骸が有ると云うので、その村の人々が気の毒な事と云うて、彼方へ是を葬りました事  
が、翌日の日暮方に分りましたので、

山「何なにともお気の毒様で申そう様もございませぬ」

又「いや私も今聞きました、山之助さん、まア情ないことに成りました、私は盗人に  
胸倉を取られて居る、惠梅は取られた胸倉を振切つて先へ駈下りたなれどなア、女子で足  
は弱し、悪い奴に取囲まれ、切られて死んだかと思えば憫然ふびんじゃなア、月岡の寺へ葬りに  
なりましたとは知らずに居りましたが、左様かえ、致し方はない、何うも情ないことで」

山「誠にお気の毒様、嘸さぞお力落しでございませぬ」

又「年を取つて女房に別れるは誠に厭な心持じゃア、大きに御苦勞を掛けましたが何うも  
仕方がない、不思議の因縁じゃアに依つて山之助さん、お前さん方も月岡まで寺参りに往  
つて下さい、私も比丘を葬りました其のお寺で法事でも為して貰もらいたい、よくく因縁の悪  
いと見えてまア是れ情ない、出家を遂げても劍難に遭うて死ぬは、何ぞ前世の約束で有り  
ましよう、実に胸が痛うて成らん、お酒を一杯下さらんか」

と其様な事を云つては酒ばかり飲んで居りますが其の夜部屋に這入つて寝ますと、水司又市はぐうぐうと空 軒を搔いて寝た振りをして居ります。山之助おやまも寝ました様子でございませうから、そうツと起きまして、おやまの寝て居ります後の処へ来まして、横にころりと寝まして、おやまの□□襟の間へ手を入れましたから。おやまは眼を覺し、  
やま「何をなさる」

又「静かに」

やま「え、恠り致しました、何をなさるので」

又「おやまさん、私はお前さんに面目ないが、実は命がけで年にも恥じずお前さんに惚れました、それ故に此の間酔つた紛れに彼様な猥らしい事を云かけて、お前さんが腹を立て、愛想尽しを云うたが、何と云われても致し方はないと私は真実お前に惚れて、是からは何処へも行く処はない身の上じやアに依つて、私がお前さんの家の厄介者になり、まア年も往かぬ若い 姉 弟衆の力になる心得で、何の様にも真実を尽すが、なれどもお互いに此の気の置けぬ様に生涯一つ処に居る事は、□□れて居ないでは居られるものではないなア、本が他人じやアが年を取つて居るから亭主に成ろうとは云わぬが、只た一度でも□触れて居れば、是から先お前が亭主を持つとも、どう成つても其処が義理じや、追出しもせま

い、是程まで思詰めたから只た一度云う事を聴いて下さい」

と云われ余りの事に腹が立ちますから起上つて、おやまは又市の顔を睨みつけ、

やま「只た今出て行つて下さい、呆れたお方だ、怖いお方だ、何ぞと云うと命を助けた疵が出来たと恩がましい事を仰しやつて猥らしい、此の間は御酒の機嫌と思いましたが、今の様子の御酒も飲まずに白面の狂人、そんな事を仰しやつては実に困ります、そんなお方とは存じませんで伯父も見損じました、只た今出て行つて下さい」

又「お前、何で私が是程まで惚れたに愛想尽しを云つて、年を取つて男は醜くも、それ程まで思うてくれるか憫然な人という情がなければ成らぬが何んで其の様に憎いかえ」

#### 四十三

やま「はい、あのお前さんが情知らずのお人かと存じます、惠梅様と云う女房が災難で切殺されて、明日法事をなさると云う、お寺参りに往く身の上じゃ有りませんか、その女房が死んで七日も経たぬ中に、私に其様な猥らしい事を言掛けるのは、余り情のない怖ろしいお方と、ふつ／＼貴方には愛想が尽きました」

又「惠梅も憎くはないが、実は私が殺したのじゃア」

やま「え……」

又「さア、斯う私が悪事を打明けたら致し方はない、実は私が殺したのじゃア、お前此の間何と云うた、惠梅さんと云うお方は貴方の女房じゃアないか、彼のお方に義理が立ちません、私の云う事は聴かれませんかと云うから、惠梅がなければ云う事を聴こうかと思つて、殺して此方へ歸つて来たのじゃア、何うじゃア」

やま「まアどうも怖いお方でございます」

と慄えながら云うのを山之助は寝た振りをして聞いて居りましたが、うつかり口出しも出来ぬから、何うしよう、こつそり拔出し、伯父の処へ駈けて往こうかと種々心配して居りますと、

又「お前これ程まで云うても云うことを聴かれぬか」

やま「聴かれませんが、怖くつて、恐ろしい、お置き申すわけにはいきません、只つた今おいでなすつて下さい」

又「云う事を聴かれぬ時は仕方がない、今こそは寺男なれども、元私は武士じゃア、斯う言出して恥を搔かれては歸られませんか、さア此処に私の刃物がある」

やま「あれ、脇差を持つておいでなすったね」

又「さア、可愛さ余つて憎さが百倍で殺す氣に成るが、何うじゃア」

やま「これは面白い、はい、私が云う事を聴かない時は殺すとは恐ろしいお方、さア殺すならお殺しなさい」

又「これさ、何うしてお前が可愛くつて殺せやあせぬ、殺すまでお前に惚れたと云うのじや」

やま「何を仰しやる、死ぬ程惚れられても私は厭だ、誰が云う事を聴くものか、厭でく愛想が尽きたから行つて下さいよう」

又「愛想が……本当に切る氣に成りますぞ」

やま「さアお切りなさい」

又「然う云われても殺す氣ならば、是ほど思やアせんじやアないか、えゝか、ほんに云う事を聴かぬと、私は思い切つて切りますぞ」

と嚇おどす了簡と見えて、道中差を四五寸ばかり抜掛けました。是を見るとおやまは驚きまして、

やま「あれえ人殺し」

と云つて駈出しました。山之助も驚き飛上り、又市の髻たぶさとを把つて、

山「姉さんあねを何うする」

と引きましたが、引かれる途端に斯う脇差が抜けました。一方かたは拔身を見たから、

やま「人殺しイ」

と駈出しますのを又市は、人殺しと云うは惠梅を殺した事を訴人そにんすると心得ましたから、人を殺し又悪事を重ねても己おのれの罪を隠そうと思つて浅ましい心からおやまを遣やつては成らぬと山之助を突除つきのけて土間へ駈下かけおり、後から飛かゝつて、おやまの肩へ深く切掛うしろけました。おやまは前へがっぽと倒れる、山之助は姉の切られたのを見て驚き、うろ／＼して四辺あたりを見廻しますと、枕元に合図の竹法螺たけぼらが有りますから、是を取つて切られる迄もと、ぶう／＼と竹法螺を吹きました。山家やまがでは何方どちからにも一本ずつ有りました、事が有れば必ず是を吹きますから、山之助が吹出すと直隣じきでぶう／＼と吹く、すると又向うの方でぶう／＼と云う、一軒吹出すと離れて居ても山で吹出す、川端の家でも吹出すと、村中で家数いえかずも沢山たんと有りませんが、ぶう／＼と竹法螺を吹出し、何事かと獵人かりゆうども有るから鉄砲を担かつぎ、又は鎌あるい或は鋤すき鋤わなどを持つて段々村中の者が集まるといふ。これから水司又市を取押えようとする、山之助おやま大難のお話でございます。

## 四十四

水司又市は十方でふうくふうくと吹く竹螺たけぼらの音を聞きまして、多勢の百姓共に取と捲りまかれては一大事と思ひまして、何処どこを何う潜くぐつたか、窃ひそかに川を渡つて逃げた跡へ村方の百姓衆が集つて来ましたが、何分にも刃物は利よし、斬人きりては水司又市で、お山は余程の深ふ傷かたでございますから、もう虫の息になつて居る処へ伯父が参り、

多「あゝ情ない事をした、そんな悪人とは知らずに、恩返しのためだから丹誠をして恩を返さんければならぬと云つて、直すくに行ゆこうと云うのを無理に留めたが、それが現在自分の連れて来た比丘まで殺して、其の上無理恋慕を言掛けて此の始末に及ぶと云うは悪い奴にく、お山何か思い置く事が有りはしないか」

と云うと、山之助も涙ばかり先立ち、胸が閉じて口を利く事も出来ませんが、漸ようやくに氣を取直して。

山「姉ねえさんく確しっかりしてお呉んなさいよ、今お医者様を呼びに遣やりましたから、確たかりしてお呉んなさいよ」

と云う。伯父もお山の傍へ参り耳に口を寄せて、

多「お山やアくしつかりして呉れよ」

と呼びます。その声が耳に入ったから、がくりツと心付いて、起上つて見ると、鼻の先に伯父が居り弟も居りますが、もう目も見えなくなりましたが、やつと這出して山之助の手を握り、

やま「山之助」

山「あい姉さん確かりしてお呉んなさいよ伯父さんも此処へ来て居ますよ、村方の百姓衆も大勢来て、手分をして又市の跡を追手を掛けましたから、今にお前さんの敵を捕えて、簀巻にして川へ投げ込むか、生埋にして憂目を見せて遣ります、姉さん今にお医者様が来ますから、確かりしてお呉んなさい」

やま「伯父さん」

多「あい此処に居りやすから心を慥かに持つてな、此の位の傷では死にやアしなえから、必ず気を丈夫に持たねえではいけないぞ」

やま「あい伯父さん、永々御厄介になりまして、十六年あとにお父様が屋敷を出て行方知れずになってから、親子三人でお前様のお世話になり、其の中お母様も亡くなつてか

らは、山之助も私もお前様に育てられ、お蔭で是れまでに大きく成りましたから、山之助に嫁を貰つて、私はお前様のお力になり、御恩を送る積りで居りましたが、何の因果か悪人の為に、私は伯父さんもう迎も助かりません、これまで信心をして、何卒御無事でお父様がお帰り遊ばすようにと、無理な願掛を致しましたが、一目お目に懸らずに死にまするのは誠に残念でございます、私の無い跡では猶更身寄頼りの無い弟、何卒目を掛けて可愛がつて遣つて下さい、よ伯父さんお頼み申しますよ」

多「あいよ、そんな心細い事を云つて己も娘ばかりでござりやすし、外に身寄頼りの無い身の上、娘はあの通りのやくざ阿魔で力に成りやアしねえから、お前方二人が実の娘より優しくして呉れたから、力に思つて居るのに、今汝に死なれては、年を取つた己は何も樂みが無いだ、よう達者に成つて親父に逢おうと云う心で無くちやアならないぞ」

やま「はい私は何うも助かりません……山之助や、は、は、は、又市の額には葉広山で受けた創が有るし、元は彼奴も榊原の家来だと云つたが、彼奴の顔は見忘れはしまいなア」

山「あい見忘れはしません」

やま「汝も武士の忤だ、心に懸けて又市の顔を忘れるな」

山「あい決して忘れやしません、姉様確かりして下さいよ」

やま「若しお父様が御無事でお帰りが有つたら、私は災難で悪人の為に非業な死を致しました、一目お目に懸らないのが残念だと云つて、お父様に先だつ不孝のお詫をしてお呉れ」  
と後あとを言い残して、かかかかかと続けて云うのは、咽喉のどが涸かわくから水をと云いたいが、  
口が利けなくなつて手真似を致します。伯父が是を見て、

多「咽喉が涸くだから、水を飲ましたら宜かろう」

と手負いに水を与えてはならぬと申す事は素もとより心得て居りますが、伯父は心ある者  
で、もう迎むかも助からぬから、臨終いまわの別れと水を飲ませるのが此の世の別れ、おやまはそれ  
なり息が絶えました。これを見ると山之助はわつと其の場に泣倒れます。なれども伯父は、  
多「何うも致し方が無い、幾ら泣いても姉の帰るものじゃアないから諦めるが宜い、若し  
貴様が煩うような事が有つては己が困る」

と云い、村方のお百姓衆も色々と云つて山之助に力を附け、漸ようやくの事で村方の寺院へ野  
辺の送りを致しました。

扱お話二つに分れまして、丁度此の年越中の国射水郡高岡の木工町、宗円寺といふ禅宗寺の和尚は年六十六歳になる信実なお方で、萬助という爺を呼びに遣ります。

和「おゝ萬助どんか、来たら此方へ這入りなさい」

萬「へへへ何うも誠に御無沙汰を致しました、一寸上らんければならぬと存じましたが、

盆前はお忙がしいと思ひまして、それ故にはア存じながら御無沙汰を致しました、それに又婆が病気で足腰が立ちませんで、私もまア迎もく助からぬと思つて居ります……なに最う取る年でござりますから致しかたは無いと思ひますが、私が先へ死んで婆が後へ残つて呉れなければ都合が悪いと、へえ存じますが、何うも婆の方が先へ死にそうで……いゝえなに老病でござりましょうから、思うように宜くはなりません、それ故に御無沙汰を、えゝ只今急にお使で急いで出ましたが、何か御用で」

和「あいまア此処へ来なさい」

萬「へえ御免を蒙ります」

和「さて萬助どん、外の訳じやア無いが、まアお前の頼みに依つて私が処へ逃込んで来て、何う云うものか、それなりにずるくべつたりに成つて居るのは、藤屋の娘のお繼じやて」

萬「はいくく、何うも御厄介でござりまして、誠にはア私が貧乏な日傭取で、育て

る事も出来ませぬなれども、私の主人の娘で何の様に思いましたが、ついはや好い気になって和尚様へ押付放しにして何ともお気の毒様、へえ誠に有難い事でございます、若し此方が無ければ致し方のないわけでござります」

和「誠に彼は伶俐な者でなア、此処へ遁込んでから、私が手許を離さずに側で使うて居る、私が塩梅悪いと夜も寝ずに看病をする、両親が無いとは云いながら年の行かぬのに、あ、遣つて他人の世話をするのは実に感心じゃ、実にそりやア立派な者も及ばぬくらい、それで私は彼が可愛いから、小さい時分から袴を着けさせて、檀家へ往く時は必ず供に連れて行くと、彼も中々氣象が勝つて居て、男の様で、バタクサした女の様な事が嫌いだから、今迄は男のつもりで過ぎたが、もう今年は十六歳じゃ、十六と成つては若衆頭でも何処か女と見え、臀もぼて／＼大きくなり、乳房もだん／＼大きくなって何様な事をしても男とは見えないじゃ、すると中には口の悪い者が有つて、和尚様はまア男の積りにして彼の娘を夜さり抱いて寝るなど、云う者も有るで、誠に何うも困るで、それからまア何うか相当の処が有つたら縁付けたいと思つて居ると、彼も方々で可愛がられるから、少し宛の貰い物もある、処が小遣や着る物は皆私に預けて少しも無駄遣いはせんで、私の手許に些少は預りもあり、私も永く使つた事だから、給金の心得で貯けて置いた金も有るじゃ、そ

れに又少し足して、十兩二十兩と纏まとった金が出来たから、支度をして相当の処へ縁付けた  
 と思つて居るのじや」

萬「それははや有難い事でござります、それ程に思おぼ召しめして下さいますとは、何とお礼の  
 申し様もないでござります、はい、何うも有難い事でござります」

和「就いてなア彼奴あいつは何ういう訳だか知らぬが、この高岡に永く居る気は無いと見えてな  
 ア遠くへでも行く心が頻しきりと支度をして、草鞋わらじを造る処へ行つて、足を嚙くわぬ様に何うか  
 五足ごしち拵しらえて呉れえとか、菅すげの笠を買かうて来て、法ほう達たつに頼たのんで同どう行ぎ二一人と書いて呉れ  
 えとか、それから白の脚きゃはん半も拵おいえ箆ずるも拵おいえたから、何でも西国巡礼にでも出るとい  
 う様子でなア」

萬「へえそれは、何で其様そんな馬鹿な事を致しますすえ」

和「何ういう訳か知らぬが、まア此処こゝに居るのが厭いやなので、並の女では旅が出来ぬから、  
 巡礼の姿に成つて故郷の江戸へでも行いこうと云う心かと思うが、それに就いても預かつて  
 居るのは心配じやから、お前に此の事を話すのじや」

萬「こりやアとんだ事で、何うも此方こなた様の御恩を忘れてぶいと巡礼に成つて、一体まア  
 何処どこへ行く気でござりましょう」

和「何処と云つて、まア西国巡礼だろう」

萬「はいイ大黒巡礼と申しますると」

和「なに西国巡礼だ、西国巡礼と云つて西の国を巡るのじゃ」

萬「成程、へえ成程、そう云えば左様そつういう事を聞きました」

和「なにそう云う事を聞きましたも無いもの、西国巡礼を知らぬ奴が有りますか」

萬「和尚様、どうぞ一ちよつと寸お繼を此処こゝへお呼なすつて下さい」

和「あい呼びましょう……繼や居るか」

繼「はい……」

とは云つたが次の間で話を聞いて居りましたから、これは何でも叱られる事かと思いましたが、つか／＼と出て来て和尚の前へ両手を突きます。……見ると大おおたぶさ髻むすの若衆頭、着物は木綿物では有りますが、生れ付いての器量好よしで、芝居でする久松の出たようです。

繼「お呼び遊ばしましたのは……おや叔父さん宜く」

萬「宜くたつてお前急にお人だから来たんだ、おいお前なにか西国巡礼を始めるといふ事だが、何うも飛んだ話だぜ、和尚様の御恩を忘れては済まないじやア無いか、それで和尚様は預かつて居なくなると困るから、私わしを呼んだと仰しやるのだ、全体お前、何だつて巡礼に出るのだえ、誰か其様そんな事を勧めたのかえ」

和「まあ待ちなさい、お前のように半ばから突然いきなりに云い出しても、繼には分りやアしない、始めから云いなさい」

萬「私わしは気が短いもんですから、突然いきなりでませに云いますので……え、お繼お前何ういう訳で巡礼に出るのだえ、十二の時から御厄介になつて十六まで和尚様が御丹誠なすつて、全体お前は両親が無いじやアないか、そこを和尚様が御丹誠なすつて下すつて誠に有難いことだ、そののみならず、もう年頃に成るから永く置いてはいけないから、相当な処へ縁付きたいと仰しやつてる、男の積りにして有つたがもう十六七に成れば臀しりがぶてくして来るし、乳も段々とぼちやくして」

和「これ萬助どん、余計なことを云わいでも宜いわな」

萬「でも貴方の仰しやつた通りに云うので……それで段々女に見えるから嫁かたづけたいと云つ

て支度の金きんまでも出して下さる、それをお前が無にして行ゆかれちやア私が申ま訳が無くて困る、何だつてまた、西国とは何だえ、西国とは西の国だ、そんな遠い処へひよこく行いこうと云うのは屹きつ度連れが有るに相違ない、え、私は永い間お祖父じいさん様の時分から勤めたのだが、お前のお父とつさんが意い氣くじ地じなしだから此方こちへ引ひ込こんで来なすつた、それで私は錢も何も有りやアしないが、大工町に世帯を持たしたが、引込ひむくらいだから何も出来やアしない、それから和尚様の御丹誠ごたんじやうで悪党の一件いっけんの始末あはを附つけられないのを、皆御丹誠下すつた、それを今お前がふいと行いつてしまつては和尚様に濟いまない、己も亦方丈様に濟いまない、濟いまないよ、方丈様によ」

和「まあ、そう小言を云いなさるな……お繼何も隠かくさいでも宜い、何ういう訳で白の脚半おひざや笥ひしやく杓しやくを買かつたのだの、大方巡礼にでも出る積りであろうが、何の願ねがいが有つて西国巡礼をするのじやい、巡礼と云えば乞食同様で、野に臥ふし山に寝ある、或あるは地藏堂觀音堂などに寝て、そりやもう難行苦行を積たまなけりやア中々三十三番の札を打うつ事は出来ぬもんじや、何う云うものだえ、巡礼に出るのは」

繼「はい然そう旦那様が笥こし摺しを拵こしらえた事までも御存ごぞんじでございますれば、お隠かくし申しは致いたしません、叔父さん：萬助さんお前さんにも永々御厄介ごやくけいに成なりましたけれども、私の親父を

殺して逃げたのは、永禪和尚と継母まは、は、お梅の兩人ふたりに相違ちがございません、小川様のお調べでも親を殺したのは永禪和尚と分つて居り、永禪和尚は元は榊原様の家来で水司又市と申す侍と云う事も、小川様のお調べで分つて居りますが、お父さんが非業に殺され堂の縁の下から死骸が出ましたのを見てから、寝ても覚めても今迄一時ときも忘れた事はございません、実に悔しいと思ひまして、夜も枕を付けると胸ふさが塞がり、枕紙の濡れない晩は一晩もございません、それで何うかお父さんの敵かたきを打とうと思ひましても、十一や十二では迎むかも打つことは出来ませんが、もう十六にも成りましたし、お弟子さんのお話に三十三番札所の観音様を巡りさえすれば、何どんな無理な願掛がながけでも屹度きつと叶うということを聞きまして、何うせ女の腕で敵を打つ事は無理でございりますが、三十三番の札を打納うちおさめたら、観音様の功く力で敵が打てようかと存じまして、それ故私は西国巡礼に参りたいので、実は笈摺ひしゃも柄くも草鞋までも造つてございますから、誠に永々お世話様に成りましたのを、ふいと出では恐れ入りますが、いよく参る時はお断り申そうと思つて居りましたところ、ちようど只今お話が出ましたから隠さずにお話し申します、何卒どうぞ叔父さんからお暇ひまを頂いて巡礼にお出しなすつて下さい、私は江戸に兄が一人有りました、今では音信いんしん不通、縁が切れては居りますが、その兄が達者で居りますれば、それが力でございますから、兄弟二人で敵

を打ちまする心得、何れ無事で帰つて来ましたら、御恩返しも致しましょうから、何卒叔父さん和尚様にお暇を頂いて敵討にお遣りなすつて下さいまし」

萬「旦那様え、敵討え、旦那様」

和「いやはや何うもえらい事を云い居るな、何うじやろう萬助」

萬「どうも、飛んだ事を云い出しました……敵討……年の行かぬ身の上で、お父さんの敵を討ちたいというのは善々此の子も口惜しいと見えます、もし旦那様、私も何うも、それは止すが宜いとは云い悪うござりますが、何うしたら宜うございましょう」

#### 四十七

和「これは何うも留めることは出来ぬなア、思い立つたら遣るが宜い」

萬「遣るたつて何うも私は主人の娘が敵討をすると云うなら、一緒に行きてえのだが、今いう通り婆が死に掛つて居るから、それを置いて行く訳にもいきませんが、一人で行かれましようか」

和「いや其処は所謂觀音力で、何んな山でも何んな河でも越えられるのが觀音力じゃ、

敵を討ちたいという的まとが有つて信心して札を打てば、観音の功力くりきで見事敵を討うち遂おわせるだろう、こりやア望のぞみの通り立たせるが宜よい」

萬「はいくくく」

和「じやア斯こうしよう、是は追々に預かつた小遣の貰い溜め、また別に私わしが遣りたい物もあり、檀家から貰うた物も有ります、沢山たんと持つて行くのは危いから、襦袢の襟や腹帯に縫い付けてなア、旅をするには重いから、軽い金に取換えて、そうして私が路銀に足して二十両にして遣ろうかえ」

繼「有難う存じます」

萬「私わしも遣りてえが、錢がねえ、此処こゝにある一分二朱と二百文、これを皆遣みんなつてしまおう、さ私は是れが一生懸命に遣るのだ」

繼「有難う存じます」

是から檀家へ此の話を致しますると、孝行の徳はえらいもので、彼方あちら此方こちらの檀家から大分いぶ錢別が集まつて、都合三十両出来ました。その内二十両はぴったりと腹帯肌襦袢に縫付けて人に知れぬように致し、着慣れませぬ新しい笈摺ひきかを引掛ひきかけ、雪卸ゆきおろしの菅すげの笠には同行どうぎよう二人と書き、白の脚半に甲掛こうがけ草鞋わらじという姿で、慣れた大工町を出立致しまする。

其の時には土地の者も憐れに心得て、とうとう坂井まで送り出したと申す事でござります。これから先高田へ来ましたのは、水司又市は以前高田藩でございますから、若しも隠れて居りはせぬかと、高田中を歩きましたが、少しも心当りがございませんから、此処を出立して越後路を捜したが、頓と手掛りが有りません。だんく尋ねて新潟へ参ると、新潟は御承知の通り人出入りの多い処でございますから、だんく諸方を歩いて聞きますると、人の噂に川口には不思議な尼がある、寺男がお経を教えて、尼が教わるということだが、大方あれば野合くつつきあって逃げた者であろう、寺男は何でも坊主で、女は何歳ぐらい、是々、是々と云うことが、ぷいとお繼の耳に這入ったから、扱さてはと直ぐすに川口へ来て尋ねると、つい先日出立したと云うことを聞きましたから、さては山越しをして信州路へ掛つたのではないかと思ひまして、信州路へかゝりましたが、更に手掛りがございせんから、信州路へ這入って善光寺へ参詣をいたし、善光寺から松本へかゝって、洗馬せばという宿へ出ました。洗馬から本山もとやまへ出、本山から新川にいがわ奈良井へ出て、奈良井から藪原やぶはらへ参りまするには、此の間に鳥居峠とりいとうげがございます。其の日は洗馬に泊りまして、翌朝宿よくちようを立て、お繼が柄杓を持って向う側を流して居ると、その向側むこうがわを流して行く巡礼ゆがある。と見ると、是も同じ扮装いでたちの若衆頭わかしゆあたま、白い脚半に甲掛草鞋かまがわ笈摺あしずりを肩に掛け、柄杓を持って

御詠歌を唄つて巡礼に御報謝を：はてな彼の人も一人で流している、私は随分今まで諸方を流して慣れてるから、もう此の頃はそんなに旅も怖いと思わぬが、彼の人は未だ慣れない様子、誰か連でもある事か、それとも一人で西国へ参詣をするのか、矢張三十三番の札を打ちに行く人では無いかと思いましたが、道中の事で気味が悪いから、迂濶と尋ねることも出来ません。その此方側を流して通ると云うのは、白鳥山之助が姉の敵を討ちたいと申して、無理に伯父に暇を乞うて出立した者、山之助も向うへ巡礼が来るなど思いましたけれども、知らぬ人に言葉を懸けて何様な事が有るかも知れぬ、姿は優しいが油断は成ぬと思つて言葉を懸けません、其の晩は鳥居峠を越して宮之越に泊りましたが、丁度八里余の道程でございます。翌朝お繼は早く泊りを立出で、前申す巡礼と両側を流し、向うが此方へ来れば、此方が向側と云う廻り合せて、両側を流しながら遂々福島を越して、須原という処に泊りましたが、宮之越から此処迄は八里半五丁の道程でございます。斯様に始終両側を流して同じ宿には泊りますが、なれども互いに怖くて言葉を掛けません。これから皆様御案内の通り福島を離れまして、彼の名高い寢覚の里を後に致し、馬籠に掛つて落合へまいる間が、美濃と信濃の国境でございます。此の日は落合泊りのことで、少し遅くは成りましたが、急ぎ足ですたくくくと馬籠の宿を出外れに

かゝりますると、其処には八重に道が付いて居て、此方へ往けば十曲峠……と見る  
と其処に葭簀張の掛茶屋が有るから、

繼「少々物を承わりとう存じますが、これから落合へまいりますには何う参りましたら宜  
うございませうか」

と云いましたが、婆さんは耳が遠いと見えて見返りもせず、頻りに土竈の下の火を  
焚いて居りますから、また、

繼「あの是から、落合へ行くには此方へ参つて宜うございませうか」

と云うと、奥の方に腰を掛けて居た侍は、深い三度笠をかぶり、廻し合羽を着て、柄袋  
の掛つた大小を差して、盲縞の脚半に甲掛、草鞋という如何にも旅慣れた扮装、

侍「是々巡礼落合へ行くなら是を左の方へ付いて行け」

繼「有難う存じます」

と是から教えられた通り左へ付いて行くと、何処まで行つてもなだれ上りの山道で、見  
下す下の谷間には、渦を巻いてどつどと落す谷川の水音が凄まじく聞えます。日はとつ  
ぷりと暮れて四辺は真暗になる。とお繼は気味が悪いから誰か人が来れば宜いと思うと、  
後の方からばらばら〜〜〜

「巡礼、巡礼暫く待て」

と云われたが真暗で誰だか分かりません。

四十八

侍「これ巡礼」

繼「はいくくく」

典「思い掛けねえ、手前久振で逢つたなア」

繼「はい何方でございます」

侍「何方もねえもんだ、己は桑名川村にいた柳田典藏だが、汝の姉のお蔭で苛い目に逢つて、あれまで丹誠した桑名川村に居られないように成つたのだ、その時は家財や田地を売払つて逃げる間も無いから、漸く有合せの金を持つて逃げて、再び桑名川村へ帰る事も出来ぬような訳だ、その上右の手の裏へ傷を受け、その疵を縫つて養生するにも長く掛つたが、先刻己が寢覺を通りかゝると汝が通るから、これは妙だ、何ういう訳で巡礼に成つて出るかと思つて跡を尾けて来たんだ」

繼「はい何方でございますか、人違いでございましょう、私は左様なものではございませ  
ん」

典「汝は其様なことを云つて隠してもいけねえ、先刻おれが笈摺を見たら、信州水内郡  
白島村白島山之助と書いて有つた」

繼「え、」

典「さ其の通り書いて有るから仕方がねえ」

繼「い、え私は左様な者ではございませぬ、私は越中高岡の者で」

典「え、幾ら汝が隠したつても役に立たねえ、姿は巡礼だが、汝が余程金を持つてる事  
ア知つてる、さ己が汝の姉の為に斯う云う姿になつた代りに金を強奪つて汝を殺すのだ  
が、金を出しやア命は宥して遣らう、おれは追剥をするのじゃアねえけれども、この頃  
では盗人仲間へ入つた身の上だ、斯う成つたのも実はと云うと、汝兄弟のお蔭なんだ、  
さア金を出せえ」

繼「私は左様な者ではございませぬ、私は其の山之助と云う者ではございませぬ、私は越  
中高岡の宗円寺という寺から参りました者で」

典「え、何と隠してもいけねえや、ぐずぐず云わんでさつさと出せ、若し強情を張ればた、

んでしまうぞ」

繼「いゝえ私わたくしはそんな人じゃア」

典「えゝ打斬ぶつきつてしまうぞ」

と柳田典藏が抜いたから光りに驚いて、

繼「あれえ」

と一生懸命に逃げに掛るのを後うしろから、

典「待て」

と手を延のばして菅笠の端を捉とつたが、それでも振払つて逃げようとする機はずみに笠の紐がぶ

つりと切れる。一生懸命に逃げる途端道を踏ふみはず外たにして谷間たにあいへずうーん：可愛あそうにお繼

は人違いをされて谷へ落ちます。すると、是を知らぬ山之助は、是も落合まで行く積ゆり

で山道へ掛つて来ますと、後あとからぱた／＼／＼／＼と追掛けて来たのは、勇治ゆうじとい

う胡麻の灰。

勇「おい／＼巡礼々々」

山「あい」

勇「己てめえは汝と須原で合宿あいやどになり、宮之越でも合宿に成つた者だ」

山「左様でがすか」

勇「左様でがすかじゃアねえ、これ道中をするには男の姿でなけりやア成らぬと云うので、そういう姿に成つてゐるが、汝は女だな」

山「いゝえ私は男でげす」

勇「隠したつてもいけねえや、修行者でも商人あきんどでも宜く巡礼の姿に成つて来ることが有るが、汝は手入らずの処きむすめ女ちげに違えねえ、口の利き様ようから外輪そとわに歩く処は、何う見ても男のようだが、無理に男の姿に成つて居ても乳が大きいから仕方がねえ」

山「何を仰しやるのだえ、私はそんな者ではございませぬ、全く男でござります」

勇「いけねえ、何でも女に違えねえ、今夜己が落合へ連れて行つて一緒に□□□□ようと  
思つて来たんだ」

山「冗談を云つちやアいけません」

勇「冗談じゃアねえ、汝を宿屋へ連れて行つてから、きやアばア云われちやア面倒くさいから、こゝで己の云う事を聴いたら、得心の上で宿屋へ泊つて可愛がって遣るのだ、ぐずツかすると宿場へ遣つて永く苦しませるぞ、さア此処はもう誰も通りやアしねえ、その横へ這入ると観音堂が有つて堂の縁が広いから」

山「冗談しちやアいけません、私は其様な者じゃアございませぬ」

勇「そんな事を云つちやアいけないよ、お前が宿に泊つて湯に這入る時に大騒ぎをするから、肌襦袢に縫付けて金を持つてる事もちゃんと承知だ」

山「何をなさる」

勇「何をと云つて何うせ此方は盗みが商売だから」

山「無闇な事をなさるな」

勇「無闇が何うする、斯うだぞ」

山「何うもいけません、何をなさるのだ」

と山之助が勇治の頬ほ、ぺた片をぽんと打ちました。処が山之助は白島村に居る時分に、牛を牽ひいたり鹿そだ朶かつを担いだりして中々力のある者、その力のある手で横つ面を打たれたから、こりやア女でも中々力がある、滅法に力のある女だと思つて、

勇「何をする、汝がきやアばア云やア拗よんじころなく叩き斬るぞ」

本当に斬る気では有りませんが、嚇おどして抱いて寝る積りで、胡麻の灰の勇治がすらり抜くと山之助も脊しよ負よつてゐる苞つとから脇差を出そうかと思つたが、いや／＼怪我でもしてはならぬ大事の身体と考え直して、

山「人殺い……泥坊……」

と横道へばらくくくくく。

## 四十九

勇「この女つちよめ」

と追掛られて逃途がないが、山之助年は十七で身が軽いから、谷間でも何でも足掛りのある処へ無茶苦茶に逃げ、蔦蘿などに手を掛けて、ちよいくくくくと逃げる。殊に山坂を歩き慣れて居るから、木の根方に足を掛けて歩く事は上手です。なれども始めての処で様子を知りませぬから、一生懸命死者狂いになって逃げると、細手の勇治は、勇「なに此の女つちよ」

とは云つても谷間を歩くのは下手で追掛ける事は出来ません。何うした事か山之助が足掛りを踏外したから、ずずうと蔦が切れたと見えて、両手に攫つたなり谷底へ落ると、下には草が生えた谷地に成つて居り、前はどつどと渦を巻いて細谷川が流れます、山「はアー何うも怖い事、伯父さんがそう云つた汝一人で縦え敵討をする心でも大胆だ、

とても西国巡礼は出来ぬ、道中は、怖いもので、昔これゝのことが有つたと云つて意見をなすつた、それでもと云つて覚悟はしたが怖いなア、こりやアいけない、柄杓を落してしまつた……だが彼奴はまア何だろう、私を女と思つて居やアがつて、無闇と人の頬片へ髭ほつぺたを摩り附けやアがつて……おや笠を落してしまつた、仕様が無いなア……おや笠は此おつこ処こゝに落ちてる、先刻落ちる機はずみに柄杓を……おや柄杓も此処おつこにおやゝ巡礼も此処おつこに落ちてる……

と谷地やちを渡つて向うへ行きますると、草の上へ仰向反のげぞりになつて居る巡礼が有るから、山「おうゝゝゝゝ可愛そうに、此の人は洗馬で向むこう側がわを流して居て、宮之越みやのこで合あひや宿どになつた巡礼だ、其の時は怖いと思つたから言葉も掛けなかつたが、何うも飛んだ災難わざじゃアないか、此の人は何うしたんだろう、目をまわして居る、おい巡礼さん何処の巡礼さんか確しつかりしなさいよ、此処は谷の中でございますよ、可愛そうに何うしたんだろう、此の笠も柄杓も此の人のだ、己のじゃアない、だがまア何うしたんだろう、おゝ薬が有つたツけ」

と貯えの薬を出して、飲ませようと思いましたが、確かに齒を喰くしぼつて居りますから、自分に嚙かみ碎くだいて、漸ようやくに齒の間から薬を入れ、谷川の流れの水を掬すくつて来て、口移しに

して飲ませると葉が通つた様子、親切に山之助が摩さすつて遣りますと、

繼「有難う〜」

山「お前さん確かになさいよ」

繼「はい」

山「大丈夫です、私は胡散うさんな者じやアございませんよ、私はお前さんと後先あとさきに成つて洗馬から流して来た巡礼でございますよ」

繼「はい有難う怖い事でございました」

山「成程お前さんは何うなすつたの」

繼「何うしたんでございますか人違いでございましょうが、私が山路に掛つて来ると、後あとから大きな侍が追掛けて来まして、左様そうして私にねえ、汝てめえは白島の山之助とか何とか云つて、誠に久しく逢わなかつたが汝の姉のおやまゆえに斯んな浪人に成つたから、汝の持つてる金を取つて意趣返しをすると云うから、私は左様さような者で無いと云いますと、突然いきなり脇差を抜いたから、一生懸命に逃げようと思つて足を踏外して、此処へ落ちましてございます」

山「それはお気の毒様、それじやア私と間違えられたのだ、白島の山之助と云いましたか」

繼「はい」

山「その男は何と云う奴で」

繼「あの柳田典藏とか云いました」

山「それは大変、何うもお気の毒様、お前さんを私と間違えたのでございます」

繼「左様そうでございますか、私はそんな者でないとはいわけを云つても聞きませんで」

山「そりやア全く私の間違いです、お：前さん女でございますねえ」

繼「いゝえ」

山「それでも今私が抱いて起した時に乳が大きくて、口の利き様も女に違いないと思ひます」

繼「左様でございますか、私は本当は女でございます」

山「左様でしょう、それじやア私はお前さんと間違えられたのだ、私が山道へ掛ると胡麻の灰が来て汝てめえは女だろうと云うから、いえ私は女ではないと云うと、そんな事を云つても乳を見たから女に違いない、金を持つてるから出せなんと云つて私の頬片ほつぺたを嘗なめやアがつたから、其奴そいつの横面よこつらを打ぶつた処が、脇差を抜いたから、私は一生懸命に泥坊おつこくと云つて逃げる途端に、足を踏外して此処へ落ちたんだ」

繼「おやまアお気の毒様」

山「私の方がお気の毒様だ」

繼「お前さん何処へお出でなさるの」

山「私は西国巡礼に」

繼「おや私も西国へ。よく似て居りますねえ」

山「え、よく似て居りますねえ」

繼「お前さん何方へお泊り」

山「山道へ掛つて様子は知らぬが、落合まで日の暮々々々  
はと思つて急いで参りました、お前さんは何方へ」

繼「私も落合と思つて、何うもよく似て居ますねえ」

山「え、何うもよく似て居ますなあ」

繼「あなた私を連れて行つて下さいませんか」

山「え、一緒に参りましょう」

繼「それじゃア何卒」

山「一生懸命に攫つてお出でなさい」

繼「何卒お連れなすつて下さい」

と互に 信心しんじんまいり 参まゐの事でございますから、お互いに力に思い思われまして、

山「何か落すといけませんよ」

繼「はい柄杓も此処に有ります」

と笠を片手に提さげて、山之助の案内で、漸く往来まで這はい登りまして、これから落合の宿しゆくに泊ったのが山之助とお繼の始めての合宿で、互いに同行二人力に思い合つて、これから二人で西国三十三番の札を打ちますと云う、巡礼敵討の始りでございます。

五十

山之助お繼は其の晩遅く落合に泊り、翌朝よくちようになりまして落合を立致して、大井おおいといふ処へ出ました。これから大久手おおくてほそくて細久手へ掛り、御嶽おんたけ伏水ふしみといふ処を通りまして、太田おおたの渡しを渡つて、太田の宿の加納屋かのうやという木賃宿に泊ります。ちょうど落合からは十二里余の道でございますが、只今とは違つて開ひらけぬ往来、その頃馬方が唄にも唄いましたのは木曾の棧橋かけはし太田の渡し、碓氷うすいとうげ峠が無けりやア宜よいと申す唄で、馬士まごなどが綱を牽ひきながら大声で唄いましたものでございます。さて時候は未だ秋の末でございますが、

此の年の寒さも早く、殊に山国の習いで、ちらり／＼と雪が降って参ります。山之助お繼も致し方がございませんから無理にも出立致そうと思ひますが、だん／＼と雪の上に雪が積りまして、山又山の九十九折つゞらおりの道が絶えまするから、心ならずも先此処ますこゝに逗留致さんければ相成りません、なれども本来もとく修行の身の上でございませぬから、雪も恐れずに立つとうと思つと、山之助が慣れぬ旅の心配を致しました故せいか、初めて病と云うものを覚えて、どうと枕に就つきます。加納屋の亭主も種々いろく心配致しまするが、連つれの者が居るから手当は出来ようと医者連れて来て薬を貰ひ、種々と手当を致しますが、何分にも山之助の病氣は容易に全快致しません。此の中の介抱うちは皆お繼が致して遣りますが、女で親の敵を討とうと云う位な真まご心な娘でございませぬから、赤の他人の山之助をば親身の兄いたを労わるように、寝る目も寝ずに親切に介抱を致します。山之助は心配をいたして種々と申しますると、

繼「なに仮令たとえ半年一年の長なが煩わづらいをなすつても私が御詠歌を唄つて報謝を受けて来れば、お前さん一人位に不自由はさせませぬ、それに私も少しは儲たくわえが有るから、まア／＼決して心配をなさるな」

と云つて山之助に力を附けます。また時々塩を貰つて温おんじやく石いしを当てる、それは実に親

切なもので。すると俗に申す通り一に看病二に薬で、お繼の親切が届いて其の年の暮には追々と全快致し、床の上に坐つて味噌汁位が食えるように成りましたから、お繼は悉く悦んで、或日のこと、

繼「山之助さん、今日は余程お加減が宜うございますねえ」

山「お繼さん誠に有難う、私はまア斯様にお前さんの介抱を受けようとは思いませんかつたが、不思議な縁で連に成つたのも矢張箆摺を脊負つたお蔭、全く観音様の御利益だと思ひます、実に此の御恩は死んでも忘れやア致しません」

繼「何う致しまして、斯んな事はお互でございます、お前さんも西国巡礼私も西国を巡るので、一人では何だか心細うございますが、一緒に行けば何処を流しても同行二人で互いに力に成りますから」

山「誠に有難いことで」

繼「山之助さん、誠に寒くていけませんし、斯う遣つて別々に長く泊つて居りますと、蒲団の代ばかりでも高く付きますから、私の考えでは蒲団を返してしまつて、下へはお前さんと私の着物などを敷いて左様して上に一枚蒲団を掛けて、一緒に寝る方が宜いかと思ひますが、お前さん厭でございますか」

山「え、寝ても宜うございますけれども、お前さんが男なら宜いが、女だからねえ、私は何うも一緒に寝るのは悪うございますから」

繼「何も宜いじやア有りませんか、お前さんの長い煩いの中には私が足を摩さすつて居ながら、ついこころ転りとお前さんの床の中へ寝た事もございますよ」

山「左様さようですかねえ」

繼「本当に費ついででは有りませんか、是からも未だ長い旅をするのに、銘めい々蒲団の代を払うのは馬鹿々々しゆうございますよ、却つて一人寝るより二人の方が温あつたいかも知れません」

山「じやアお繼さん脊中合せに寝ましょう、けれどもねえ女と男と一つ寝するのは何だか私は極りが悪いし、観音様にも濟みませんから、茲こゝに洗った草鞋の紐が有りますから、是を仕切に入れて置いて、是から其方そっちがお前さん、是から此方こっちは私としてお互に此の仕切の外へ手でも足でも出したら、それだけの地代じだいを取る事に致しましょう」

繼「それじやア脊中合せあつたが温かいから」

と云うので到頭脊中せなかあわせ合に成つて寝ました処が木曾殿と脊中合せの寒さかな哉で、何処となくすう／＼風が這入つて寒うございますから、枕の間へ脚半も入れましょう、股引も入れましょうと云つて種々な物を肩に当て、毎晩々々二人で寝る事に成りましたが、斯うい

う事は決して遊ばさぬが宜い。どんなに堅いお方でも其処は男女の情合で、毛もくじやらの男でも、寝惚れば滑つこい手足などが肌に触れれば氣の変るもの、なれども山之助お繼は互に大事を祈る者、一方は親の敵一方は姉の敵を打とうと云う二人で、固より堅い氣象でございますから、決して怪しい事などはございませぬが、だんく親しくなつて来ると。

繼「山之助さん」

山「あい」

繼「私はまア不思議な御縁で毎晩斯う遣つてまア、お前さんと一つ夜具の中で寝ると云うものは実におかしな縁でございますねえ」

山「え、余程おかしな縁ですなえ」

繼「私はお前さんに少しお願いが有りますがお前さん叶えて下さいますか」

山「何の事でございますか、私は病氣の時はお前さんが寝る目も寝ずに心配して看病して下すつた、其の御恩は決して忘れませんから、私の出来る丈の事は仕ますがねえ、何ですえ」

繼「私は只斯う遣つて、お前さんと共に流して巡礼をして西国を巡りますので、三十三番

の札を打つ迄はお前さんも御信心でございますから、決して間違つた心は出ますまいし、私も大丈夫な方とは思いますが、気が置かれてねえ、何か打明けてお話をする事も出来ませんけれども、私も身寄兄弟は無し、江戸に兄が一人有りますが、これも絶えて音信おとずれが無ないから、今では死んだか生きたか分りません、若し兄が亡ない後は私は全く一粒種で」

山「何うもよく似た事が有りますねえ、私も一人の姉が有りましたが、姉が亡くなつてからは私も一粒種で、親は有ると云つても、十六七年も音信が無いから、死んだか生きたか分らぬから、真に私も一人同様の身の上だがねえ」

## 五十一

繼「まあ何うも、然そうでございますか、それじゃア三十三番の札を打つてしまつて、お互いに大願成就の暁には生涯私の様な者でも力に成つて下さいませんか、本当にお前さんの志の優しいのは見抜きましたから」

山「私もお前さんに力に成つて貰あいたいと思つてねえ、私は彼あ様な煩わづいなどが有つて、お前さんが無かつたら大変な所を、信しんじつ実に介抱して下さつたので、お前さんの信実は見抜

いたから、その信実には本当に感心して惚る……と云う訳じゃア無いが、真にお前さんは  
 好い人と思つて」

繼「えゝ」

山「だから私は真に力に思つて居ますねえ」

繼「そうして斯う男と女と二人で一緒に寝ますと、肌を触ると云つて仮令訝しな事は無く  
 つても、訝しい事が有ると同じでございませとねえ」

山「なにそんな事は有りません、おかしい事が無くて同じと云うわけは有りやアしません

……だからいけない、互に観音様へ参る身の上だから、先に私が別に寝ようと云つたんだ」

繼「そんな無理なことを云つちやア済みませんが、お前さんも身が定まれば、何時までも  
 一人では居られないから、お内儀さんを持ちましょう」

山「えゝそりやア是非持ちます」

繼「不思議な御縁で斯う遣つて一緒に成りましたが、三十三番の札を打つて、お互に大願  
 成就してから、私の様な者でもお内儀さん……にはお厭でございませうけれども、可愛  
 そうな奴だから力になつて遣ると仰しやつて置いて下されば、誠に私は有難いと思ひます  
 が」

山「そう成つて下されば、私の方も有難い、本当に左様成つて呉れ、ば有難いねえ」

繼「本当にお前さんが左様仰しやれば眞実生涯見棄てぬ、末は夫婦という観音様に誓いを立てて：貴方も私も外ほかに身寄は有りませんが、改めて仲人なこうどを頼んで：斯うという事に成りますれば、私は江戸の葛西に伯父さんが有るから、その伯父さんが達者で居れば、その人がちゃんと身を堅める時の力になろうと思います、勿論それを舅しゅうとにして始終一緒にいる訳でも有りませんが……左様なれば私も一大事を打明けて云いますから、お前さんも身の上を隠さずに互に話をいたしたいと思ひますが」

山「左様観音様に誓いを立つて、私の様な者を亭主に持つて呉れるなら、私は本当にお前に打明けて云う事が有るけれども、若し途中でひよつと別れる様な事に成つて、喋られると大変だから、うっかりと打明けて云われねえ」

繼「私も打明けて云いたいが大事の事だから……若し男のvari易い心で気が變つた後あとで、他へ此の話をされると望みを遂げる事が出来ぬと思つて、隠して居りますが、本当に私は大事のある身の上」

山「私も一大事が有るのだよ」

繼「左様……よく似て居ますねえ」

山「本当によく似てるねえ」

繼「まアお前さん云つて御覽」

山「まアお前から云いなさい」

繼「まアお前さんからお云いなさいな、打明けて云やア私を見棄てないという証拠になるから」

山「でも一大事を云つてしまつてから、お前がそれじゃア御免を蒙ると云つて逃げられると仕様が無いからねえ」

繼「私は女の口から斯ういう事を云い出すくらいだから、そんな事は有りませんよ、本当にお前さんを力に思えばこそ、死しにみ身に成つて、亭主と思つて、お前さんの看病をしました」  
 山「誠に有難う、そう云う訳なら私から云いましょうがねえ：実はねえ：まアお前から云つて御覽」

繼「まアお前さんから仰しやいな」

山「うっかり云われません……全体其のお前は何だえ」

繼「私は元は江戸の生れで、越中高岡へ引ひっこ込んで、繼ま母はに育てられた身の上でございませぬ……誰たれか合あい宿やどが有りやアしませんか」

山「あの怖い顔の六部が居ましたが、彼奴が立って行って誰も居ないよ」

繼「実は山之助さん、私は敵討でございますよ」

山「え、敵討だと、妙な事が有るものだねえ、お繼さん私も実は敵討で出た者だよ」

繼「あらまあよく似て居ますねえ」

山「本当によく似てるが、何ういう敵を討つのだえ」

繼「私はねお父さんの敵を討ちに出ました、その訳と云うのは越中高岡の大工町に居ます時、繼母のお梅と云うのが、前の宗慈寺という真言寺の和尚と間男をして、然うしてお父さんを薪割で殺して逃げました、其の時私は十二だったが、何卒敵を討ちたいと心に掛けて居る中に、もう十六にも成ったから、止めるのを無理に暇乞をして出て来ました、三十三番の札を打納めさえすれば、大願成就すると云う事は予て聞いて居ますし、観音様の利益で無理な事も叶うと云う事でございますから、目差す敵は討てようと思つて居ますけれども、貴方は男だから、夫婦に成つて下すつたら助太刀もして下さるだろうと、力に思つて居りますので」

山「それは妙だ、私も敵討をしたいと思つてねえ、私は姉さんの敵だが、それじゃアお前の敵は越中高岡の坊さんかえ」

繼「いゝえ坊さんに成つたのだが、その前は榊原様の家来でございます」

山「うん榊原の家来……私の親父も榊原藩で可なりに高も取る身の上に成つたのだが、何う云う訳か私と姉を置いて行方知れずに成りましたから、実は姉と私とかみほとけ神しん 仏ぼつに信心をして、行方を捜したのだが、今に死んだか生きたか生死しじゆうしの程も分らずに居るが、私の姉を殺した奴も元は榊原藩で水司又市と云う奴……その名の分つたのは姉を口説いた時に、惠梅という比丘尼が嫉やきもち妬ねたをやいて身の上を云う時に、次の間で聞いて知つてるので」

繼「まあ何うも希代きたいなこと、私のねえお父さんを殺して逃げた奴も永禪和尚と申しますので、真言寺の住持に成つたが、元は水司又市と云う者で、やっぱり私の尋ねる敵だわ」

山「そりやア妙な事が有るもんだねえ、よく似てるねえ」

繼「似て居ますねえ」

## 五十二

山「何うも不思議な事も有るものだ、それじゃア何だね、お前のお母さんは坊さんかえ」

繼「いゝえ、私の継母は元は根津の女郎じやうろうをしたお梅という者で、女郎の時の名は何と云

つたか知りませんが、又市と逃げるには姿を変えて比丘尼に成つたかも知れません」

山「これは何うも不思議だ、あの十曲峠で私と間違えてお前を追掛けた、あの柳田典藏と  
いう奴が私の家の姉さんに恋慕を仕掛けた所が、姉さんは堅い氣象で中々云う事を肯かぬ  
から、到頭葉広山へ連れて行って、手込めにしようと言ふ所へ、通り掛つたのが今の水司  
又市と云う者で、これが親切に姉さんを助けて家へ送つて呉れたから、兎も角も恩人の事  
だからと云つて家に留めて置く中に、水司又市が又姉さんに恋慕をしかけるから、姉さん  
は厭がつて早く何卒して突き出そうと思つたが、中々出て行かない、その中に宜い塩梅  
に家を出立したと思うと、お前さんの継母か知らないが、惠梅比丘尼を山中で殺して家へ  
帰つて来て、又姉さんに厭な事を云い掛けたから、一生懸命に逃げようとすると、長いの  
を引抜いて姉さんを切つた、それで私は竹螺を吹いて村方の人を集め、村の者が大勢出  
たけれども、到頭又市に逃げられ、姉さんの臨終に云つた事も有るから、始終心に掛けて、  
漸く巡礼の姿に成つて旅立をした所が、私の尋ねる敵をお前も尋ね、お互に合宿になつて  
私が看病をして貰うと言ふのは、余程不思議なことで、これは互に遁れぬ縁だ」

繼「あゝ嬉しいこと、何卒私の助太刀をして下さいよ」

山「助太刀どころじゃアない、私が敵を討つただから」

繼「いゝえ私が親の敵を討つものだから、お前さん一人で討つちやアいけません、私の助太刀をしてしまつてから姉さんの敵をお討ちなさい」

山「そんな事が出来るものか、何うせ私も討つものだから夫婦で一緒に斬りさえすれば宜い」  
 繼「本当にまア嬉しい事」

山「私も斯んな嬉しい事アない、これも観音様のお引合せだろうか」

繼「本当に観音様のお引合せに違いない……南無大慈大悲観世音菩薩」

と悦びまして、

山「もう斯う打明けた上は、仮令見棄てゝも遁れぬ不思議な縁」

とこれから山之助は気が勇んで、思ったより早く病気が全快致しましたからまだ雪も解けぬ中を、到頭出立致し、おいゝ旅を重ねまして、翌年二月の月末に紀州へ参りました。紀州へ参りましたが、一向何も存じませんから、人に教わつて西国巡りの帳面を見ると、三月十七日から打初めるのが本当だと云う事で、少々日数は掛りますが、仮令月日が立とうが敵を尋ねる身の上でございますから、又市の隠れて居そうな処へ参つては此処らに潜んで居ないかと敵の行方を探しながら、三十三番の札所を巡ります。先一番始まりが紀州の那智、次に二番が同国紀三井寺、三番が同じく粉川寺、四番が和泉の槇の尾寺、

五番が河内の藤井寺、六番が大和の壺坂、七番が岡寺、八番が長谷寺、九番が奈良の南  
円堂、十番が山城宇治の三室、十一番が上の醍醐寺、十二番が近江の岩間寺、十三  
番が石山寺、十四番が天津の三井寺と段々打巡りまして、三十三番美濃の谷汲まで打  
納めする。其の年も暮れ翌年になると、敵を捜しながら、段々と東海道筋を下って参り、  
旅をすること丁度足掛三年目の二月の五日に江戸へ着致しましたが、是と云つて外に頼る  
処もございませんから、先葛西の小岩井村百姓文吉の処に兄が居りはしまいかと思つて、  
村の入口で聞きますと、それはあの榎のある処から曲つて行くと、前に大きな榛の木が  
有るからと教えられて、其の通り参つて見ると、百姓家は土間が広くしてある、その日当  
りの好い処に婆様が何かして居りますから、

繼「御免なさいまし〜」

男「はい何だえ」

繼「あのお百姓の文吉さんのお宅は此方でございますか」

男「あい文吉さんは此方だが、何だえ」

繼「あのお婆さんはお達者でございますか、若しお婆さんは亡くなって、伯母さんでござ  
いますか」

男「婆アさまく巡礼どんが二人来て、婆アさまに逢いたいと云って立つてるだ」

婆「はい何方でございます、巡礼どんかえ、修行者が銭を貰いに来たら銭を上げるが宜い、知つてる人が尋ねて来たかえ」

繼「御免なさいまし、貴方が此方のお婆さんでございますか」

婆「はい私が此処の婆アでございますよ、あんたア誰だかねえ」

繼「あなたお忘れでございますか、私は湯島六丁目藤屋七兵衛の娘繼と申す者でござい  
す」

婆「あれや何うも魂消たとも、何うも巨く成つたアなア、まア宜く尋ねて来たアなア、巡  
礼に成つて来ただかえ」

繼「はいお婆さんに逢いたいと思つて遠隔の処を参りました」

婆「まア宜く尋ねて来たよ、是やア誰か井戸へ行つて水を汲んで来て……足い洗つて上り  
なよ……おうく草鞋穿で……汝話しい聞いた事ア無かつきアが、これア私の孫だよ、そ  
れ江戸へ縁付けて出来した娘だ……さア足い洗つて上るが宜い」

と云われたから巡礼二人は安心して上へ上り、

繼「御機嫌宜う」

と挨拶を致しますると、

婆「お前は全く藤屋七兵衛の娘お繼かえ」

繼「はい全くお繼でございます、兄は縁切えんきりで此方こちらへ預けられた事は承知して居りますが、只今でも達者で居りますか」

婆「はあえ、彼は親父おれの心得違いで女郎じようろうを呼ばったで、違つた中だもんだから、虐められるのが可愛そうでならなえから、跡目相続の惣領の正太郎だアけれど、私わしの方ほうへ引取り、音信不通いんしんになつて、そうしてまア家うちい焼けてから跡は打潰ぶつつぶれて麻布ひつこへ引込んだきり行ゆきか通よいしない、後あとで聞けば遠い国へ引込んだと云うことで、七兵衛は憎いから心にも掛けなえけれども、己おれア為には真実の孫のあの娘が継母の手にかゝつて居るかと心配して、汝われが事は忘れた日は無いだ：な、え十八だとえ、己おれアはア七十の坂を越して斯う遣つて居るだけれども、まア用の無いやくざ婆ばあだから早く死にたい、厄介やくわいのないように眠りたいと思つてるだが、斯うやつてまア孫が尋ねて来て顔が見られると思えば、生きて居て有難かつきア……父ちやんは達者かえ」

繼「はいそれに就いてはお婆さん種々訳が有つて来ましたが、何卒早く兄さんに逢いたいものでございます」

婆「お、正太郎かえ、あの正太郎には瘦るほど苦労をしただ、その訳と云えば、あの野郎を連れて来て堅気の商人へ奉公に遣り、元の様な大い家を拵えさせたいと思つて奉公に遣ると、何処へ遣つても直に駈ん出して惰けて仕様がな、そうしてる中に己あ家でこれ些とべい土蔵という程でもないが、物を入れる物置蔵ア建てようと云つて職人が這入つてると、その職人と馴染になつて職人に成りたいと云うから、それじゃア成んなさいと云うので、京橋の因幡町の左官の長八と云う家へ奉公に遣つただ、左官でも棟梁になりやア立派なもんだと云うから、奉公に遣つた所が、職人の事だから道楽ぶちやアがつて、然うして横根を踏出しやアがつて、婆さま小遣を貸せと云うから、小遣は無いと云うと、それじゃア此の布子を貸せと云つてはア何でも持出して遣い果した後で、何うにも斯うにも仕方が無いが、まア真実の甥だからと云つて文吉も可愛がつて居たゞが、嫁の前も有るから一寸小言を云うと、それなり飛出しやアがつて、丁度三年越し影も形も見せないから、本当に仕方が無いやくざな野郎になつてしまつたが、何処へ行きやアがつたか、能く

女郎を買つて銭が欲しい所から泥坊に成る者も有るからのう婆様、と云われる度に胸が痛くて寧ろ放ん出さないと思つてなア、若しや繩に掛つて引かれやアしないかと心配して忘れる事はないだ：何ういう訳だい、巡礼に成つて此処へ来たのは」

繼「はい実はこれくくくくでございます」

と涙ながらに、三年前の越中の高岡から旅立を致しましてと細かに話をした時は、婆さんも大きに驚いて、親の敵を討とうと云う事なら、手前ばかりではいけない、今に文吉が帰つて来れば力に成つて、仮令相手は何んな侍でも文吉が助太刀をして討たして遣るから、決して心配せずに、心丈夫に思つて居るが宜いが、此の連れの方は何ういう人だと問われて、是もこれくと身上を打明けると、婆は一通りならぬ喜び、文吉も共に力に成りまして、田舎は親切でございますから、山之助までも大事に致して呉れます。山之助の身上を聞いて伯父文吉が得心の上、改めて夫婦の盃をさせ内々の婚姻を致させましたから、猶更睦じく兩人は毎日葛西の小岩井村を出て、浅草の観音へ参詣を致して、是から江戸市中を流して歩るきます。すると二月から二三四と四月の廿七日迄日々心に掛けて敵の様子を尋ねて居りましたが、頓と手掛りがございせん。少し此の日は空合が悪くてばら／＼と降出しましたから、毎もより早く帰つて脚半を取つて、山之助お繼が次の間に足

を投出して居ります。すると丁度夕刻ぜん前此の家へ這入つて来ましたのは村方のお百姓と見えて、

百「はい御免なさい」

婆「誰だい」

百「お、婆ばあさまか、家のは何処へ」

婆「今日は細田まで行くつてえなえ、嫁も今湯う貰いに行つたから留守うして居ますわ、まアお掛けなさい、一服お吸いなさい」

百「はア細田へ行つたゞかえ、それじゃアちよつくら帰らないなア、婆さま、まア何時も達者で宜えいのう」

婆「達者だつてこれ何時までも生きてると厄やっけえ介だと思ふけれども、何うも寿命だから仕様が無ねえだ、早く死にたいと云つたら死にたいと云うのは愚痴こゝおんじだつて光恩寺の和尚様に

小言を云われただ」

百「長ながいき生すれア宜よかんばいじゃアないか」

婆「お前も何時も達者だねえ」

百「私わしアはア婆様より二十も下だが己おれの割にすると婆さまは達者だ」

婆「達者では私無わしねいだ、腰もつん曲るし役にも立たないで、夜になると眠くてのう」

百「あんたア立派な好いい嫁を貰つて、まだ孫が出来ないだねえ」

婆「まだ出来ないよ、あんたア子供は幾いくたり人たり有るだかなア」

百「私わしア二人でなア、惣領の姉に養子をしたゞが、養子は堅い人間だからまア宜よいですが、弟の野郎が十三になり奉公をすると云うので、それからまア深川の菓子屋へ奉公に行つてるだ」

婆「はえ、然そうかえ、もう十三だつて、早いもんだのう」

百「それで何だ、深川の猿子橋の側の田月たげつという大でい菓子屋の家に奉公をしてるだが、時々まアそれ親が恋しくなると見えて、来て呉れといふので、私わしも野郎が厄介に成ると思つて、菜の有る時は菜を抜いて持つてツたり、また茄子なすや胡瓜きゅうりを切つて売うりに持つて行く時にやア折々店へも行くだ、するとまア私が帰ろうと云うと後あとから悴あせが出て来て、是は菓子の屑くずだから、父とつさま帰つたらお母おかあに食わせて呉れ、こりやア江戸なア菓子だと云つてよこすから盗み物でア悪いぞと云うと、なに菓子屋じやア屑くずは無暗むやみに食うのだが、己おれア食いたくないから取つといて遣るのだと云つて己おれがにくれる、己おれも心嬉しいから持つて来て婆ばあに斯あめう／＼だと云うとなア、婆さま家の婆ばあが悦えつびやアがって、江戸なア菓子はいくら甘あめえつ

て悦ぶだア」

婆「はえーい感心な子だのう、親の為に食い物を贈る様な心じやア末が楽しみだアのう」

百「所がのう婆さま、忘れもしねえ去年中、飛んだ目に逢つたゞ」

婆「はえーい何うしたゞえ」

百「何うしただつて婆さま、押込が這入つたゞ」

婆「はえーい何処えなア」

百「忤が行つてる菓子屋へ這入つたなア、こりやア何うも怖なかつたつて、もう少しの事

で殺される所だつてえ」

婆「はえーい」

五十四

百「まだ宵の事だと云うが、商人の店は在郷と違つて戸を締めても潜りの障子が有るから灯火が表から見えるだ、すると婆様、其処をがらり明けて二人の泥坊が這入つて、菓子呉れと云いながら跡をびつたり締めて、栓を鎖つてしまつたゞ、店には忤と十七八の

若い者と二人居る処とけえ来て、声を立てると打斬ぶちきつてしまふぞと云うから、忪も若い者も口が利けない、すると神妙にしろ、亭主は何処どこにいる、金は何処どこに有るか教えろ、声を出すと打斬つてしまふぞと云うから何うも魂消たまげたねえ、それからなえ婆様、這入はえつた奴は泥坊で自分が縛られつけてるから人を縛る事が上手で、すっかり縛つて出られないようにして、中の間の柱まに繋くつて置いて、然そうして奥の間へ這入はえると、旦那が奥の間で按摩取あんまとりを呼んで、横になつて揉ませて居る其処そこえずっと這入はいつて来て、さア金え出せ、汝われが家うちは大い構でかえの菓子屋で、金の有る事は知つてる、さア出せ、ぐずぐずしやアがると抛よんどころなく斬つてしまふぞ、さア金を出せと云うから、旦那は魂消たの魂消ないの、まるで旦那は口い利かない、只今上げますく命はお助け、命だけは堪忍して呉れと云うと、命までは取らぬ、金さえ出せば帰るから金え出せと云うので、其処そこえ蹲つくなんでもしただ、するとお前めえ旦那を揉んでいた按摩取がどえらい者で、其処そこに有つた火鉢を取つて泥坊の顔へぶつ投ほつた」婆「はえい怖おっかないなアまア、うん、ぶつ投ほつて火事い出来でかしたかえ」

百「なに火事でなえ、灰が眼に這入はえつて、是アおかないと騒ぐ所へ按摩取が一人で二人の泥坊を押えて、到頭町の奉行所へ突出つきだしたと云うのだが、何と剛つえい按摩取じゃアないか、是でお前めえ旦那も助かり、忪も助かつたゞ、それからお前、誠に有難い、お礼の仕様がない

と云う訳で、物も取られず、怪我もせず斯こんな嬉しい事アないが、お前は何処どこなア按摩取だと云うと、私わしは是から五六町先の富川町とみかわちようにて按摩取を致します、旅へ出てる中うちに眼まなこ悪くて旅按摩に成りましたと云うから、何か礼をしたいもんだが何か欲しい物はないか、金を遣やりましょうと云うと、金は入りません難儀を救うは人間の当あたり然まえで、私は何も欲しい物は有りませんが、富川町へ引越ひきこしてから家内が干物ほしものをする処が無いに困つてる、私も草花すきが好すだから草花でも植たえて楽たのみたいと思うそれには少し許ばかりの地面と井戸が欲しいと思つて居りますと云うので、旦那は金持だから、それじゃア地面を買つて遣あらうと云つて、井戸も掘つて、茄子の二十本許ばかりも植あえる様にして充あがったゞが、何うも彼あの按摩取は只の人でなえ、彼の泥坊を押える塩梅あんばいが只ではなえと思つて旦那が聞いたら、元は侍だが仔細有つて坊様に成りまして、それから私が眼潰まなこれましたが、だんく又宜く成りました、只今では按摩取を致しますと云うから、何うも然そうだんべえ、何でも只の人でなえと思つたツて、私わしもまア一寸年始ちよつとに行つた時見たが立派な武士さむらいで、成程只の按摩取でなえ、黒の羽織を着て、短い木刀を差して、然そうして按摩をしたり、針をしたり何かするつて、針も中々えらいもんだつて、大変に流行はるだ、何でもその按摩の名は一徳いっどくとか何とか云つたつて

婆「はえーい元は侍だつて、何様な人だえ」

百「うん、何とか云つたツけ忘れた、ん、ん何よ元は榊原様の家来で、一旦坊様に成つてまた還俗げんぞくしたと云うが、何でもはア年は四十二三で立派な男だ」

婆「はえーい然うかなえ」

と話をして居ると、部屋に居つたお繼が突然飛出して来まして、

繼「おじさんお出でなさい只今承りました、元は侍で、一旦出家に成りまして、また還俗致して按摩取に成つたと云うのは、名前は何と申しますか、その人の額に疵きずが有りますか」

百「はい……おや巡礼どんが出掛けて来た」

婆「なにこれア己おらが孫だよ」

百「へえ婆さま、斯こんな孫が有つたかえ」

婆「小さい時から他わきへ往つてたから、貴方あんたア知んなえが」

百「そうかねえ……額に疵が有りますよ」

繼「じゃア年は何でございますか、四十ぐらいに成りますか」

百「え、然うさ、四十もう一二ぐらいであろうか」

繼「元は榊原の家来に相違有りませんか」

百「え、然ういう話だなえ」

これを聞くと山之助が出て来て、

山「只今蔭で承まわりましたが、その男は顔に疵がございまして、もとは侍で、一旦出家いたして、その還俗した者というお話でございしましたが、其の名前は水司又市と申しますか」

百「おや、く、く、また巡礼どんが」

婆「是も己おらがの孫だよ」

百「婆さま、お前はまアえらく孫が幾いくたり人も有るなア……然うだ、己おらアもう忘れたが、アんだア云う通りの名前だっけ、あんたア宜く知つてるなア」

繼「それだよお婆さん」

婆「まあ然うかえ」

繼「本当だよ、観音様の御利益は有難いもの、本当に豪えらいもんだねえ」

百「え、そりやア実に豪いもんで、もう少して忪もぶち斬られる所だったが……後あとで泥坊をお調べになつたら、一人は浪人者で極ごく悪い奴だ、何とか云つた、元は櫻井の家来で、そ

れからが化物ばけもののような名前で、柳の木の幽霊、細い手の幽霊いや柳の木に天水桶てんすいおけか、うんそうじやない、浪人者は柳田典藏で、細い手と云うのは勇治とかいう胡麻の灰という事が分つて、お処刑しおきに成ると云う話だ」

婆「……おいこれえ待て〜、これえ待たねえか、汝われが二人駈出しても文吉が帰つて来ないば、向うは泥坊を生捕いけとるくれえな又市だから、汝が駈かん出してもか細い腕で遣りそこなつては成んねえが、これ〜待つちろ、文吉が帰つたら相談ぶつて三人で往いけよ……」

と云つたが敵に逃げられては成らぬと云うので富川町の斯これく々斯々と聞くや否や飛立つばかりの喜びで、是から直すぐに巡礼の姿に成つて、苞つとの中へ脇差を仕込み、是を小脇に抱え込んで飛出し、深川富川町の按摩の家うちへ、山之助お繼つとが飛込みまして、愈々いよく猿子橋の敵討に相成りますると云うお話になります。一寸ちよつと一ぶく。

## 五十五

引続きまする巡礼敵討のお話で、十八歳に成りまするお繼に、十九歳に相成りまする白島山之助が、互に姉の敵親の敵を討ちたいと、三年の間諸方を尋ねて艱難苦勞を致しまし

たる甲斐有つて、思わずも只今お百姓が来ての物語に、兩人は飛立つ程嬉しく思いますが、から婆アの留るのも聞入れずに見相を変え、振払つて深川富川町へ駈出します。すると暫く経つて帰つたのは伯父の文吉でございます。婆は兩人が駈出してから立ちつ居つ心配して泣いて騒いでも、七十を越した婆様でございますから、只騒いで心配するばかり、何うする事も出来ません。

文「婆さま、今帰りました」

婆「お、文吉帰つたか、己アまア心配ばかりして居つたが、何うもまア飛んだ訳に成つたゞよ」

文「何うしたゞえ、何時でも婆さまは仰山な事を云つて己ア本當に魂消るよ、まア静かに」  
 婆「静かにたつて、お前先烈茂左衛門が家へ来ての話に、敵の水司又市が深川の富川町で按摩取に成つてると云う事を話したゞ、するとお前、お繼も山之助も飛上つて、さア是から直に敵を討ちに行くと言うから、待てえ、向うは泥坊を取つて押えるような豪い侍だから、か弱い汝ら二人で駈ん出しても仕様がな、返り討にでも成つてアならねえから待ちろと云うのに、聞かないで駈ん出すから、己ア出て押えようと思つたら、突転して駈ん出すだ、追掛けることも出来なえから、早く汝が帰らば宜いと心配ぶつて居たゞ、早く

何うかして追掛けて呉んなよ」

文「こりやア困つたなア、それだから己おらが不断そから然う云つて置くだ、二人で行つても屹き度つむごう先方に斬られもんだ、よしんば斬られんでも怪我あざアするは受合ういだアから、何どんな事が有つても己を待つてる様に云うだ、婆様何故遣つたゞえ」

婆「何故遣るたつても遣らない様に仕ようと思つと、突除つんのけて行つて、留とめても留らぬから仕様がないだ」

文「そりやア困つたなア……これ嘉かじゅう十手うてめえ前も一緒に行け、二人に怪我をさしては成んねえから、己おらも直ぐに行くだから、手前長く奉公して世話に成つたから一緒に行け」

嘉「敵討に行くだから一緒に行けつて、私わしい参りめえしよう、なに死んだつて構かまいませんよ、参りめえしよう」

と田舎の人は正直で親切でございすから、本当に死ぬ了簡と見えて、藻刈鎌もがりがまを担かついで出掛けます。文吉も小長こながいのを一本差しまして、さつさと跡から飛出とびだして余程急あすこぎましたが、間に合あいません。山之助お繼は富川町へ駈けて参りますと、其の頃は彼処あそこに土屋しもやしき様の下屋敷しもやしきがあり、此方こちらにはまばらに人家とちやが有りは有りまするが、只今とは違つて至もんがたつて人家の少ない時分ときでございす。成程来て見ると茂左衛門の云つた通り入口もんがたが

形に成りまして、竹の打付の開戸が片方明いて居て、其処に按腹揉療治とい  
う標札が打つてございます。是から中へ這入ると左右が少し許り畠になつて、その横が生  
垣に成つて居りますから、凡そ七八軒奥の方に家が建つて居まして、表の方は小さい玄  
関様で、踏込が一間ばかり土間に成つて居ります、又式台という程では有りませんが上  
り口は板間で、障子が二枚立つて居り、此方の方は竹の打付窓でございます。あの辺  
は四月二十七日頃でももう蚊が出ると見えて、夕景に蚊遣を焚いて居る様子、庭の方を見  
ると、下らぬ花壇が出来て居りまして、其処に芥子や紫陽花などが植えて有つて、隣家も  
遠い所のさびしい住居でございます。二人は窃つと藁苞の中から脇差を出して腰に差し、  
慄える足元を踏メ《ふみし》めて此の家の表に立ちましたのは、丁度日の暮掛ります時。  
山「御免なさいまし、お頼み申します」  
太「はい誰方え」

山「あの揉療治をなさる一徳さんは此方でございますか」

太「はい一徳の宅は手前だが何方だえ、此方へお這入んなさいまし」

繼「少々承まわりとう存じますが、一徳さんのお年は幾つでございませう」

太「何だ障子越しに己の年を聞くと云うのは何だ……御冗談や調弄では困ります、此方

へお這入りなさい」

山「はい、あなたは何でございますか、額に疵がございますか」

太「何だ……左様でござる、手前は額に疵も有りますが、何方でげすえ」

山「え、元は榊原様の御家来で、お年は四十一でいらつしやいますか」

太「なんだ……はい私の年まで知っていて、おもて面部に疵が有ると仰しやるのは何方どちらのお方で  
ございますすえ」

山「お名前は水司又市でございますか」

太「はい何方どなただえ」

と水司又市と云う名を聞くや否や山之助は一刀を抜くより早く、がらり障子を明けながら、

山「姉の敵い……」

と一ひとこえ声一生懸命の声を出して無茶苦茶に切込んで来る。続いてお繼が、

繼「おのれ親の敵覚悟をしろ」

と鉄切かなきりこえ声を出した時には不意を打たれて驚きましたが、

太「これ何を致す、人違ひとがまいをするな」

と云いながら傍そばに有りました今戸焼の蚊遣火鉢を取つて打付ぶつけると、火鉢は山之助とお繼の肩の間をそれで向うの柱に当つて碎け、灰は八方に散乱する。また山之助の突掛つきかける所を引外ひっぱすして釣瓶つるべ形の煙草盆を投付け、続いて湯呑茶碗を打付ぶつけ小さい土瓶を取つて投げる所を、横よこ合あひからお繼が、親の敵覚悟をしろと突掛けるのを身を転かわして利腕きうでを打つと、ぱらり持つていた刃物を落し、是はと取ろうとする所を襟えりがみ上を取つて膝の下へ引摺寄せる、山之助は此所こゝぞと切込みましたが、此方こちらは何分手ぶらで居つた所、幸いお繼が取落した小しょう刀とうが有つたからそれを取つて、

太「これ怪我を致すな、人違いを致すな、宜く心を静めて面めん体ていを見ろ、人違いく〜」

と二三度打流したが、相手の方から無二無三に打つて掛るから、

太「これ人違いを致すな」

と払い除けました、其の切きつ尖せきが山之助の肩先に当ると、腕が利いて居る、余程深く斬込みました。

山「あア」

どんと山之助が臀しりもち餅をついたなり起上る事が出来ません、山之助が斬られたのを見るとお繼が

「わーっ」

と其の場に泣倒れました。

太「これ何処へ参つて居るかな、これ照や、狼藉者が這入つたが、何処へ参つて居るか、これ早く燈光あかりを持つて参れ、燈光を……」

此の時女房は裏の井戸端で米を磨いで居りました。じゃくくくくと米を磨いで居り、余程家うちから離れて居りますから、右の騒ぎは聞えませんでした、大声で呼びましたから、何事かと思つて慌あわて、家へ這入つて見ると右の始末、

照「おや何う……」

太「何うたつて今狼藉者が這入つたのだ、何分暗くつて分らぬから早く燈光を点けて来い」と云われて、女房は慌てながら火打箱でかちくくく。

五十六

お照は火を打つ所が、慌てるから中々点かないのを漸ようようの事で蠟燭ともを点して、  
照「何うしたの」

と見ると若い男が一人血に染つて倒れて居り、また一人の娘を膝の下へ引敷いて居りますから。

照「こりやアア何でございます」

太「何だつて今此の狼藉者が這入つたのだ：さこれ能く面体めんていを見ろ、人違いを致すな、己は人を害めた覚えも無し、敵と呼ばれて打たれる覚えも無い、これ面おもてを見ろ、心を静めて面を見ろ」

と云われたから、山之助が漸うに起上つて燈火あかりで顔を見ると、成程年齢としごころは四十一二にして色白く、鼻筋通り、口元が締つて眉毛の濃い、散髪なでつけの撫付なでつけで、額こびんから小鬢こびんに掛けて疵きずが有りますなれども、能く見ると顔形かおかたちが違つて居りまする故、

山「あゝ是は人違いをした」

と思うと、

太「何うじゃ、違つて居ろうな」

山「はい誠に申訳がございません、全く人違いでございます」

照「人違いで敵だと云つて斬込むとは人違いにも程がある、何ぼ年が行かぬと云つて、斬つてしまつた後あとで人違いで済みますか、良人あなたはお怪我は有りませんか」

太「そんな事を云わんでも宜い、早く其処らに散乱して居る火を消せ」

と云われて御新造が柄杓に水を汲んで蚊遣の火が落ちた処に掛けると、ちゆうぶうとう云う大騒ぎ。此の時まで只泣いて居て口の利けぬのはお繼で、今燈火の影で山之助が血に染つて居る姿を見て、

繼「山之助さん確かりして下さいよ……全く人違いでございますから、何の様にもお詫をいたしますが、何卒お医者様を呼んでお手当を願います」

太「そりやア人違いと分れば手当もして遣ろうが、油断は出来ませぬ、ひよつとして又、何うもなア……全く人違いであろう」

山「はい」

太「左様か」

山「お年と云い、額の疵と云い、榊原の家来で水司又市様と仰しやいましたから、同じお名前故に取違えましたのでございます」

太「やア是ははや是ははや、私は水司又市じゃアない、私は水島太一郎という者だが、按摩に成つてからは太一と申すが、其方は水司又市を敵と狙うのか」

山「はい」

太「やアそれは気の毒千萬な事を致した、うん、うん、姉の敵で、彼の者には親の敵だと、未だ年も行かんで親の敵姉の敵を討とうと云う其の志ある壯者を、怪我させまいと背打にする心得だったが、困った事を致したな、是やア不便な事を致した、手が機んだから、余程深傷のようだ、まアくく待て」

と彼の按摩取太一が山之助の傷を見ると、果して余程深く切込みました。

太「こりやア機みも機んだので、迎も助かりそうは無い……まアこれ表の鎖鑰を掛けろ、誰も這入つては来まいが、若し来ては成らぬから締りをして参れ、これ誠に気の毒な事だけれども、私も刃物で切込まれるから、已むを得ず気の毒ながらも深傷を負わしたが、一体何う云う仔細でまア水司又市を敵と探す者か、此方は手負で居るからせつない、これ娘お前泣かずに訳を云え」

繼「はいく、私は越中の高岡大工町の藤屋七兵衛の娘繼と申しまする者でございますが、七年前に私の繼母と、つい前の宗慈寺と申す真言寺の永禪と申しまする和尚と不義をして、然うして親共を薪割で殺して二人で逃げました、私は丁度十二の時で、何うぞ敵を討ちたいと心に掛けまして、三年前に高岡を出まして、巡礼を致して敵の行方を捜しました所が、更に心当りもなく、つい先達て江戸へ出て参りました、参つて伯父の処に厄介にな

つて居ります中に、この深川富川町に水司又市という人が有つて、元は榊原様の家来で、家敷やしきを出て、一度頭髪たびめたまを剃り、又還俗げんぞくして按摩あんまをして居る水司又市と聞きました故、親の敵という一心で此方こちらへ斬込みましたのでございます」

太「成程お前の為には親の敵だ、またこれは姉の敵だと云つたな」

山「はいく〜」

と手負ておいに成りました山之助が、漸ようように血に染つた手を突いて首を擡もたげましたが、

山「はア旦那様誠に申訳もございません、私は其の永禪と申します者が還俗して、また元の水司又市と申します者が、此のお繼の一旦親に成りましたお梅と申す者を尼の姿やぶつに扮して、私の宅に泊り合せ、私の姉に恋慕を云い掛けました所が、姉が云う事を聞かぬと云うので到頭姉を殺して逃げましたのが水司又市でございます、それから私は姉の敵を討ちたいと心に掛けまして、此のお繼と二人三年越し巡礼に成つて西国三十三番の札所を巡りまして、漸々ようよくの事で今日こんにち只今敵に逢いましたと存じまして、是へ参つて承わりましても、貴方のお年は四十一歳、額に疵が有つて元は榊原の家来水司又市と仰しやいます故よくに善々、お顔も見ずに踏込んで斬掛けました不調法の段は幾重にもお詫を致します」

太「うん二人は兄弟か」

山「え、是は只今は私の女房でございます」

太「うん左様か、うん是は何うも誠に氣の毒千万、えん、うん水司又市あーア何うも彼奴は兇悪な奴だ、今に悪事を重ねる事で有るか、何う致してもなア、医者を呼んで手当をして遣ろうが、中々の深傷ふかたで有るて、なれども確しつかり致せよ、命数うち尽きざる中は何の様な深傷でも、数十ヶ所縫う様な傷でも決して死ぬものじやアない、又万一療養相叶わずして相あ果いはてる事があれば、後あとに残るは貴様の女房……二人が劍術も知らずに無暗むやみに敵を討とうと思つても、水司又市は中々の遣つかい手だから容易に討てやせぬ、手前も仔細有つて其の水司又市に逢わなければ成らぬ事が有るから、貴様が万一の事が有れば娘は自分の娘にして劍術も教え、貴様は己が過あやまつて殺したのじやに依つて、後のち々いよく愈々又市を討つ時には己が力に成つて助太刀をして討たせるが、何か貴様申置く事があらば遠慮なく云えよ」

山「はい有難う、有難う、私は不調法から貴方に斬られて死ぬのは決してお怨みとは存じませんが、只水司又市に一ひと刀たちも怨まぬのが残念でございます、私の親と申します者は、元は榊原藩で貴方も御同藩なら御存じでいらつしやいませうが、十七年前あとに家出を致しまして、もう国を出ましてから十九年で、私が未いまだ生れぬ前に、江戸屋敷詰に成りまして、それから江戸屋敷から行方知れずに成りましたので、段々姉ふたりと兩人かみほとけで神あ仏いに祈念して

行方を捜しましたが、いまだに行方も知れず、生死の程も分りません、これお繼私のお父様の事もお前に話して有るが、若し御存生でお目に掛る事が有ったならば、私は斯々の訳で不覺を取ったが、何卒一目お目に懸りたいと云つて居たと云つて下さい」

繼「はい、確かしてお呉んなさいよ」

太「貴様が側で泣くと手負が氣力が落ちていかん……これお前の親は榊原藩で何という名前の人だえ」

山「はい私の祖父様がお抱えに成りましたのだそうでございますが、足輕から段々お取立に成りまして、お目見得近くまで成りました、名は白島山平と申します者でございます」

太「え、何だ貴様の親は白島山平……何か貴様は白島山平の倅か」

山「はい白島山之助と申します者で」

太「お、是は何うも、宥してくれ、これ倅、貴様の親の山平は此の水島太一であるぞ」

五十七

山「え、お父様あの貴方が」

と云つて二人ともに膝の上に絶り付く手を取つて、

太「あゝ面目次第もない、己が貴様の親だと云つて名告つて逢われべき者ではない、実に非義非道の親である、其の方が懐妊中に江戸詰を仰附けられて江戸屋敷に居る間に、若気の心得違いで屋敷を駈落する程の心得違いの親、実に情ない事だ、親らしい事も致さぬ親を憎いと恨まんで、宜く臨終に至るまで手前に逢いたい懐かしいと遺言まで致してくれた、あゝ面目ないが、母も歿したか、うん、なに姉おやまも又市に討たれたか」

山「はいくゝ有難う存じます、お懐しゆうございます、お懐しゆうございます、貴方にお目に懸りたいと云つて姉さんも何様に待つておいでなすつたか知れませんが、貴方が家出をなさいまして屋敷に居られぬ事はございませんが、お母さんは心配して三年目に亡くなりました、私は少さし姉さんも年が往きませんし、外に致方がございませんで、伯父さんが此方へ引取ろうと云つて、信州白島の伯父さんの厄介に成つて居ります中に、姉さんが又市の為に斬殺されました、姉様が死にます時にも、お父様に逢わずに死ぬのは残念だ、一目逢いたいと申しました」

太「うん左様か、実にそれ程までに私を慕つて、今思い掛けなく面会致したが、現在親の手で子を殺すと云うのは如何なる事か、皆これまで非道な行いを致した天罰主罰が酬

い來きたつて斯この様ような訳、あゝ親として手前を己が殺すと云うのは実に情ない、手前己を親と思わずにひとかたな一刀でも怨んで呉れ」

山「いゝえ勿体ない事を」

照「あなた其様そんな事を仰しやつても仕様がございませぬ……あのお前さん、初めてお目に懸りました、お前さんは定めてお父とつさんを憎いとお恨みでございませうが、お父さんの悪いのではございませぬ、みんな私が悪いのでございませぬ、と申すは拗よんどころない訳で私がお前さんのお父様とつさんを慕いまする故に、お父様がお屋敷を出る様な事に成りました、それも私の養子が得心で二人共にお屋敷を出ましたけれども、永い旅を致して宿やどへ着くと、国へ残してお出でなされた御新造ごしんぞうやお前さん方に濟まないと云つて、私も神かみほとけ仏に心うちの中でお詫ばかり致して居りました、何卒堪忍してお呉んなさい、お父様を怨まずに私を悪い者と恨んでお呉んなさいまし」

太「これ山之助今更懺悔ざんげを致す訳でも無いが、余儀なく屋敷を出んければならない訳に成つたのは、武田から来た養子の重次郎と同衾ひとつねを致さぬと云う情じょうを……立てる其の間に告つ口げぐちを致す者も有つて、表おもてむき向むかひになれば名みやう跡せきが汚けがれるから重次郎の情なさけで旅費を貰うて家出を致したが、丁度懐妊中の子を生落うみおとして夏という娘を得たから、漸ようやく十五歳まで

育つて楽しみに致した所が、三年前に信州の鳥居峠へ掛る時、悪者に出逢い、勾引されんとする時に、一刀を抜いて切結んだが、向うは二人此方は一人、其の時受けた疵が斯のうに只今でも残っている、娘は其の時谷間へ落ちて到頭其の儘に相果てたから、私も此のお照も実により一月許の間は愁傷して、泣いてばかり居つて、終には眼病と相成つたから、致方なく按摩に成つて揉療治を覚え、逆も生涯世に出る事は出来ぬと心得て居つた所が、追々眼病も快く成つて段々見える様に相成つたから同じ死ぬなら故郷懐かしく、此の江戸へ立帰つて、富川町に昨年世帯を持ち、相変らず按摩を致して居る内に、よう／＼の事で眼病も癒るような事なれども、揉療治を致すような身の上になつたから、若し屋敷の者に見られては相成らぬと思つて、屋敷近くへ参る事も出来ず、如何致そうかと照も心配致して、又々旅立を致そうか、但しは謝まつて信州の親族の処へ参ろうかと思つて居つた所で有るが、一人の娘を谷間へ落して殺したのも是も皆罰で、兩人の者へ歎きを掛けるような事が身に報つたのだ、今また其の方を我手で殺すとはあゝ飛んだ事、是も皆天の罰、こりやア頭髮を剃毀つて罪滅ぼしを致さんければ世に居られぬ」

照「誠に御尤もでございます」

山「お父様え、貴方も水司又市を捜す身の上と仰しやいましたが、何故あなたは水司又

市に似た様な名をお付け遊ばした」  
太「手前は何も存ぜんが、お祖父様は元信州の者で、故有つて越後高田に近き山家へ奉公  
住みを致して居ると、或日榊原公が山獵にお出遊ばして、鳥を追つて段々山の奥に入り、  
道に迷つて御難儀の処へお祖父様が通り掛つて、御案内をして城中へお歸りに成つたから、  
うい奴と仰しやつて先君がお取立に成つた、是が私の先祖で、其の時は白島太一という  
名前で有つたが、山を平らに歩かせたという所から山平という名を下すつた、それ故先君  
から頂戴の名を大切に心得て名を汚すなくという遺言が有つたなれども、私は実に家名  
を汚す不孝不義の山平ゆえ、先代が頂戴の名を附けて居ては成らぬと云うので、信州水内  
郡の水と白島村の島の字を取つて苗字に致し、これに父の旧名太一を名告つて水島太一  
と致したが、今と成つて見ると此の水島太一という姓名を附けなければ斯の様な間違いも  
有るまい、是も皆若い時分からの罪で斯う成るのであらう、あゝあ恐るべき事である、こ  
れ俸手前なア何うかして助きたいが、実は逆も助からぬ事と存じて居ろうが、後々の事に  
は心を残さず往生致せ、縁有つて手前の家内に成つて居るお繼という此の娘は私が引取つ  
て劍術を仕込み、手前の為には姉の敵に当る水司又市を捜して屹度敵を討たせるから、心  
を残さず往生致せよ」

山「はいくく有難うく、逢いたいくと思うお父様とっさまにお目に懸り、お父様のお手に懸つて死にますれば何も心を残す事はございませぬ、これお繼少しの間でも御厄介になつた伯父さんやお婆さんに何卒どつぞ宜しくお前云つてお呉れよ」

繼「はい山之助さん確しつかりして下さいよ、お前さんが死ねば私は此の世に生きて居おられませぬ」

と山之助に取とり紐すがつて泣きまするから、堪こらえ兼かねてお照も泣伏します。水島太一も膝の上  
に手を置くと、はらくくと膝へ涙が落ちる。すると台所の方から大きな声で

「御免なせえまし」

## 五十八

太「何だえ」

文「へえく真平御免を蒙ります」

太「何うも悔びりする、誰だえ」

文「私わしは此こ処こにいるお繼の實の伯父で百姓文吉と申します、私は今日他よ処そへ行つて先さ刻き家ち

へ帰ると、敵討に行つたと云いますから、家の男を連れて駈けて参りましたが様子が知らない、其処らで聞くと此家だと云うから、濟まぬようだが窃つと這入つて、裏へ廻つて様子を聞いて居りますと、人違いだくと云う声ができるから、はてと思つて聞いて居りましたが、間違ひとは云いながら、小さい時分に別れたお前様の子、それを貴方が知らないとは云いながらはア斬つて殺すと云うは、若い時分の罪だと懺悔する其の心持を考えますと、我慢しようと思いましたがつい泣いたでがंस、何うも飛んだ間違ひに成りました、これ嘉十、もう鎌なんざアぶつ放つてしまえ」

太「何うもお恥かしい事がお耳に入つて面目次第もございません」

文「何うか助かり様が有りましようか」

太「迎も助かりますまいとは存じますが、此の辺に生憎療治を致す者もござらぬ、手前少々は傷を縫う事も心得て居りましたが、つい歎きに紛れて……何しろ焼酎で傷口を洗いましよう」

山「伯父様宜く来て下さつた」

と云う声も絶々、でございますから、

太「確かりしろ、今傷口を洗うぞよ」

と云う中うちに山之助は最もう目も疎うとく成りますから、片方かたに山平の手を握り片方はお繼の手を握つて、其の儘山之助は呼吸は絶えましたから、お繼も文吉も声を揚あげて泣倒れましました、

太「幾ら歎いても致し方がない、私わしが親と知れてはぱつとして上屋敷かみやしきへ知れては相成らぬから、何卒どうぞ親でない事に致したい、それにはお前方が確かな証人だに依つて、敵と間違えて斯様かよう々々に成つたと云う事を細かに訴えて検屍を受けなければ成らぬから」

と是から百姓文吉に山之助の女房お繼が証人で、直すぐに細かに認しためて訴え出でましたから、早速検屍が出張に成つて傷口を改めました、現在殺された山之助の女房と伯父ふたり兩人が証人で、全く人違いで斯様な事に相成りましたと云うから、さしたる御咎おとがめもございませんで済みました。その跡の遺骸なきからは文吉が引取りまして、別に寺もありませんから小岩井村の菩提所ぼだいしよへ葬むり、また山平は伯父と相談して兎も角もお繼を引取り、劍術を仕込み、草を分けても水司又市を捜し出して親の敵を討たせなければ成らぬと、深川の富川町へお繼を連れて参り、これから山平の手許てもとに置いて劍術を仕込みます所が、親の敵を討とうと云う志の好い娘でございますから、両親に仕えて誠に孝行に致します。またお照も山平も実の子の如くにお繼を愛します。是から竹刀ちくとうを買つて来て、間があれば前の畑むしろに蒔

敷きまして劍術を教えますするが、親の敵姉の敵夫の敵を捜して、水司又市を討たんければ成らぬと云う一心でございますから、教えようも教え様よう、覚える方も尋常たゞでないから段々くくと劍術が出来て腕も宜くなり、もし貴方を又市と心得まして斯う斬込んだら何うお受けなさると云うくらい、人の精神は恐ろしいもので、段々山平でも受け兼かねる程の腕に成りましたから山平も喜びまして、

山「先まず追々腕も出来て来たか、生兵法なまびようほうは敗れを取ると云う譬たとえも有るから、ひよつと途中で水司又市に出遇であつても一人で敵と名告なつて斬掛ける事は決して成らぬ、相手の水司又市は今は何の様な身ようの上か知れんが、何でも腕の優れた奴だに依つて、決して一人なで名告掛ける事は成らぬぞ」

と予かねて言付けて有ります。毎日々々朝は早く巡礼の姿で家を出まして、浅草の観音へ参詣を致し、市中に立つて御詠歌を唄つては報謝を受けて帰り、月夜の時には夜になつても裏の畑に莖を敷いて一生懸命に劍術の稽古を致します。すると近きんじよ処では不思議に思ひまして、

○「あの按摩の家うちは余程よっぽど変つてるぜ、巡礼の娘を貰つたとなア、妙な者を貰やアがったなア、でも腕は余程宜いいに違ちがひない無闇に劍術を教えるんだが、それも夜中にどんく初

めやアがる、彼奴は余程変り者だぜ」

と云う噂が高く成ります。丁度九月の節句の事でございましてお繼は例の通り修行に出て家に居りません。山平も別に用事が無いから、寛いで居る所へ這入って来ましたのは、土屋様の足軽中村久治と申す人。

久「先生々々」

山「誰方ですえ」

久「え、中村久治でげす、さて先日は大きに」

山「え、貴方は先日急に御用で揉掛けになつて、まだ腰の方だけが残つて居りました」

久「いやもう私は酒は飲まず、外に楽しみも無いので、まあ甘い物でも食い、茶の一杯も飲むくらいが何よりの楽しみ、それに私はまあ此の疝氣が有るので、疝氣を揉まれる心持は堪えられぬて、湯に這入つてから横になつて疝氣を揉まれるのが何より楽しみだが、先生は私の様な者だからと思つて安く揉んで下さるんで先生は柔術剣術も余程えらいと云うことを聞いて居りますが、何うも普通の先生でない、たしか去年でげしたか、田月という菓子屋で盗賊を押えなすつたつて、私の屋敷でもえらい評判でねえ」

山「なに出来やア致しませんか、幸いに泥坊が弱かつたから……これ照やお茶を上げろ……」

：是やア詰らぬ菓子ですが、丁度貰いましたから召上るなら」

久「いやこれは有難い、先生の処はお茶は好し菓子までも下さる、有難いと云つて毎度噂を致します、何卒又少し療治を願ひましょうか」

山「え、お屋敷も御大藩でげすから、御家来衆も嘸多い事でございましょうが、御指南番は何方でげすえ」

久「なに杉村内膳と云つて、一刀流ではまア随分えらい者だという事で」

山「へえ成程杉村内膳、柔術は……うん成程澁川流の小江田というのが御指南番で、

成程あれは老人だが余程澁川流の名人という事を聞きました：成程して強い御家来衆も有る事でげしようなア」

久「沢山ある上に其の上にもくと抱えるのは、全体殿様が武張つていらつしやるので、武芸の道が何よりもお好でなア、先年此の常陸の土浦の城内へお抱えに成りました者が有りまして、これは元修行者だとか申す事だが、余程力量の勝れた者で、何のくらい力量が有るか分らぬという事で」

山「は、ア大した力量の有る者をお抱えに成りましたな」

## 五十九

久「え、お抱えに成りましたと云うのは、宇陀の浅間山に北條彦五郎という泥坊が  
 隠れていて、是は二十五人も手下の者が有るので、合力という名を付けて居廻りの豪  
 家や寺院へ強談に歩き、沢山な金を奪い取るので、何うもこりやア水戸笠間辺までも暴  
 すから助けて置いては成らぬと云うので、城中の者が評議をした、ところが何うも八州は  
 役に立たぬから早川様が押えようという事になつて、就きましては凡そ二百人も人数が押  
 出しました押出して浅間山を十分に取巻いて見た所が、北條彦五郎は岩穴の中に住んでい  
 る、その穴の入口が小さくて、中へ這入るとずっと広くて、其処に家を拵えて住居として  
 居り、また筑波口の方にも小さい岩穴が有つて、これからはれへ脱けるように成つて居る  
 から、此方の方を固めて居ても、此方の方から谷に下りて水を汲んだり、或は百姓家で挽  
 割を窃み、米其の外の食物を運んで隠れて居ります、さ、これでは成らぬと槍鉄砲を持  
 つて向つた所が穴の中が斯う成つて、鉄砲丸が通らぬから、何様な事してもいかぬ、所  
 でもう是りやア水攻めにするより外に仕方が無いと云つて、どん／＼水を入れて見ると、  
 下へ脱けて落る処が有るから遂々水攻も無駄になつて、何うしたら宜かろうと只浅間

山を多勢おおぜいで取巻いて居るだけじやが、肝腎の彦五郎は裏穴から脱けて、相変らず人を殺したり追剥おいはぎを為るので、これには殆ど重役ほんじんが困っている所に、一人の修行者しゆぎようじやが来て、あなた方は幾ら此処こゝを取巻いて居ても北條彦五郎を取押える事は出来ません、殊に北條彦五郎は大力無双だいきぶそうで、二十五人力も有るといふ事だから、兎とてもいけぬに依つてお引揚げなさいと云うから、引揚げたら何うすると云うと、私一人わたくしに盜賊取押え方を仰付けられ、ば有難いと云うので、然らば修行者は何のくらしいな力が有るかと云うと、私は力が有りません、何うか盜賊取押えを仰付けられたいと云うから、段々評議をした所が、何せ今までのように頑張つていても出るか出ないか知れぬから、当人が取押えると云うなら遣やらして見ろという仰しやり付けで、これから其の修行者に取押えを言い付けた所が、其奴そいつのいうには手前の脊負しよぶつた筈おひに目方が無くては成らぬから、鉄の棒を入れるだけの手当を呉れと云うから、多分の手当を遣ると全く金を取つて逃げる者でも無く、それから手当の金で鉄の重い棒を買い、筈の中へ入れて、彼の北條彦五郎の隠れて居るといふ穴の側へ行つて、其処こゝへ筈を放り出して、労つかれた振ふりをして修行者が寝て居ると、ある月夜の晩に彦五郎の手下が穴の側へ見張に出て見ると、修行者が居るから、「これ何うした」「私わたくしは歩けません」「何ういふ訳で歩けぬ」「道に労れて歩けませんから、寝て居ります」と云うと、「此処

に居ては成らぬから行け」 「行くにも行かないにも荷物が脊負えませぬ」 「脊負えぬなら脊負わせて遣ろう」と云うので手下の奴が動かそうとしたが中々動かぬから、こりやア何ういう重い物だか、是を脊負うのは剛い者だといって手下の者が皆寄つたが持てぬから「手前てまえこれを脊負つて歩くか」 「歩けますが、此の通り足を腫はらしたから仕様が有りません」と云うので足を出して見せると、巧うまく拵こしらえて膏藥を貼つて居て「これだから担かつげません」と云うから「手前はてまえ何のどくらい力がある」 「私はわたくし五十人力ある」と云うと、手下の奴が「そりやア嘘だろう」 「なに嘘じやアない」 「いや嘘だ、嘘は泥坊の初まりだが、こりやア手前が嘘だ」 「いや決して嘘でない」という争いになると、北條彦五郎が、なに此の位の物を脊負つて動けぬことが有るものと云うので、連れん尺しゃくを附けて脊負つて立ちやアがった、大力無双だいきむその奴だから、脊負つて立ち立たつた所が歩けないで、やつとよじよ五あ六し足歩くと、修行者が後うしろから突つき飛としたから、ぐしヤツと彦五郎が倒れると、恐ろしい目方の物が上へ載つたから動きも引きも出来ない、すると修行者に首領かしらが打たれたと云うから、そりやアと鉦太鼓かねで捕人とりてが行つて、手下の奴を押えて吟味すると何処どこから這入つて何処から脱ぬけるという事まですっぱり白状に及んだから、ようくの事で浅間山の盜賊を掃除したと云うので、是れから其の修行者は劍術も心得て居るだろうから当家へ抱えろと

いう事になつて、これまで桜川さくらがわの庵室に居つたから苗字みょうじを櫻川と云つて五十石にお抱えに成つたが、智慧もあり劍術も出来て余程よつほど賢い奴だ、其の荷を拵ぐあひえた工合は旨いもので、動けない様にする工夫が巧うまいものじゃアないか」

山「へえ、それは全く修行者で、六部でげすか」

久「いや段々聞いたら何でも尋常たゞの奴でない、人の噂でも何うも尋常たゞ漢でない、大かた長脇差では無いかという評判を立てたら、当人がそんならお話をいたしますが、実は私わしは元は侍で、榊原藩でございまして云つたそうだが、面部かおに疵を受けた、総髪そうはつの剛えらい奴で」

山「それは何でげすか、名はなんと」

久「名は櫻川という処に居つた者で、櫻川又市と云う」

山「へえ桜川という処の者で」

久「いゝえ桜川の庵室に居つたから、それを姓として櫻川又市というので、面部かおに疵があり、えゝ年は四十一二で、立派たくな逞たくましい骨ほねぶと太の剛えらい奴で」

山「左様でげすか、そりやア立派な者でげすなア、何うもその才智もえらい者だが、私わしは何卒どうぞして其の方を見たいものでげすな」

久「なに、時々下屋敷へも来ますよ」

山「只今は何方いずかたに」

久「今は小川町おがわまちの上屋敷に居ります」

山「若もしお下屋敷へお出でになつたら一寸ちよつと教えて下さいませんか、何れそりやア尋常たゞもの漢では有りませんア、こりやア見たいな、何ういう男か一度は見て置きたいが何うか一寸ねえ」

久「そりやア造作もない事だから知らせましょう」

山「じゃア一寸知らせて下さい、別にお礼の致し方は無いが、あなたの非番の時に無代療治たゞをして、好いい茶を煎いれて菓子を上あげる位の事は致しますから」

久「それははや、そんな旨い事は無い、こりやア有難きつといが、それは茶と菓子ばかりで療治の代を取らぬと云うこたア有りません、今度来たら屹度きつと知らせますが、滅多こちらに此方へは来ません」

山「何うか知らせて」

久「えゝ宜しい」

山「さア御療治」

と云うので療治を致して、旨い菓子などを食わせて帰しました。跡で山平は、

山「屹度それに相違ない、何うかして見頭みあらわして遣りたいもの」

と、中村に頼んで櫻川の来るのを待つて居ると、天命の免れ難く、十月十五日に猿子橋でお繼が水司又市と出遇であいますると云う、これから愈々いよく巡礼敵討のお話でございます。

## 六十

さて図らずも白島山平が敵の手掛りを聞きましたから、お繼が帰つて来るのを待つて話を致すと、飛立つ程に悦び、

繼「少しも早く土屋様のお屋敷へ参つて」

と云うを、

山「いや未だ確しかと認めも付かぬうち、先せんの様に人違いをしては成らぬ、人には随分似た者もあり、顔に疵のある者も有るから、先達せんだつての人違いに懲こりて、これからは善よく心こころを落着け、確と面めん体ていを認めてから静かに討たんければ成らぬ、殊に汝そちは劍術が出来てもまだ年功がなし年も往いかぬから其の瘦やせう腕ででは逆とも又市には及ばぬ、私わしも共に討たんでは成らぬ、殊にお照の為にはお兄あにいさま様の仇あだであり、年頃心に掛けて居いる事ゆえ、お前一人で

討つわけには往かぬに依つて、宜く心を静めて又市が下屋敷へ参る時に認めて、私が討たせるから」

と言聞いけて置いきましたきが、お繼つぎは是を聞きいてからは何卒どう早く又市を見出みだしたいと心得、土屋様の長屋下を御詠歌を唄うたつて日々に窓から首を出す者の様子を窺うかがいます所が、ちょうど十月の十五日の日でござごいます、浅草の観音へ参詣を致して、彼あれから下谷へ出まして本郷へ上あり、それから白山はくさんへ出て、白山を流ながして御殿坂ごてんざかを下おり、小石川極楽水こいしかわごくらくみず自証院しようじんの和尚に逢あつて、丁度親父の祥月命日しょうつきめいにちいさく、聊いさか志を出して、どうかお経を上げて下さいと云う。和尚も巡礼の身みのうえ上うで聊かでも錢を出して、仏の回向えこうをして呉れと云うのは感心な志と思おもいましたから、懇ねんろに仏様へ回向を致します。お経の間待まちつて居りますと、和尚が茶を点いれたり菓子を出したり、また精進料理で旨うまいくはないが、有あり合あいで馳走ちそうに成なりまして、是から極楽水を出まして、彼あれから壱岐殿坂いせきのさかの下へ出て参り、水道橋を渡つて小川町へ来て、土屋様の下屋敷の長屋下を御詠歌を唄うたつて、ひよつとして窓から報謝ほうしゃと首を出す者が又市で有あつたら何ういたそうと、八方へ眼まなこを着きけて窓下まどしたを歩くと、十月十五日の小春風こはるなぎで暖あつたかいのに、すっぱり頭巾おもてで面おもてを隠かくした侍ぼかと、外ほかに二人都合三人連れんの侍が通用門を出まして小川町へかゝるから、顔を隠かくしては居るが、ひよつとしたら彼あれが

又市ではないかと、段々見え隠れに跡を追つて参ります、なれども頓と様子が分りませぬ。すると伊賀裏まで来ると一人の侍は別れ、後は二人になりまして、侍「あゝ大きに熱うございました」

と云う。これは成程熱い訳で、氣候がぼかく暖かいに、頭巾を冠つていては堪らん訳でございます。やがて頭巾を取ると総髪そうはつの撫付なでつけで、額には斯う疵がある、色黒く丈高せいく、頬こゝれから頤こゝれへ一いっばい杯ひげに髻ひげが生えている逞たくましい顔がんしょく色は、紛れもない水司又市でございますから、親の敵と直すくに討掛うちかかろうと思つたが、まだ連つれの侍が一人居りますから、段々見え隠れかくに付いて参ると、浜はま町ちようへ出まして、彼あれから大橋を渡りますと、また一人の侍は挨拶をいたして別れ、御船蔵前おふなぐらまえへ掛つて六間堀の方へ曲りますと、水司又市は一人になりまして、深川の元町へ掛つて来たから最う我慢は出来ません。先へ通り抜けると、御案内の通り片側かたかわは糶もみぐら倉で片側町になつて居りまして、竹細工屋、瀬戸物屋、烟草屋たばこやが軒を並べて居り、その頃田月堂という菓子屋があり、前町を出抜けて猿子橋にかゝりますると、此方こちうは猿子橋の際きわに汚い足代あじろを掛けて、苦とまが掛つていて、糶倉ぬりなほの塗直し、其の下に粘ねばつち土ちが有つて、一方には寸莎すさが切つてあり、職人も大勢這入つて居るが、もう日が西に傾きましたから職人も仕事をしまいかけて居りません、なれども夕日は一ぱいに映さす。

其の中に空は時雨で曇つて、少し暗くなりました所で、笠を取つて勿除け、小刀を引抜きながら、

繼「親の敵」

と名告りながらぴつたり振冠つた時は、水司又市も驚いたの驚かないの、恟り致して少し後へ退る。往來の者も驚きました。人中で始まつたから、はあと皆後へ下りました。ちようど此の時白島山平は少しも心得ませんから療治を致して一人の客を歸した後で、茶を点れて一服遣つて居りますと、入口から年四十二三の色の浅黒い女が、半纏を着て居りましたが、暖かいから脱ぎまして、包へ入れて喘々して、

女「少しお頼みでございませうが、手水場を拝借致しとうございませう」

照「はい其処は汚のうございませうが、何ならお上りなすつて」

女「いゝえ、汚ない処が心配が無くつて宜しゆうございませう」

とつかくと雪隠へ這入り頓て出て参つて、

女「あの少しお冷水を頂き度いもんでございませう、此処に有るのを頂いても宜しゆうございませうか」

照「其処にも有りますが、汚のうございませうから、是れで……さア水を」

と柄杓で水を出すから、

女「有難うございます」

と手に水を受けながら顔を見て、

女「おや」

照「おやまアお前はきんかえ」

きん「あら誠にお嬢様」

照「なにお嬢様どころではないお婆様だよ」  
ばあさん

きん「誠に暫く」

照「まア思おもい掛けない……あの旦那様きんが」

山「なに」

照「あのそれ団子屋のきんが」

きん「おや／＼あの山平様、誠に何うもまア貴方何う遊ばしたかと存じて居りましたが、

宜くまアそれでも……私わたくしは何うもお見掛け申したお方だと考えて居りましたが、貴方の方

がお忘れ遊ばさずにきんと仰しやつて下すつた」

照「私は彼の時は元服前で見忘れたろうが、私は何うも見た様だと思ひ、お前が口を利く

声柄こえがらで早く知れましたよ」

きん「誠に何うも思掛けない、まア〜旦那様御機嫌宜しゆう、何うしてね此処に入らっしゃるのでございますえ」

山「はい長い間旅をして、久しく播州の方へ参つて、少しの間世帯せたいを持って居たり、種々いろ／＼様々に流浪致し、眼病に成つてから故郷懐かしく、実は去年から此処へ来て世帯しよたいを持って居る」

きん「何うも些ちつとも存じませんよ、尤も此方こちらの方へは滅多には参りませんけれどもねえお嬢様、あらついお嬢様と云つて、あの御新造様え、私の亭主わたくしの傳次と申します者は旅魚屋でございますが、商売に出ても賭博ばくちが好きで道楽ばかりして、女房を置去り同様な音も沙汰もせずに居ましたが、旅魚屋の仲間の者が帰つて来て聞きましたら、三年前あとに信州の葉広山とか村とかいう処で悪い事をして斬殺きりころされたと聞きましたが、それとは知らず一旦亭主にしましたから、私は馬鹿が夫を待つという譬たとえの通り、もう帰るかと待つて居りましたが、三年経つても音沙汰がない所へ、それを聞いてから、日は分りませんが私わたくしもまア出た日を命日いのちひとしまして、猿江さるえのお寺へ今日お墓参りをして、其処に埋めた訳でも有りませんけれども、まア志のお経を上げて帰つて来る道で、あなたにお目に懸るとは本当にまア思掛け

ない事ですねえ」

照「本当にねえ、だがお前は矢張やっぱりあの上野町に居るのかえ」

六十一

きん「はい上野町に居りましたが、彼の近辺きんじよは家がごちゃ／＼して居ていけませんし、ちようど白山に懇意なものが居りまして、あちらの方はあの団子坂の方から染井そめいや王子おうじへ行く人で人通りも有りますし……それに店賃たなちんも安いと申すことでございますから、只今では白山へ引越ひっこしまして、やつぱり団子茶屋をして居りますがねえ、何うも何でございませぬ、何うもつい此方こちうらの方へは参りませんで」

山「じゃア何か屋敷の様子はお前御存じだろうが、武田や何か無事かえ」

照「あ、お父様とっさまやお母様つかさまはお達者かえ……今以て帰る事も出来ない身の上で」

きん「あの御新造様も大旦那様もお逝去かくれになりました、それに御養子はいまだにお独身ひとりで御新造も持たず、貴方がお出遊いでばしてから後あとで、書置かきおきが御新造様の手箱ひきだしの引出から出ましたので、是は親不孝だ、仮令兄たとえの敵を討つと云つても、女一人で討てるもんじゃ無い、

殊に亭主を置いて家出をしては養子の重二郎に濟まない、飛んだことだと云つて御新造は一層御心配遊ばして、お神鬮みくじを取つたり御祈祷をなすつたりしました、それから二年半ばかり経ちまして、御新造がお逝去になり、それから丁度四年ほど経つて大旦那様もお逝去

去」  
照「おやまあ然そうかえ、心得違ひとは云いながら親の死目しにめにも逢われないのは皆みんなな不孝の罰ばちだね……私も家うちを出る時には身重だつたが、翌年正月生れたんだよ」

きん「そう〜お懐妊でしたね」

照「それが女の子で、旅で難儀をしながらも子供たのしを樂みに何うかしてと思つて、播州の知し己るべの処へ行つて身を隠し、少しの内職をして世帯しよたいを持っていた所が、其処そこも思う様ように行かず、それから又長い旅をして、その娘こも十五歳まで育てたが亡なくなつたよ」

きん「へえお十五まで、それは嘸さぞまあ落胆がっかり遊ばしたでございましょう、お力落しでございましょう御丹誠甲斐もない事でねえ」

照「まあ種々いろく話も聞きたいから少し……」

山「何だか表が騒がしいが何だ」

と云つて聞いて居ると、ばら〜〜〜と人通りがして、

甲乙「なに今敵討が始まった、巡礼の娘と大きな侍と切きり合あいが始まった、わーツ〜」

と云つて人が駈けて通るから山平は驚きまして、

山「これ何を、それ大小を出しな」

きん「何でございますえ」

山「何でも宜しいから大小を……きんやお前こゝ此処こゝに居て……お前居ておくれ、二人往いかなければならんから留守居をして」

金「何うなすつたんでございますえ」

山「何うなすつた所ところじやア無い何うでも宜しいから早く」

と是れから裾すそを端折はしよつて飛出したが、此方こちらは余程よつほど刻限が遅れて居ります。お話は元へ戻りまして、お繼が親の敵と切りかけました時は水司又市も驚いて、一間ばかり飛退とびしきつて長いのを引抜き、

又「狼藉者め」

と云うと往来の者はどやどや後あとへ逃げる、商人あきんど家ではどか〜ツと奥に居たものが店の鼻ツ先へは駈出して見たが、少し怖いから事に依つたら再び奥へ遁にげ込もうと云うので、丁度臆病な犬が魚を狙うようにして見ている。四辺あたりは肅然しんとして水を撒いたよう。お繼は

鉄切声、親の敵と呼んで振冠ふりかぶったなり、面体めんていも唇の色も変つて来る。然そうなると女でも男でも変りは無いもので、

繼「私を見忘れはすまい、藤屋七兵衛の娘お繼だ、汝てまえは永禪和尚で、今は櫻川又市と云おうがな」

と云う其の声がぴんと響く。その時に少し後あとへ下さがつて又市が、

又「何だ覚えはないわ、左様な者でない」

とは云つても覚えが有るものでございませうから、其所そこは相手が女ながらも心に怯おそれが来て段々後へ下る。すると段々見物の人が群たかつて、

甲「何でげす」

乙「今私は瀬戸物屋へ買物に来て見ていると、だしぬけに親の敵と云うから、はツと跡へ下ろうと思うと、はツと土瓶を放したから、あの通り石の上へ落ちて毀こわれてしまいました、あゝ驚きました、何あうも彼の娘でげすな」

甲「へえ彼の娘が敵討だと云つて立派な侍を狙うのですか、感心な娘で、まだ十七八で美しい女だ、今は一生懸命に成つてるから顔つきが怖いが、彼あれが笑えば美しい女だ」

乙「へえ、それは感心、あゝ云う巡礼の姿に成つて居るが、やっぱり旗はたもと下のお嬢様か何

かで、劍術を知らんでは彼の大きな侍に切掛けられアしない、だが女一人じゃア危ないなア、誰か出れば宜いなア」

丙「危ないから無闇に出る奴は有りやアしません」

甲「だって向うは大きな侍、此方はか弱い娘で……あゝけんのんだ」

と見物がわい／＼と云う。

丙「おい早く差配人さんへ知らせろ」

丁「おれの差配人さんでは間に合わない、何処の差配人さんへ然う云うのだ」

丙「差配人さんが間に合わぬなら自身番へ知らせろ……あッあ……危ねえ／＼敵討は何とか云いましたか」

乙「何と云ったか聞えやアしない」

乙「何とか云ったツけ、汝を討たんと十八年」

甲「何を云やアがる騒々しい喋つちやアいけねえ」

丙「あゝ危ねえ／＼」

と拳を握つて見ている、人は人情でございますから、何うぞして娘に勝せたい、娘に怪我をさしたくないと見ず知らずの者も心配して、橋の袂に一抔人が溜つて居りますが、中

々助太刀に出る者は有りません。

甲「向うに侍が二人立つて見ているが、彼奴が助太刀に出そうなもんだ、何だ覗いて居やアがる、本当に不人情な侍だ、あの畜生打擲れ」

とわい／＼云う中に、

繼「親の敵思い知ったか」

と一足踏込んで切下すのを、ちやり／＼と二三度合せたが、一足下つて相上段

に成りました。よく上段に構えるとか正眼につけるとか申しますが、中々劍術の稽古とは違つて真劍で敵を討とうという時になると、只斬ろうという念より外はございませんから、決して正眼だの中段などという事はない、唯双方相上段に振上げて斬ろう／＼と云う心で隙を覗う、水司又市も眼は血走つて、此の小娘只一撃と思いましたが、一心凝つた孝女の太刀筋、此の年四月から十月まで習つたのだが一生懸命と云うものは強いもので、少しも斬込む隙がないから、此奴中々劍術が出来る奴だなど思い、又市も油断をしませんで隙が有つたら逃げようかなんと云う横着な根生が生まれて、後へ段々下る、此方も油断はないけれども年功がないのはいかぬもので、段々呼吸遣いが荒くなつて勞れて来るから最早死物狂いで、

繼「思い知ったか又市」

と飛込んで切込むのを丁と受け、引く所を附け入って来るから、一足二足後へ下ると傍の粘土に片足踏みかけたから危ういかな仰向にお繼が粘土の上へ倒れる所を、得たりと又市が振冠ふりかぶって一打ひとうちに切ろうとする時大勢の見物の顔色がんしよくが變つて、

見物「あゝ」

と思わず声を上げました。

六十二

見物「あゝ危ねえ、誰か助太刀が出そうなものだ」

と云つて居るが、誰も出る者はない。すると側に立つて居たのは左官の宰相さいとりで、筒袖つっすの長い半纏を片端折かたはしおりにして、二重廻りの三尺しゃくを締め、洗い晒さらした盲めくらじま縞まの股引はだしをたくし上げて、跣足はだしで泥だらけの宰相棒さいしやうぼうを持つて、怖いから後へ下つて居たが、今鼻あは先へ巡礼が倒れ、大の侍が振冠ふりかぶつて切ろうとするから、人情で怖いのを忘れて、宰相棒さいしやうぼうで水司又市の横つらつ面つらをぼんと打ぶつた。

見物「あゝそら出たゝ助太刀が出た、誰か出ずには居ないで、何うも有難うございます、いゝえ中々一人では討てる訳がない、あれは姿を※して居ても、屹度旗下の殿様だ、有難いゝゝ」

と喜び、わアゝと云う。又市は横面を打たれるとべつたり顔に泥が付いたが、よもや斯ういう者が出ようとは思わぬ所だから、是れに転動したと見え、ばらゝゝゝゝゝと横手へ駈出した。すると宰相は追掛けて行つて足を一つ打払うと、ぱたゝり倒れましたが、直ぐに起上ろうとする処を又た打ちますと、眉間先からどつと血が流れる。すると見物は尚わいゝゝ云う。

見物「そら逃げた殴れゝゝ」

と云う奴があり、又石を投げる弥次馬が有るので、又市は眼が眩んで、田月堂という菓子屋へ駈込んだから菓子屋では驚きました。店の端先へ出て旦那もお内儀も見ている処へ拔身を提げた泥だらけの侍が駈込んだから、わツと驚いて奥へ逃込もうとする途端に、蒸したての饅頭の蒸籠を転覆す、煎餅の壺が落ちる、今坂が転がり出すという大騒ぎ。商人の店先は揚板になつて居て薄縁が敷いてある、それへ踏掛けると天命とは云いながら、何う云う機みか揚板が外れ、踏外して薄縁を天窗の上から冠つたなりど

んと又市は揚板の下へ落ちる、処へ得たりとお繼は、

繼「天命思い知ったか」

と上から力に任して扶こじったから、うーんと苦しむ。すると嬉しがって左官の宰取が来まして

宰取「この野郎く」

と無闇に殴る処へ、人を分けて駈けて来たのは白島山平。

山「巡礼の娘お繼と申す娘は何処どこに居りますか」

繼「あゝお父様とっさま」

山「おゝくくく討ったか」

繼「お父様宜く来て下すった」

山「それだから申さぬ事じゃア無い一人で……怪我は無いか」

繼「いゝえ怪我は致しませぬ、首尾好よく仕留めました」

山「あゝそれは感服、敵の又市は何処どこにいる」

繼「縁の下に居ります」

山「縁の下に……じゃア縁の下へ隠れたか」

繼「いゝえ只今落ちましたから其処そこを上から突きましたので」

山「うん然そうか、やい出る」

と髻たぶきを取つてずる／＼と引出しますと、今こじられたのは急所の深手、

又「うーん」

と云うと田月堂の主人あるじはべた／＼と腰が抜けて奥へ逃げる事も出来ません。山平が是を見ると、地面まで買つてくれた田月堂の主人が鼻の先に居るから、

山「これは何うもお店を汚けがしまして何とも、御迷惑でございましょうが、これは手前娘で、先達せんだつて鳥渡ちよつとお話をいたした、な、が全く親の仇あだうち討うちに相違ちがひございませぬ、委くわしい事は後でお話を致しますが、決して御迷惑は懸かけませんから御心配なく」

と云つたが田月堂の主人は中々口が利けません。

田月の主「え…あ…うん…うんお立派な事でございます」

と泣声を出してやつと云いました。

山「さア是れへ出る、これへ参れ…これ見忘れはせぬ、大分だいぶんに汝うぬも年を取つたが此の不届者てまえめ、汝てまえが今まで活いきているのは神仏しんぶつがないかと思つて居た、この悪人てまえめ、汝てまえは宜いくも己の娘のおやまを、先年信州白島村に於て殺せつがい害がいして逐電致したな、それに汝は屋敷を出

る時七軒町の曲り角で中根善之進を討つて立退いたるは汝に相違ない、其の方の常々持つて居た落書の扇子が落ちて居たから、確に其の方と知っては居れど、なれども確かな証がないから其の儘打捨ておかれたのであるが、少女に討たれるくらいの事だから、最早どうせ其の方助かりはしない、さア汝も武士だから隠さず善之進を討つたら討つたと云え、云わぬ時に於ては五分試しにしても云わせる、さア云わんか」

と面を土に摺付けられ苦しいから、

又「手前殺したに相違ござらん」

と云うのが漸と云えた。

山「繼、予て一人で手出しをしては成らぬと云つて置いたが、お前一人で此奴を宜く討つたな」

繼「はい此処においてなさいますお方様が、私が転びまして、もう殺されるばかりの処へ助太刀をなすつて下すつたので、何卒此のお方様にお父様お礼を仰しやつて」

山「うん此のお方が……何うもまあ」

宰相「はアまことに何うもお芽出度うございます、なに私は側に立っていて見兼たもんですから、ばかり一つ極ると、驚いて逃げる所を又打殴つたんだか、まア宜い塩梅で…

：お前さんは此の方のお父さんで」

山「え、何うも恐入りました、只今は然ういうお身形だが、前々は然るべきお身の上のお方と存じます、左もなくて腕がなければ中々又市を一撃にお打ちなさる事は出来ぬ事だな、え、御尊名は何と仰しやるか必ず然るべきお方でございましょう」

宰相「うーん、なに私は弥次馬で」

山「矢島様と仰しやいますか」

宰相「うん、なに矢島様じゃアねえ、只私は見兼たからばかり極めたので……お前さん親の敵だつて親が在るじゃアねえか」

山「いやこれは手前養女でござる、実父は湯島六丁目の糸問屋藤屋七兵衛と申す、その親が討たれた故に親の敵と申すので、只今では手前の娘に致して居ります」

宰相「え、藤屋七兵衛、おい、それじゃ何か、妹のお繼か」

繼「あれまア何うも、お前は兄さんの正太郎さんでございいますか」

正「おゝ正太郎だ……何うも大きくなりやアがった此畜生、親父は殺されたか……えゝ  
なに高岡で、然うか、己ア九才の時別れてしまったから、顔も碌そっぽう覚えやしねえ  
くれえだから、手前は猶覚えやアしねえが、己が此処へ仕事に来ていと前へ転んだから、  
真の弥次馬に殴つたのが、丁度親父を殺した奴を打、殴ると云うなア是が本当に仏様の引  
合せで、敵討をするてえのは……何う云う訳なんです」

山「訳を申せば長いことでござる、予て噂に聞きましたがお前が正太郎様で、葛西の文吉殿  
の方に御厄介に成つていらした」

正「え……彼れは叔父で……お繼、何か小岩井のお婆さんの処え行きてえから、お婆さん  
に己の詫言して呉んねえ、父の敵を討つ助太刀をしたと云う廉で詫言をして呉んねえ、  
己アもう腹一抔借尽して、婆さんも愛想が尽きて寄せ附けねえと云うので、己も行ける  
義理は無えからなア、土浦へ行つて燻ぶつて居たが、その中に瘡は吹出す、帰る事も出来  
ず、それからまア漸との事て因幡町の棟梁の処え転がり込んだが、一人前出来た仕事  
も身体が利かねえから宰取をして、今日始めて手伝に出て、然うして妹に遇うと云うなア  
不思議だ、こりやア神様のお引合せに違え無え、何うも大きく成りやアがったなア此畜  
生、幼せえ時分別れて知れやアしねえ、本当に藤屋の娘か、おい立って見や……これを

お前めえさんのとこの子にしたのか……一廻り廻れ」

などと云う。

山「誠に是れは思掛けないことで、何うもその死んだ七兵衛殿のお引合せと仰しやるは御尤もなこと、実は私の忤山わし之助と申す者と三年前から巡礼を致して、長い間旅寝の憂苦うきくろ勞うを重ね、漸ようやく今日仇あだを討ちましたが、山之助は先達せんだつて仔細有つて亡なりました、それ故に手前忤の嫁故引取り娘に致して、手前が劍術を仕込みまして、何うやら斯うやら小太刀の持ち様も覚える次第、まことに思掛けないことで、葛西の文吉様にもお世話に成りましたから、手前同道致してお詫言に参りましようが、まア兎も角も敵の……えゝ人が立つて成らぬなア」

正「私わっちが一太刀」

山「いや、お前はお兄様あにいさんでも初太刀しよたちは成りません、お繼は七年このかた親の仇を討ちたいと心に掛けましたから、お繼が初太刀で、お前は兄様あにさんでも後あとですよ」

正「兄でもからももう面目次第しでえもねえ、じゃア後で遣つ付けやしよう、此様こんな嬉しい事アござえやせん……何でえ然そう立つて見やアがんな、彼方あっちへ行け、何だ籠べらぼう棒めえ己は弱虫で泣くのじゃアねえ此ん畜生……早く遣付やっつけて」

山「なアに早く遣つ付けろと仰しやつても、長く苦痛をさして緩りと殺すが宜い」

繼「これ又市見忘れはすまい、お繼だ、よくも私のお父様を薪割で打殺して本堂の縁の下へ隠し、剩え繼母を連れて立退き、また其の前に私を殺そうとして追掛けたな」

と続けて切ります。

山「さア〜照やお前も」

照「はい、兄の敵又市覚悟をしろ」

と切る。

山「さア〜今度は私に遣らしてくれ、可愛い忤が不便の死を遂げたも此奴の為、また娘を斬殺したのも此奴の業、此奴め〜」

と四つ角で鮪を屠すようである。

山「さア兄様だ」

正「今度ア私の番だ、此ん畜生め親父を殺しやアがつて此ん畜生め」

と鏝で以て竈の繕い直しをするようにさん／＼殴つてこれから立派に止めを刺す。其の中に諸方から人が出て捨て、も置かれぬから、お繼と山平は直様自身番へ参りまして、それより細やかに町奉行へ訴えに成りましたが、全く親の敵討と云う事が分りまして、殊

に悪事を重ねましたる水司又市でございますから、別段にお咎も無く此の事が榊原様のお屋敷へ聞えました所から、白島山平並にお照は召返しの上、彼のお繼は白島の家の養女になり、後に養子を致して白島の名跡をを立てますと云う。また左官の正太郎は白島山平の手蔓てづるから正道しやうどうの者で有ると榊原様へお抱えになり、後には立派な棟梁となり、正太郎左官と云われて、下谷茅町したやかやちやうの横池よこちやういけの端へ出ようと云う処に、つい十一二年前まで家も残つて居りました。目出たく親の仇あだを討ちまして家栄えますると云う、巡礼敵討の物語は是が結局でございます。

(塙小相英太郎速記)



## 青空文庫情報

底本：「圓朝全集 卷の二」近代文芸資料複製叢書、世界文庫

1963（昭和38）年7月10日発行

底本の親本：「圓朝全集 卷の二」春陽堂

1927（昭和2）年12月25日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

ただし、話芸の速記を元にした底本の特徴を残すために、繰り返し記号はそのまま用いました。

また、総ルビの底本から、振り仮名の一部を省きました。

底本中ではばらばらに用いられている、「其の」と「其」、「此の」と「此」、「彼《あ》の」と「彼《あの》」は、それぞれ「其の」「此の」「彼の」に統一しました。

また、底本中では改行されていませんが、会話文の前後で段落をあらため、会話文の終わりを示す句読点は、受けのかぎ括弧にかえました。

入力：小林繁雄

校正：松永正敏

2005年3月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 敵討札所の靈騷

三遊亭圓朝

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 鈴木行三校訂・編纂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>